

# 第六節 伝 承

## (一) 方 言

### 1 名詞的なもの

アエー	味
アガ	のら(野良)
アガト	家の昇降口
アカマンマ	血
アシオコ	足跡
アナデンジヨウ	洞穴 <small>ほらな</small>
アマコ・アマツチヨ	女の子

第六節 伝 承

1 この方言、訛語くわびごは、東庄地方に古くから使われていたのを、集録したものである。

2 次のように分類した。

(1) 名詞的なもの

(2) 主に動作をあらわすもの

(3) 植物、動物名

3 配列は、五〇音順とした。

4 意味の同じもの、発音の類似するものは、一部除外した。

5 町内でも、多少発音の違うものがある。

アラクレ	水田の二番耕
アイツギ	順ぐりに伝言する
イケボチ	魚かご
イシ	お前・君
イシナゴ	足首の一部(踝)
イジヨウ	当番
イボチコ	小さい・貧弱

ウダル・ユダル	炊ける
ウシロボクトウ	後頭部
ウライダ	天井の板
エンマ	舟の付け場・江間
エマシ	麦を炊いたもの
オイゴミ	鶏舎、とりごや
オオナ	哇呼
オギリ	薪などの残火
オジイ	弟、次、三男
オジクソ	臆病者
オシボク	茅屋根の押え竹
オツク	くすり
オツサマ	次、三男の称
オッチイ	汁、おつけ
オド	父親
オダ	稲架
オダヤ	台所
オバア	妹

---

オメイサマ	お前様、仏壇
オライ	俺の家
オロヌキ	間引
オンツアン	おじさん
カッチゲエ	稲の刈りおわり
カビタ	稲株田
カマカゼ	小旋風
カマヤ	炊事場
カヤ	落葉の炊きもの
カンカン	幼児の愛称(坊・孫)
カンジョウマゴ	同右
ガンゾウ	乱れ髪
ガンダメシ	よく炊けない飯
ガンダヤ	古物屋
カリコ	枯れ枝
カンパレエ	株田の田打仕舞
キツネイト	機糸のはし
クダゲ	唾
クデイ	むずかしい

クネ	垣根
ケイコ	貝がら
ケイド	門(入口) 近くの道路
ケド	腐食土の一種
ケムジャラ	多毛
ゲンブ	こま
コオレン	せんべい
コサ	田、畑へ沿う山へり
ゴドウ	わらくず
サシク	集りごとの会費
サンガ	坂
サンキョ	三脚
シキ	底
シタジ	汁
シツカリ	たくさん、いっぱい
シビタ	おしり
ジネンジョウ	自然のままの根採
ジャーボー	葬式
シヨージ	体罰

---

シヨツカタ	背負梯
シヨクスギ	過分
ジョーボ	宅の入口
ジョーヤ	常々
ジンダツケ	糠づけ
シンノウ	葬儀及振舞など慰勞の馳走
ズーグチ	筒の口、排水の出口
ズーボウ	水を汲み上げる道具
セイバン	まないた
セナア	長男、或いは兄
センニ	先ごろ
ソウレエ	田植始め
ソッコウ	傾斜地
ソツボウ	外の方向
タルイレ	結納
チョウロク	満足
チャツポ	帽子
チャンカア	痘根
チャンカボンカ	でこぼこ

ツバ	釜
ツマツカシイ	儉約
ツボ	屋敷続きの土地
デイ	上座敷
テカ	はげ
テゴダ	手伝い
テシヨウ	小皿
テッペンシユーギ	祝儀の一種(略式)
テツパツ	茶碗酒
テツポウ	筒袖
デマル	離婚の婦人
テング	自慢、鼻高々
ドウコ	ぶりぎ缶
トウレイ	後妻
トウゴ	肥だめ
トーシ	ふるい分ける道具
トシリ	戸袋
ドデラ	かいまき
トボーグチ	出入口
ナナ	飯

---

ナアヤー	兄
ナレイ	東北風
ニワバ	母屋の土間
ヌカッパ	ぬかるみ
ネエコウ	やりとりなし
ネー	姉
ネギ	際、きわ
ネゴボー	朝ねぼう
ノウ	収穫物の積塚
ノシタテ	外板張
ノーホド	たくさん、いくらでも(あ る)
ノノウ	坊主
ノンノサマ	神仏
ハゴタ	はした、わずか
ハダツケ	単衣 <small>ひとへ</small> もの
ハンコ	袖なし上衣
ハンナ	牛馬の手綱
パンニョウ	担ぎかご(搬入)
ハブチ	物の端

バンジョウ  
ヒシテ  
ヒトカダギ  
ヒトマルキ  
ビヤク  
フダ  
フタゲ  
フータブ  
フツセ  
ブドツパナ  
フヌケ  
ヘグサレ  
ヘンコ  
ホウタマ  
ボサ  
ホソビ  
ボツケ  
ボツタラ  
ボツチ  
ボデエ

第六節 伝承

大工  
一日  
一食  
一束  
山土の崩れる  
多い、たくさん  
唾  
頰  
自然に生える  
子供の濃い鼻汁  
馬鹿者  
たくさん  
曾祖父(母)  
頰  
やぶ  
ほくろ  
がけ、山崩れの跡  
ぼろきれ  
俵のふた  
背負いかご

ホリコ  
ボンカ  
マアス  
マキメ  
マチ  
マッコブチ  
マメゼイ  
マヤモノ  
ミノデ  
ミヨ  
ムセー  
ムツラボウ  
メントウ・メントコ  
モエチャリ  
モク  
モッターラ  
モロ  
モンピキ  
ヤケツリ

溝みぞ  
吹出物(皮膚病の一種)  
枳まき  
旋毛せんもう  
まつり、いち(市)  
いろりのふち  
豆の甘い煮汁  
まやかし物、にせ物  
田水の流れ出る所  
溝  
多くてなかなか終らない  
無愛想者  
穴  
燃え残り  
藻  
たわし  
室、むろ  
股引、ももひき  
やけど、火傷

ヤマ  
ユスイ  
ユデ  
ヨイ  
ヨーギリ  
ヨコダ

眉まゆ  
留守居  
湯手拭  
共同作業  
魚切り庖丁  
担ぎ籠

ヨコベソ  
ヨワッピイ、ヨワクソ  
リツツオー（ロツツオー）  
ログドッポウ  
ワッカー  
ワッパ

へそまがり  
臆病者、弱者  
稲を束ねるなわ  
耳下腺炎  
上側  
輪

## 2 主に動作をあらわすもの

アカハレイ  
アガッパン  
アグデイ  
アジエウンタ  
アツボッテイ  
アッペイ  
アッタラモノ  
アビル  
アンケイ  
アデゲイツッポウ

舟の水を払い出す  
大恥  
悪口  
どうした  
厚く見えるさま  
きたない  
もったいない  
泳ぐ  
あのくらい  
いいかげんにやる

アンシロ  
アンド、カンダ  
アンゴエル  
アンベエワリイ  
アンデヤ  
イイアンペイ  
イシテイ  
イキアン  
イキスカネー  
イジル

なにしろ  
何や、かやと  
またいて越える  
加減が（病気など）悪い  
どうしてか  
良い加減  
粗悪、下品  
行くついで  
意（心）が好かない  
苦しめる

イカイ、イケエ  
イツサキ  
イツコクモノ  
イブイ、ユブイ  
イガンベイ  
イッテンベイ  
イリキレイ  
インベエ  
ウステレ  
ウダデエ  
ウッチャル  
ウヌラ  
ウンナラガス  
エナセ  
オアガンナ  
オオナサラ  
オオベシ  
オシマイナ  
オグンナ  
オンチャク

大きい  
一番先  
剛情者  
けむたい(煙)  
いいだろ  
行つて見よう  
好ききらい  
行こう、行くべえ  
馬鹿者  
つらい、苦しい  
捨てる  
おまえら  
馬力をかけること  
勢い  
日中の挨拶(今日は)  
せっかく、わざわざ  
大食らい  
夕方から夜の挨拶  
ください(敬語)  
着飾る

オツクルゲエス  
オツケル  
オツコスル  
オツチラレル  
オツチャグ  
オツバル、オブサル  
オツピング  
オペラ  
オンガク、オンゴル  
オンダス  
カゲコロ  
カジケル  
ガシマケ  
カソウ  
カックラース  
カックラウ  
カックルゲエス  
カツチャグ  
カナツレエ  
キドコロネ

押しかえす(倒す)  
のせる  
押しこする  
(成長を抑えられる)  
物をこわす  
背負わるる  
押しつぶす  
おしゃべり  
折る(枝など)  
追い出す  
かけ足競走  
寒さで(指が)自由に動かない  
貪り食う  
誘う(友人など)  
頭を叩く  
頭がおかしい  
頭から倒す  
掻き裂く(爪などで)  
だるい  
ところ嫌わず寝る

キモガイレル	腹立たしいこと
ククラゲル	もつれる(糸など)
クサル	挑む <small>いざ</small>
クツツガレル	かみつかれる
クツチャベル	よく喋る
クビル	束ねる、しばる
クンノム	呑みこむ
ゲイモネエ	無駄、無益の意
ゲッタグル	蹴つとばす
ゲッテイクソワリイ	格好が悪い、恥かしい
ゲツポ	嘔吐、吐き気
コッチャコウヤ	こつちへこいよ
コスイ	ずるい
コエー、コワイ	体が疲れた
コッペイ	出過ぎ者
ザッカケ	粗末な行ない
サヅル	なめる
サバラヨム	余計に勘定をしておく
ザンバレエ	残り物を仕末する
シヅゲル	田畑に物を作る

---

シッタグル	シッタグル	うばい取る
シッタデル	シッタデル	上へあげる(人や物を)
シマアベ	シマアベ	おしまいにしよう
ジャミル	ジャミル	(水分の)にじみひろがる
シッカマヌク	シッカマヌク	うらをかか
ジュウゲイ	ジュウゲイ	水浸し
シヨツパナ	シヨツパナ	一番先
シヨロビグ	シヨロビグ	うしろに物を引く
ジンギョウツキ	ジンギョウツキ	地搗ぎ
スク	スク	敷く
スナハダキ	スナハダキ	旅帰りなどの慰労会
スルス	スルス	糲すり
スナナベル	スナナベル	滑る
セイドモネエ	セイドモネエ	無益
セイキリ	セイキリ	精一ぱい
セツチヨウ	セツチヨウ	いじり廻す
センニ	センニ	先ごろ
ソシタテル	ソシタテル	とげをさす(指など)
ソベル	ソベル	寝ころぶ
ソローカ、ソロット	ソローカ、ソロット	静かに



ダゲエル  
ダス  
ダッテエ  
ダッペイ、ダンペイ  
タガマル  
ダバヅク  
ダンマル  
チャンケイ  
チョウス  
チャッチャカカア  
チャリ  
ツッコジル  
ツツクルゲース  
ツッポース  
ヅネエ  
テンツルテン  
テンズケ  
テンデンシノギ  
ドギマ

抱く  
与える  
汚い  
(そう) だらう  
折り曲り、輪になる  
多過ぎる  
だまる  
小さい  
ひやかす  
軽率  
談話をにごす  
落ちる  
突いてたおす  
突きさす  
法外、ずるい  
短い着物  
いきなり  
自分勝手  
あわてもの

トツペドモネエ  
トツバグル  
ドウナニスル  
ナジョウシタ  
ナス  
ニュージル  
ヌダル  
ネセブセル  
ネアシ  
ネツチョウ  
ノガッポイ  
ノス  
ノンガウ  
ハシヨール、ハシル  
ハゼコ  
ハツクルゲエス  
ハックラース  
ハズス  
ハヤス  
ハンナグル

途方もなく調子はずれ  
とりはぐれる  
無駄にする  
如何した、どうした  
産む  
忍耐する  
這う  
寝むらせる  
寝つき初め  
妨害、いじわる  
薬くずなどがかゆい  
打ちのめす  
拭く  
襦をまきあげる  
食べた物を吐き出す  
張りたおす  
張りくらわす  
失敗する  
上げたり下げたり  
牛馬を打つこと

ビダケル	甘える
ヒッチギル	つねる
ヒッチョビグ	引張る
ビツタコイ	うすい、平たい <small>ひら</small>
ヒョーゲル	おどけ
ヒヨウヒヤク	おどけ者
ヒョングル	とび出る(水など)
フグス、フングス	こわす
ブスグレル	不満な顔をする
ブチガル	坐る
ブツタグル	強奪
ブツチャク	破壊する、こわす
ブツチゲエ	互いちがい
ブツパナス	勢いよく放つ
フルク	振るう
ブンマース	振り廻す
ヘガサレル	負かされる(勝負事など)
ホウズモネエ	際現 <small>さいげん</small> がない
ホキル	育つ、繁る

---

ポツチャ	ぬれる(水に)
ホマチ	へそくり(公然なる)
ホコス	火を焚きおこす
ホンゴス、ホングス	ほぐす、ふぐす
ボンダス	吐きすてる
マアジル	待つ
マジョウニ	正確に
マデーロ	しまり、かたづけ
マビル	混ぜる
マルク	束ねる
ムギツコロ	互いに向きあう
ムシグル	むしる
メケントウ	目測
モジク	もぐ
モジゲル	はずれる
モジャッポイ	物を粗末にする
モッカバラ	じきに腹を立てる
モンキン	かんしゃく、短気
ヤアコイ	軟らかい

ヤアベ  
ヤツカム  
ヤンペイ、ヤツペイ  
ヤンメイ  
ヨジル

行こう  
そねむ  
やろう  
やるまい  
ひねる(捻る)

ヨッタグレ  
ヨプテ  
ヨンジヤラベッコ  
ワッチャク

よっぱらい、酩酊  
ひと晩中  
ふら／＼して安定しない  
割りこわす

### 3 植物・動物名

アエ  
アックリ  
イボクイ虫  
ウシメンボウ  
オオガ  
オオヒンチヨコ  
オニムシ  
オオゼイミ  
カナカナ  
カマチコ  
キチクイナ

枇いな(未熟なもみ)  
あけび  
かまきり  
牛  
稲の害虫、かめ虫  
つくつくぼうし  
かぶと虫  
あぶらぜみ  
日ぐらしぜみ  
とかげ  
水鳥の一種

クチャメ  
ゲエロ  
サス  
シビ  
ズーキ  
スイガン  
スクモ  
セツカア  
タツボ  
タンケ  
タンボ

まむし  
蛙  
みょうがの若い茎  
薬の稽(しべ)  
里芋の茎  
西瓜  
粳がら  
材木の背皮  
たにし  
烏貝  
椿

チツチグラ	すずめ
チョウマン	蝶々 <small>たてたて</small>
チゴクソバ	どくだみ
デエゴ	大根
デンボウ	つぼみ
トウカ	狐
トロミ、トロロ	山芋汁
ハガジ	むかで
ハザアラ	雑木の枝葉（伐りとったもの）
ハットリ	いなご
ヘイビ	蛇

(二) 俚諺りげんと俗信

ヘイボ	はい
ヘッピリマメ	そら豆
ヘボナリ	果実のうらなり
ボック、ボツカ	木の切株
ボツチャーラ	靱の混った薬くず
マツキノコ	初茸
ミカゴ	山芋の美
メンチョ	牝鳥
メソ	うなぎの子
モンズ	もず
ヤル	赤浮き草
ワンクイムン	ゴキブリ

俚諺とはあまり耳なれたことばではないが、民間のことわざとか、地域に広まっていることわざの意味である。俗言とは日常のくだけた会話に用いられるくだけたことばを意味している。

したがって、これらの中には、当該地域に生活する人々の特色をよく反映しているものが多い。すなわちこれらは、時代・産業・経済・信仰などを背景にしているものである。

ここに引用したのは、現時点で収集してきたものを整理したものである。数は少ないが、前述の如き特色がよくあらわれている。

## 1 俚 諺

よいとこまんざい萬歳、佐原のしゆく

気嫌よく出かける時の返し言葉に、よく使われた。「今日は、どこ行きたい?」「よいとこ………のしゆくよ。」

高部のどんどかつか、白ぎつね

どんどかつかとは、神社のお祭りの太鼓の意味であろう。高部区の稻生神社の使いは、白狐だといわれている。

春の下北しもきた、黒金通す

春になっても、利根川下流の北側から吹いてくる風(東北)は、たくさんを着物を着ても肌身にしみ通るの意。

春は海から、秋は山から

笹川あたりの天気予報の格言。春の空は海の方から、秋の空は山の方(西方)から変化する。したがって、春は海の空を、秋は山の空を見れば明日の天気がわかる。

草の見置ぎと、嫁の見置きは出来ない

あの場所を草刈りしようと思っっている内に、他人に刈られてしまう。あの娘を嫁にと思っっているうちに、よそに貰われてしまう。

流れ川のふんどし

杭(くい)にひっかかったら、なかなか離れない。ちょっと立寄ってなかなか帰らない者のたとえ。

あいや(紺屋)のあさって

昔は、染物屋(あいや)が方々にあった。あさってまで出来る、とうけあいのよいあいやだが、実際にはあまりあてにならない。

青馬の祇園はナイシヨ祇園 平山の祇園は、麦飯祇園

ぎおん祭りには、親戚など招いて盛大だが、青馬区、平山区では、客を招かず御馳走もつくりたくない意。

赤飯は半日休み、餅は一日休み

親が死んでも、食休み

親が死ぬような悲しいことがあっても食事のあとは休む。

一多古、二田部、三夏目

昔は米の産地として、有名だったという。

家の米飯より、隣りの麦飯

どうも隣の麦飯の方がうまさうだ。隣りがよく見える意。

から茶は、麦つきよりこわい

お茶だけで、お茶うけが出なくては、麦を搗くより辛いよ(麦つきは最高の骨折り仕事だった)。

朝寝坊の宵っ張り

朝寝坊は、夕方から夜にかけて気を張る(頑張る)。

わかめの行列

ポロポロになった着物を着ている者のたとえ。

さっぱの梶かじ

サツペ舟の梶はきかない（効果が無い）。いくら論しても、効果のない者のたとえ。

ホマヂを取る

穂待とは、落穂を待つという意味であるという。もとは、稲を束ねてオダ（稲掛け）などにかけて干されたものだが、慣習としてオダからこぼれ落ちた穂は、誰が拾ってもよいことになっていた。棒手ぼてえ（かご）を背負って落ち穂を拾う人も多く、中には落ち穂拾いといいながら、実際は無理に落ち穂をこしらえる人もあったところより、内緒で物をくすねたりする小悪事を称して「穂待ちを取る」という。

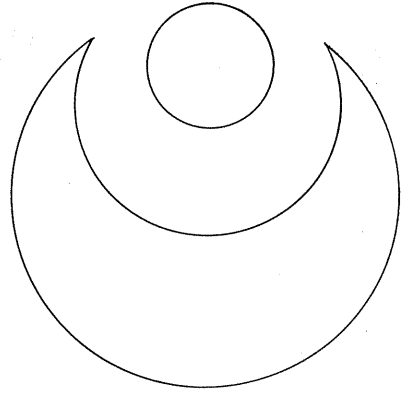
棒手振りぼてえふり

その昔、「ボデエ振り」という商人がいて、農婦や子供たちが旦那に内緒で「ホマヂを取った」のや、あまりおっぴらにできない物を、相手の弱みにつけこんで安値で買い歩いた。この人たちは、買ったものの中味が見えてはまずいので、籠かごの編み目のすきまのないようにしたものを買って歩いた。後に、この籠が一般にも使われるに及んで「棒手振り」が背負い歩いたところより、棒手ぼてえといわれるようになった。

## 2 俗 信

そうどめ（早乙女の意か）の餅

旧五月の田植時季に、けがのないように、仕事がスムーズにいくようにとの願いから、正月の三ヶ日ぐらいの間



第2図 月星の紋

に、家々を廻って餅をもらって歩く風習があった。ポデエを背負って「祝っておくんな」といって各家々を廻る。恥かしい人は、手拭いで顔をかくしたという。主に中年過ぎの女性が多かった。

**里芋さといもをつくる可べからず**

東和田区には、先祖代々からの伝承によって、里芋を栽培してはならない家が数戸ある。但し、よその家から貰って食べる分には差仕えないという。その理由には、二通りの説がある。

一つはその昔、中世末期にこの上代郷一帯は、房州里見の軍勢に攻められて大敗を喫したという夏方合戦の伝説がある。郷土にとっては大変な事件だったことが、伝えられている。

そのうらみといおうか、里芋を房州の里見にたとえて、「里芋を作るな、育てるな、その変りいくらでも食ってしまえ」との怨恨説である。

もう一つは、当時の和田城主、上代氏は、遠く平氏―千葉氏―東氏の流れであり、家紋は月星の紋である。里芋の茎を株元から横に包丁で切ると、月星の家紋に似ているところから、大事な家紋に刃物を入れるなどの「家紋尊重主義」の説である。こちらの説は、東庄町内にはほかに月星の家紋が多いので、あてはまらないようである。

**みそぎのはらい(諏訪神社境内)**

昭和二十年頃まで行われていた。夏の八月三十日に大木戸、宿浜の少年たちが荷車を引いて各戸より薪まきを少しずつ



もらって歩く。それを夜になって、諏訪様境内で二か所に分かれて燃すのである。

その火にあたると、できもの（皮膚病）などにかからないといわれた。境内の北側は宿浜区、南側は大木戸区、薪を円形（直径3m位）に積み上げて夜火を焚くので、大勢集って賑った。

### (三) 民話・伝説

#### 1 洲か山か——須賀山伝説（笹川）

桓武天皇の延暦二十年（八〇二）秋の頃、朝廷の命を受けた四道將軍坂上の田村磨呂が、東国征伐に向う途中、軍兵たちの長旅の疲れを癒そうと、編玉の郷（阿玉郷）を中心とした附近一帯の台地に駐屯したことがあった。

この時、將軍が従者数人と里人を道案内として、各屯所を見廻り、平山の台地に廻り着いたのは夕やみのせまる頃であった。台地の北側を望んで立った將軍は、眼下に渚の辺田を、左手に海老の沢を、正面に桁の沼、遠くは龍神山、衣利根）の入江などしばし見とれながら「まことに絶景であるが、あれに見えるは洲か、山か」と諏訪明神の森を指して、従者に問われた。従者は、道案内の里人に尋ねると、「あれは、靈験あらたかなる諏訪明神の森でございませう」と答えた。

將軍は、さっそく蝦夷征伐の大願を立てられ、大同二年（八〇七）、東国を平定してのちに社殿を造立して、東国鎮護の神と崇め奉ったといわれている。

須賀山の地名も、「洲か山か」が須賀山となり、以来明治二十二年、町村制が施行されて笹川村となるまで、およそ、千余年に亘つて須賀山と呼ばれる基もととなった。

（東庄町読書会連絡協議会『かぎろひ』記念特集号）

## 2 高部のチンケお染そめと羽計の権八（高部区、羽計区）

昔、高部のある家の老婆が「オドウカンの森」（稲生様）に、山の茅かやとりに行った。そしたら、土の中に穴があり中を覗のぞいて見たら狐の子が居た。驚いて鎌で中をかき廻したので、可愛想なことに狐の子は片目をつぶしてしまった。やがて大きくなり、狐の娘に成長して、その名をお染お染と叫よびた。

オドウカンの森から、大きな田や沼を越した羽計の一里の森（浅間様）にも、たくさんの狐が住んでいた。その中に権八という雄狐がいて、オドウカンの森のチンケお染と恋仲になり、そして度々会うようになった。

「お染、おいらも早く祝言をして夫婦になるべえよ。」「でもお互いにたくさんの仲間もいるし、みんなに御馳走する物がねえだよ。」「そうだあなあ。何かいい考えはねえがな、よし、そのこつたら俺が何とかするべえ。」と権八は、お染と別れた。

ある晩、「一里の森」の下の人里が寝静まった頃、一軒く寝屋のうしろをたずねる物影があった。「今晚は、今晚は。おらあとこ、祝言があって、引出物に鶏が一羽欲しいだけんど、是非ゆずってくんろ。」と板戸越しに小声で言ってしまった。明るる朝、里人達が起き出して昨夜夢心地に聞こえたことを思い出して、鶏小屋をのぞいて数えると確かに一羽たりなかった。

隣りの家でも、またその隣りでも、一羽居なくなっていた。

やがて、その日が暮れて夜になった。高部のオドウカンの森から、羽計の一里の森まで無数の「ちょうちん」が一列になって続き、けた沼の水まで赤々と照らして、夜中に目ざめた里の人たちをおどろかせた。

次の晩、また一軒一軒たずねる物影があった。「昨日は、鶏を失敬してどうもすんません。お蔭でおんら、無事しゅうげんもすんだで」と言っつては消え去っていった。夜が明けると、どこの家にもシャケ(鮭)が一匹のき下に置いてあった。

ある暗い晩、けた沼につづいた提ちんの行列は、権八、おそめのキツネの祝言であった。そんなことがあってから、里の子供たちは夜ダダをこねて、むづかる者が居なくなつたとか。尚、高部区稲生神社の使いは、白狐だと言うことである。

(『かぎろひ』記念特集号)

### 3 白幡のさと(宮本区)

今からおよそ二〇〇〇年近くも昔のこと。八尾の岡(宮本)近くに機を織る乙女が住んでいた。

ある十月の静かな日、のどかな八尾の入江にたくさんの舟がこぎ寄せられた。高貴な人の中に、劔や鉾を持った大勢の兵が上陸した。この一行は、皇子日本武尊の東征の跡を巡る、父君の第一二代景行天皇の行幸であった(日本武尊は、エソ征伐を終えて、天皇にその一部始終を御報告出来ないままに、亡くなられたのであった)。

その事を知った土地の人々は、そのもてなしに大わらわ。その時、乙女は機を織っていたが、急いでその布を天皇の玉座に奉った。「高貴なお方にさしあげるような物ではございませんが、せめて御座所にもお敷き下さい。いや

しい田舎娘の心づくしでございませう。」と言つてつつましく立ち去つていった。

天皇は、ことのほか喜ばれ、それを玉座に召され、去つてゆく乙女の後姿をじつと見つめていた。そして、オウス（皇子、日本武尊のこと）の後、弟橘媛は、たしかこの近く（上総）の海で身を沈めたことを思い出された。

「不愆なことをしたものだ、この土地には海の鎮めの神を祀ることにしよう」とつぶやかれた。

やがて、春臣の命を呼んで一社を営み、海神の娘、玉依姫（神武天皇の母君）の御たまを祀るように命じ、春臣の命もこの地に残ることになった。それは十月の甲午の日とされている。

これがのちのち、東大社として人々の厚い崇敬を集めて、今日に至っている。

また、この乙女が天皇に機布を献じた所を「白幡のさと」、または「幡敷のさと」といわれて小さな社が建てられ、白幡神社として現存している。

（『かぎろひ』記念特集号）

#### 4 大蛇のからんだ鉄牛禪師の墓（その一）

椿の湖は、大昔この地に椿の大樹があり、魔王の住家であったが、香取大明神や玉崎明神（飯岡町）などに討伐され、この大椿を引き抜いて逃げた跡が湖となつて「椿の海」と呼ばれた。周田十里半（約四〇キロメートル）に及んだ椿の海には、当時大蛇が主として住みついてしたが、干拓によつて住む場所がなくなり、この城山に登つてきて悪事を働くようになった。鉄牛禪師の墓塔に尾を巻きつけて、夏目の堰の水を三口半に呑み干し、人々を困らせたという。

福聚寺の和尚が、大蛇を説得して、住む所が無いなら、堰の中に弁天様を祀るから、どうかその所に鎮まつて、比

の干潟一円を守ってくれるよう、慈悲深く説得されたので、大蛇も前非を悔いてこの所に鎮まり、近郷近在を守るようになったといひ伝えられている。

(東庄町短歌会『県民の森の歌』)

## 5 城山の大蛇(その二)

昔、小南の城山に大蛇が住んでいた。この大蛇は、いたっておとなしく大きくなったり小さくなったり、変幻自在であった。

ふだんは、寺の奥の院の静まった鉄牛禪師の墓石にとぐろを巻き、高いびきをかいてねていた。そして、干潟八万石に大水害がおこると、目をさましてこの水を一気に呑み干した。

ある年、日照り続きで稲作や他の作物が枯れそうになった時、大蛇は寺の後方の大松にはい上って、大雲を呼んで雨を降らせ、干潟八万石はもちろん、付近一帯を潤して万物を蘇生させた。また、この近辺には、農作物を食い荒す野ねずみは、大蛇のおかげで一匹もいなかった。

福聚寺の東北にある雑木の生い茂っている塚を弁天様といい、大蛇を祀った所ともいわれ、ここで雨乞い祈願をしたといひ伝えられている。

また寺の後の大松は、袈裟懸の松ともいわれ、恰好もよく傘に似ていたので傘松ともいわれた。かつては、大蛇がはい上って雨雲を呼んだという伝説の大松も、最後は落雷のために枯れてしまったということである。

(東庄町短歌会『県民の森の歌』)

## 6 花香稻荷縁起（神田区宇賀神社）

文化年間のころ、書かれた「上代郷明細記」の中から一つ、伝説を選んでみた。ほぼ原文のままである。

そもそも下総の国、香取郡東ノ庄、上代神田の里、花香稻荷の由来をくわしく尋ぬるに、住古、北條氏綱の家臣、花香源之進勝乗と云うは、智仁勇の三徳を兼ね、且つ心易きに達せし故に、乱世近きにある事を詳かに知りて隠遁の志し頻りなりければ、廻国の由を主人氏綱へ願上げ、即時に息勝重、番代として家督相続致させ、下総上代掃部助は知音の事なれば、比方へと志す。尤も片鄙の国と聞かば、隠遁の居所によろしかるべしと、時日に移さず急ぎけり。頃は永正七年の冬の事なれば、渺々たる山野に行かかりける所に、折節大雪にて東西更に見へ分ならず。誠に行馴れぬ道なれば、何国へも行かん様なし。如何にせんと暫行み、日本国中大小の神祇を口文に唱へ、信心を込ける所に、不思議や何所ともなく狐一疋、忽然として現われ出向かへ、志つ志つ歩き行く。勝乗、ふと思ひ付き此の狐に随ひ行かんと跡を志たい行く程に、名にあう上代神田といへる所え、狐走りつき行み居たり。あたりを見れば、小なる茅屋あり、立寄りて宿を借りければ、何なく宿を借りれたり。既に夜も深更にふけければ、有合せの龜飯を請てこれを食し、狐にも少々与へければ、其のまま伏したり。夜明けて狐を見るに死し居たり。勝乗、不便におもへ共、是悲もなし。其の屋敷の高き所へ葬り、其上へ松の木一本を印に植え、ここに稻荷を勧請し、花香稻荷大明神と祭りしなり。

比の家に宿せし縁により、勝乗もこの近所に小屋を結び月日を送るうち、房州里見義弘討手に向ふよし、ほのかに聞へけれ

ば、上代掃部助かみらふすけより頻りに味方に勧められ、異議に及び兼ね、是非なく味方致し、夏ヶ田台において合戦せしとなり。

此の稲荷の神木、一本より六本に分れし事つらく、惟おもひるに、六は易の坎かみの卦けなり。即ち坎の卦は、觀世音菩薩なり。之れより毎年三月十八日を祭礼の日として、精進しょうじん潔斎けつさい火水くわすいを撰えらみ、朝卯あさうの刻とき御供飯ごくわん魚共々いさどもろもろ備るなり。然れば忽然として納受ある事、いまだ明白なり。神靈不思議、言語筆紙の及ぶ所にあらず。古今不変甚深なるか。故に今において氏子信心堅固にして、安穩あんゑん繁栄を極めしなり。

永正七年より、当文化十四年まで、三〇四年になる。

## 7 見ずの若忍、買わずの存良そんりよう（笹川地区、小南区）

「本屋泣かせの二人の客は、見ずの若忍と買わずの存良、それほんとかね」という俚謡が流行したのは、今を去る二百四、五十年前の享保年間のころであった。

### 見ずの若忍

若忍は、須賀山村中宿、林某氏の生れで、幼年の時、銚子の魚仲買の家に丁稚奉公に出た。常に精進して怠ることなかつた。

ある時、その家に大部の字引書があるのを知って、主人に申し出て借り受けた。以後、每晚これを見ては覚えた箇所を破いて焼き捨てて、終に一枚も残らず覚えて焼き捨ててしまった。

ある日、主人が「字引が必要だから返してくれ」というと、「残らず焼いてしまいました」と答えた。主人は大いに怒り「何故焼きすてたか、買って返せ」とどなったが、昔のこととて、そんなに売っているわけでもなし、あきれ

果ててしまった。再び問いただすと「見て覚え、また見ようと思へば忘れてしまいます。もう見る事が出来ないと思えば、決して忘れません。それで覚えては焼き捨て、覚えては焼き捨て、とう／＼残らずに焼いてしまいました。矢も、二本持てば最初の矢は当たりません。当たらないのは、次の矢があると思うからです」と答えた。

主人は、一応その理を聞き受けて「それならば全部覚えているだろうから、しばらく待つから全部書いて返せ。」と書き終るまで待つことにした。それから、毎夜々々書き続けてとう／＼元通りの字引きに、一枚も残らず書いてしまい、主人に返済したという。

主人は、大いに恐縮して「お前は、我が家などに住込んでいる人間ではない。さだめし望みもあろうから、心のおもむく所へ出てゆきなさい」と餞別をあたえて暇を出した。

この若忍は、本屋で本の表題を見て悟り、めくらずして知ったので「見ずの若忍」と人びとがいうようになった。若忍十七歳の時、出家した後、京都に上った。智積院ちしやくいんの末寺、普門院の住職となって居る時、清しよんの国こく（中国）より書札がきたが、読みきれない事を恐れて、誰れも読む人がなかった。朝廷では困り果てて大勢に相談の結果、普門院の若忍を召し出して読ませたところ、とどこおりなく読んでしまった。

のち六波羅密寺はつぱらみつう第二四世も兼ね、山城の国海住寺の学頭となったが、年老いて故郷に帰る時、時の近衛関白内筋公ないしんこうより「何か望みはないか」と問われた。若忍は「出家の身とてさして望みはないが、もし故郷の諏訪神社へ勅額を賜えれば光栄この上なし」と答えた。内筋公は、それならばとて自ら筆をとり、その上を御年九歳の天皇に撫でてもらって、若忍の望みどおり、諏訪両社大明神の勅額を与えられた。

現在の諏訪神社の鳥居にかかる社額は、その模刻とのことである。

享保十四年己酉ちゆう、六月二十四日入寂じやく（死亡）。墓は、笹川山延命寺境内にあり、高さ五尺と六寸、五輪の塔の正面に



「法印覺真大和尚」と刻まれ、石欄がめぐらされている。

昭和の初め頃、其の二百周年に際して笹川の石井卯之助氏の修理による。

### 買わずの存良

存良は、またの名を真胤といい、長智とも号した。小南村の医者岩瀬道庵の二男として生れたが、幼少から頭脳明晰で里人に天神様の生れ変りではないかと恐れられ、長じて鹿の戸妙幢院に入って僧となったが、その記憶力は益々さえて、存良が一度目を通せば如何なる大冊でも、全部を記憶せずには置かなかつた。本屋に入り、本を手にしてしばらく立読むと、書中の全文を記憶して遂に買わずに去つた。いつも買わずに去っていくので、人々は「本屋泣かせの買わずの存良」といったという。

後に、江戸に出て、さらに京都智積院に至り、役僧となつてから鹿の戸妙幢院にもどり、第九世を継いだ。墓は妙幢院に現存する。

存良、大僧正となつて使用した二十五条の袈裟けさを、ふるさと小南岩瀬氏へ贈つた。宝永二年（一七〇五）十月、隠居寺で没したという。

それから百年余りたった文化の末ごろ、小南岩瀬家で火災をおこし、宝物とした袈裟けさもろとも全焼した。

明くる年の四月八日（灌仏会くわんぶつゑはなまつり）の朝、かの「けさ」が庭の梅の枝にかかつて光をはなつていた。家人や近隣の人々が驚いてよくよく見ると、真中の梵字ぼんじの所ばかり残り、廻りはみな灰になつて今焼けたように見えたという。暫くして、灰は飛んで梵字の布ばかり残つて、またまたその家の宝として存在するというが、これは「東莊志」による江戸末期の話である。

（『かぎろひ』記念特集号）

## 8 小南の七不思議

## ① 七戻り

小野神社神幸祭の一儀式で、北宿の道路一〇〇メートル余りの区域を七回往復する。(神社の祭礼八六五ページ参照)

## ② 七神社

(一) 小野神社、(二) 大宮神社 (一)と合祀のため現存せず)、(三) 風王神社 (北宿、現存せず)、(四) 稲荷様 (御園)、(五) 金比羅様 (上宿)、(六) 秋葉神社 (花の入)、(七) 西之宮 (畑受、現存せず)

## ③ 七寺

(一) 藏福寺 (上宿)、(二) 普賢院 (仲宿)、(三) 善乘院 (現存せず)、(四) 尊乘院 (赤羽根、現存せず)、(五) 恵光院 (天王様別当寺、現存せず)、(六) 宝蔵院 (下宿、現存せず)、(七) 養仙院 (御園、現存せず)

## ④ 七卵塔 (墓場)

(一) 寺の下 (十七坪半)、(二) 染井 (二三坪)、(三) 出羽 (二三八坪)、(四) 滝ノ下 (六八坪)、(五) 浜宿 (二五三坪)、(六) 根古屋 (二二〇坪)、(七) 北宿 (二三八坪)

## ⑤ 七井

(一) 大井、(二) 石井、(三) 染井、(四) 北井戸、(五) 水汲井戸、(六) 大井 (赤羽根)、(七) 庚申井戸

## ⑥ 七坂

(一) 寺坂、(二) 坂ノ下、(三) 滝ノ下、(四) 向台坂、(五) 大門坂 (ロクロウド坂)、(六) 染井坂、(七) 十六塚坂

⑦ 七 庚 申

もと七組の庚申講があつた。講のグループ構成は区内の小字単位でなく、入りまじっていた。

9 黒部川伝説（名の起りについて）

黒部川は、当町とうちょう稱荷しょうか入字黒部にかかる橋の上方から、小見川町の中心部を流れ、さらに当町新宿の河口堰げきで大利根に合流する川である。近年は、用水の取水河川として重要な役割をしめている。

昔から「黒部川、その源みなもとをたずぬれば、東さかゆる、寺の井戸尻」といわれるが、溝原（千潟町）東栄寺のことである。北陸の黒部川に因ちなんで、この寺の山号を「北陸山」と名付けられている。この北総黒部川の名前の起りについて言い伝え文書があつたので、ほぼ原文のままで紹介しておく。

花立山ちかたけ兒塚こづか、黒部の橋、来由の事（山田町宮前、松沢玄蕃家文書）

大職冠おほしやくかん鎌足かみあし公こう二十一代の後胤ごういん、黒部内大臣くろべの内大臣真房まほろ公は、応仁の兵乱（一四六七）に沈誅しんしゅうされ、一族郎等いちぶらうどう散々さんざんに去るに忍びず。其の中に増田小太郎秀郷は、真房まほろの嫡子ちやくし健丸けんまる（十二歳）兒を背負ひ、鎌倉を志し落ちにけるが、昔の知るべも跡絶へて、乱国の習ひ日剃ひはらぎ夜剃よはらぎの道を妨さまたげ、情けなくも兒は小娘と怪あやしまれ、ややもすれば難題かたがなの艱難かたがな繁はくにて、ようやく江戸豊田の城下に着きにける。

忍ヶ岡の千住と聞くと、我が忍家はあるやなしやと、見めくりの梅若塚見るに付ても心細く、柳島越へて鴻の台禅寺に若しや知るべのありもやせん。尋ね見ばや、□かさやに至れば折しも水増して、式人越し渡し舟三艘にて往きかう折から、乗合の内、

怪しきもの共見嫌し居て、川中程に至れば、向ふより帰る舟と行違う折から、小太郎が肩掛けし小荷物かなぐり取って、向ふの舟に飛び乗りたり。小太郎驚き、こはいかに癖者憎き奴かな。「早く戻せ／＼」と大音声にもがけども、早水風に聞えぬ顔、双方遙かに隔ち行く。いかに舟頭この舟早ばや戻せ戻さずやと刀に手を掛け責めたる。舟頭よんどころ無くつぶやきながら漕ぎ戻す。乗合の大勢も可成に唸つめけど、もとの岸に着くや否や小太郎児をいだき飛上り、暫くここに立ちやすらへ給へといひ捨て、彼の癖者を追駈たり。傍らに見居たる癖者、これは程よき小娘、得ものは今日の御授けと川辺の小舟にいだきのせ、よべどさけべど漕ぎ出だし、水足早き猪芽舟の、忽ち行徳磯浜に流れ行く。

ここに人売り渡世の源太といふものありて、皆その手下のもの共横行して、かくの如き渡世をはげみにぞ。其の網に掛りたるはいと不運なれ。この源太の同職、笹川嶋右衛門といふものは、利根川の辺りを上下して男女童を売出し、源太のもとへ連行交易をなし、銚子港の方へ代付渡世するもの手に渡されたり。

健丸児は、泣くより外の事ぞなく、木おろし舟に積乗りて笹川に着けにける。然るに、嶋右衛門の伴嶋之助とて当年十八歳の若もの有けるが、かの児を夜顔に見そめて、さては器量ありげなる品よき玉もの、なにとぞ我が愛妾に申し受けばやと忽ち愛念起り、児の枕もとに忍び寄りて色々口説けども、泣くばかりにて答もなきままに、肝いらだちて無体にいだき見れば、こはいかに男子なり。さてはと発明して汝いかなるものの子か、今宵の内に逃げ行くべし。我が父も男と知らば案に相違の腹立つま、一命にも及ぶべし。これより西の岡、野合の方へ逃げ行かば寺も数ある、弟子となり成長の後、古郷へ尋ね帰るべし。疾々急げと起し立て、裏の木戸より須賀山の岡のはずれまで送り出けるとぞ。

健丸児は、四、五日以前小太郎に分れてより泣くより外の事ぞなく、食もろく／＼喰わずに稚な心の痛ましき、まだほの暗き細道を、歩みもなれぬ洗足にて、行く先知らぬ西東、犬の遠吼へ鶏の声と知るべ小貝野に早や東雲の見えければ、都にある時は朝拝の日の束し、少しの木陰にたゞづみて、父上の官爵も□夢見るようおもはれて、さても／＼と涙ぐみ、出家になり成長の後古郷に尋ね帰れと人買の伴おしへこと、寺といふもの知らざれば、何とかいひ出しよからんめれと、思案たらたら足痛み、腹もすいて喉かわきたるゆへ、田谷へおりて清水呑み溜息つき、しほ／＼と大きく尻の橋本に来て見れば、魚取小屋にわら敷きてあ

りけるゆへ、ここにて少し休まんと臥したるまゝに日暮れて、明日の朝日さすまで一眠り。目がさめ見れば朝日さす、うつつ心に案じつつ、起きんと思へど四五日も喰わずにおとろへたる清水腹、起きたつ念もなき姿、泣く／＼空を眺めて臥し居たり。

かかる所に、宮前の玄蕃といふもの通りかかり、様子を尋ねあわれ不便とおもへ助けんと、すぐさま背負ひ婦り念頃に介抱し、小太郎のゆくえを求め得させたくぞ心がける折も、父母の様子をも尋ね問ひ、ともに涙ぞ絶へ間なく、兒子も明け暮れ父母や、小太郎が事のみ案じ泣きわすらひ、疲衰して終々に、応仁三年正月廿五日、兒子とし十三歳にて命終になりける。玄蕃を始め家内近所の老若、哀れを催し、泣く／＼望海ヶ峯に埋塚と云う。

追々いわれを聞く往來の男女、哀れを催し草木の花を手向け通行しけるゆへ、自然に花立山鬼塚と云ひ伝へ、今の世までも存在せりとかや。

望海ヶ峯といふは、南海遠く見ゆるゆへにや、里人の墓所なるゆへ、兒子も埋塚すなるべし。然るに遠近の参詣人群参には、貴賤の分ちなく心よからずとて、文明十一亥年正月、夏目民部といふもの来りて花立山より西の方一丁程去り、往還の三ツ又真中に鬼塚移し祭るとぞ。これより花立山と鬼塚とは隔別にはなれど、今なほ存在せり。

大作尻の橋本も、黒部内大臣眞房卿の御嫡子、健丸健丸兒子の臥士なればとて、黒部の橋と名付け書き上げたれば、今もなほ黒部の橋、黒部の川と通称し來たるやとぞ。

明暦元未年（一六五五）、里老里老檀川氏伝聞書写之。

黒部の橋、西は志高村、東は溝原村、北は府馬村、三ヶ村境の橋にて、志高宮前より稻荷入、小貝野、笹川へ通行の道にかか  
る橋なり。

黒部川は、志高、長部、溝原三ヶ村の悪水尻にて未無しに相成り申し候。兒子塚は、中頃三ツ又に移し流行神に取り立て候ところ、不当とも申す。

金親政則老師口伝へ。

## 10 鹿の渡、龍神山伝説（鹿野戸区）

神代かみよのむかし、鹿島の神様（武甕槌命たけみかすねのみこと）は、三社（東国三社、鹿島・息栖・香取）の使いとして、鹿島の森に住む鹿をつかった。

先ず息栖神社へゆき、次に海を渡るのに龍神の住む山を目指すように命じた。

龍神は、鹿が海を渡る時はいつも守護してやった。龍神の座いさますこの山を龍神山という。

鹿は、この山のおもとを通って西方の香取の森へと向かった。鹿の渡る瀬なれば、「鹿の渡と」という。

香取大明神（経津主命よつねしのかみ）への使いを果した鹿は、帰りもまたこのコースを通り、龍神の守護を仰いで海を渡り、鹿島の森へ無事帰ったということである。

（「東莊志」より）

## 11 椿湖開発による新村の名付け伝説

干潟十八ヶ村、名付け。（「東莊志」より）

○ 上代かじろの下を萬歳と名付けたるは、上代は、古は和名抄に神代と書したり。神代の久しきこと数万歳なれば、上代の下を萬歳と付けたる名なり。

○ 粟野の下を八重穂と名付けたるは、粟の満作を祝して付けたる名なり。

○ 小南の下を夏目と名付けたるは、春は大南風吹くなり。夏は小南風が吹くという意にて、夏目と付けたる名なり。実の小南は、湖陽こんやうという字なれども、通俗の爲の仮り字なり。湖が南にある故の名なり。

○ 松ヶ谷の下を幾世いよせい（海上町）と名付けたるは、「松は千年、幾世経らん」の意なり。

○ 岩井の下を清滝しみづ（海上町）と名付けたるは、岩井の滝水、清く流るるの意なり。

○ 蛇園へびぞのの下を長尾ながび（海上町）と付けたるは、蛇の形を見て名付けたり。

○ 見広の下を大間手おほまて（海上町）と付けたるは、見広の広き意にて、大間手と名付けたるなり。

○ 後草うしろくさの下を、高生たかせい（海上町）と名付けたるは、後草の高くなる意なり。

○ 江ヶ崎の下を琴田ことだ（旭市）と付けたるは、江は鴈がんの下る処なり。崎も水辺なり、是も鴈の落る処なり。また、或る人の曰く、琴田は川筋が十三筋ある故の名なりという。この村、元より地利によりて付けるべき様なし。

右六ヶ村海上郡なり。

○ 大田の下を鎌数かまかず（旭市）と名付けたるは、大田の稲刈の意なり。

○ 椿の下を春海はるみ（八日市場市）と名付けたるは、椿の木はなくして、椿の海の根元なれば、春海と付けたる名なり。

○ 新町（旭市）は、屋敷割、城下町の如くにて堀の内を城に見立て、其の下を米込と名付けたるも、城は兵糧第一の意にて、堀の内、米込、其の下城下なれば、新町と付けたる名なり。新町は古田なし、実は堀の内古田なり。

右三ヶ村匝瑳郡なり。

○ 飯塚の下を米持こめもち（八日市場市）と名付けたるは、米を持たねば、飯は炊かれぬ故の意にて付けたる名なり。

○ 鑷木はさぎの下を萬力まんりき（干潟町）と付けたるは、木の鑷はさ（株）は、萬人の力ならざれば動かぬ故に、萬力と付けたる名なり。

○ 諸徳もろとく寺の下を、入野いりの（干潟町）と名付けたるは、諸徳は設もうけなり。もうけあれば入用ありて、転じて入野と付けたる名なり。

○ 溝原みぞはらの下を関戸せきと（干潟町）と名付けたるは、溝の水を止める意なり。

小南の下、夏目、八重穂、萬歳、関戸、米込、入野、米持、秋田、萬力、右九ヶ村は、香取郡なり。

鎌数村、神明宮は干潟開発の時、後草、三川、野中の方へ堀割りをいたしけるに、底に岩ありて成就せず。この上は神慮を伺うべしとて、新造の舟を造り、神明宮（お伊勢様）を勧請し、風任せに流し、其の流るる方へ印しるしを立てて、終に鎌数へ流れしに付き、この印の処を堀割りして干潟となる。人力の及ばずところは、神明の加護ありて誠に目出度し。ここに神明宮を勧請して、干潟十八ヶ村の惣社なり。

干潟の水吐きは、海上郡神宮寺村、匠瑤郡吉崎村の間に落ちるなり。

香取志に曰く、香取に正月七日、樺の海風鎮めの祭りあり。往古、香取の神領にてありしという。神代より湖の様子に書成したり。古は、汐海にてありしなるべし。

## 12 「舟引き」の地名伝説（青馬区）

青馬新田と、八木山地先の境のあたり、下り坂があり、下りきった少し平な所に「舟引き」という地名がある。

ここは昔、北側の柘沼けたぬま方面が海上うなみ潟という海で、南側は谷津やつのあいを通じて、樺湖つばきのうみとなっていた時代に、南側から北側へ、或いは北側から南側へと、舟を引き上げて通路にしたために、この名が残されたと見られる。地形上からも、なる程とうなずける。

長元の乱（一一〇二八）を起こした平忠常が、京より攻めてきた源頼信の軍勢に、自軍の舟を奪われるのを恐れて撤回した時も、この通路を利用したものとかわれ、文禄年間、徳川の家臣、松平家忠まつだいらいよただが所替しよかへて武蔵の忍城しのびから下総しもさ上代じやうへ赴任した時も、この地を通ったとされてお、寛文年間、樺湖が開拓される頃まで、重要かつ、唯一の舟の連絡



路であった。

(『かぎろひ』記念特集号)

### 13 和尚塚(上人塚)の伝説(大木戸区東町)

嘉禎元年(一二三五)に、根方区西福院を創立した意教上人は、滅後、坊内原(ぼうちうら)の上人塚に葬られたと伝えられている。

また、一説に上人は入定(にゅうじょう)したともいわれる。入定の意味は、真言宗では父母から生まれてきた肉体の上に、仏徳を成就することを強調して即身成仏(人間がこの現身のままで仏となること)することを理想とする。そこで自ら墓穴に入り、土中で竹筒を通して呼吸をし、木喰業(もくじきぎょう)(木の實などを食として命をつなぐ修業)をしながら念仏を唱え、そのまま入滅(死)することである。

千葉県内には、この入定塚の伝説が多いといわれ、当地方では笹川と小南雲仁塚、千潟町溝原にも木喰聖人の存在が伝えられている。

入定塚の中に埋まっている聖人(上人)は、ミイラで生き続けているという。ミイラになって弥勒菩薩(みろくぼさつ)が、お釈迦様の入滅してから五十六億七千万年後、人寿八萬歳の時、天からやってきて釈尊が救えなかった衆生を救済する時に、再生して仏業に参加すること。であるから死んでしまうのではなく、ミイラで生き続けているわけである。

入定ミイラの日本最古のものは、越後七不思議の一つになっている新潟県寺泊にある弘智法印のミイラである。弘智は千葉県香取郡の人、姓は児玉氏、初めは香取の蓮花寺に住み、諸国を遍歴して高野山に行こうとしたが、越後海

雲山の岩坂に留まり、養智院を建てて修業し、正平十八年(一三六四)十月二日に入定したと伝えられている。

## 14 東庄七井

昔から、水は人間に無くてはならない生命の源である。

昔の東庄内に、七か所の清らかな水の湧き出す井戸があった。尤も、このほかにもたくさん井戸はあるが、この七井は宗教的に、「神の井」として永年にわたり里人に利用されてきたものと思われる。

その七井とは次の井戸である。

盃井(さかずきい) 東庄町宮本

鳴井(なるい) 東庄町青馬

石井(いしい) 東庄町羽計

染井(そめい) 東庄町高部

滝之井(たきのい) 東庄町平山

大井(おおい) 銚子市桜井

玉子井(おうじい) 海上町松ヶ谷

なお、盃の井には「東路に、さして来むとは思はねど 盃の井に 影をうつして」の古歌もある。染井には、「片葉のよし」が生えるとのいい伝えもあるが、詳しいことはわからない。

## 15 姥捨伝説（今郡区）

今郡に「定命窪」という窪地がある。そこは、石出村との境の村はずれであり、いつのむかしか、年をとって仕事もできなくなると、そこに捨てられる習わしがあったと伝えられている。

ある時、一人の男が息子と共に、老母を「もっこ」に乗せて、「じよおみよお窪」に運んだ。たて穴を掘り、その底にむしろを敷いて少しの食物をそえて老母を下した。静かに念仏を唱えながらも、老母は二人に早く帰るようにながした。男は石蓋をして、息子と逃げるようにそこを離れた。

帰り路、天秤と「もっこ」を持ち帰る息子に気づき、「そんな物、置いてくるもんだ！」と怒った。すると息子は「この次おどう（父）をのせてくるのに要るべいと思つて。」と答えた。「なにい！」男は次の言葉が出なかった。

その夜、何を思ったか男は妻と息子を叩き起して定命窪へ向かった。「誰に何といわれても、食いぶちがなくなつてもいい。ばあやは家に置く。」ときっぱり言つて老母を連れ戻し、その後は大事に養つた。

それからは、この里から姥捨ての風習が消えたということである。「定命窪」の地名だけが残されている。

（『かぎろひ』記念特集号）

(四) 俚 謡(さとうた)

1 地んぎょうつきの唄(各婦人会)

子安講の時などに唄う

アヨイヨイヨイトネ アリヤリヤ コリヤリヤ

五、お富士お山に 振袖きせて

サアヨイトネー

奈良の大仏 ヤアレ 婿にとる

一、目出た／＼の若松様よ アラヨイヨイ

六、好いて好かない 煙草のけむり

枝も栄える ヤアレ 葉も茂る (はやし以下省略)

遠くなる程 ヤアレ うすくなるよ

二、此の家座敷は 目出度い座敷

七、目出た／＼の 度かさなりて

鶴がおしやくで ヤアレ 亀が呑む

門に七重の ヤアレ 七五三をはる

三、旦那大黒 かみさん恵比須

八、一に門立て 二にくら立ててよ

あとの家族は ヤアレ 福の神

三に母屋の ヤアレ じんぎょうつきよ

四、さした盃 中見て受けな

アヨイヨイヨイトネ アリヤリヤ コリヤリヤ

中や鶴亀 ヤアレ 五葉松

サアヨイトネー

## 2 するすひきの唄

(東今泉区)

一、目出度いものは 米よねの種

花咲いて みのりてよ俵たわらかさねる

二、結んで下げた しすの帯

恥はずかしかしや 腹はらんでよ 毛ぬき合せよ

三、高上ひがみだい台で昼寝して ぬかれた

ボボの毛よ 三本ぬかれた

芋いものたね

一、目出度いものは 芋の種

葉も白く はたけでもんぐらもんぐら

子が出来た ソリヤ

その子が育てば 親となる

## 3 淡島講の祝い歌

(新宿区)

御蓬菜のはなみ(貰うい子安講の時唄う)

一、とうごくを廻りたれど

これのお座敷 今見る

高麗の畳すえて

錦のへりで かがやく

二、まず参りお座を見れば

黄金の花が七本ななもと

七本の枝の花で

お座のうちが かがやく

三、これほどの 花のお座敷

とくも参り申さんや

火を浄め 水を浄め

あまたの事は そろわぬ

四、こんにちの お附合は

淡嶋様へ ごほうらく

みなうちが そろい申して

さあらと 神をいさめる

五、淡嶋様の めめのよさは

番匠がわらか 木がわらか

木をけずり かんなかけて

番匠がわらと 見えそうよ

ぢつこ(雑魚)舞い

一、ざつこ舞いな 見さいな

(くりかえし)

一合どんの こうものが

(くりかえし)

一合川へ ハイ 入りこんで

鯉こがなに小雑魚

一合ばっかり すうくって

これむどんの お魚と

ぶつかあーずいて まあーがった

以下「一合」の部分、二合から十合まで言い換えて、  
くりかえす。

終ったら、踊り手が次の科白せりやくをつけて船頭歌へつなく

「雑魚は一石八斗すくいました。どんな大きなオボタ  
テでも、とっても使い切れません。東京出しをしま  
すから、船頭さん、お願いします。」

船頭歌(淡嶋講の祝い歌)

一、ナア

潮来出島の よれ真菰

殿に刈らせて おれさゝぐ

ささぎおろして 船に積む

ここはどこよと 船頭殿

ここは神崎 森の下

楫を頼むよ 船頭殿

アー

着いたわ 着いたわ

だいやぶく（淡島講の祝い歌）

目出度いな

第一番に お門松ヤレ

二には ニッコの 庭の松ヤレヤレ

三がい松の 葉振りよさナ

四が辛崎の 一つ松

五つ出雲の 五葉の松ヤレヤレ

六つ昔の高砂のナ 尾上の松のその下でヤレ

鶴と亀とが ちを結ぶヤレヤレ

鶴は千年ナアヨ 亀は万年ナコレ

まんくごくで なさるればヤレヤレ

だいや福の 御長者ナ

お祝い申す お目出度いやレヤレ

ざらくたらふく お目出度いやレヤレ

やれ目出度いな 御孫様は

ちんまるちんまるで 色白でアーナンタラメデタイ

親に似る子は 果報もちナア

痲疹をなさるとも アーナンタラメデタイ

お顔に三つに 手に五つナア

おーもに七つで 七五三アーナンタラメデタイ

お手持ち遊び 申すればナア

でんく太鼓や 豆太鼓ナコノ

ようなる物を 持つて遊ぶアーナンタラメデタイ

ご寿命ぞくと 申すればナア

三浦大介 百七つ アーナンタラメデタイ

浦島太郎は 八百ヤの年ナア

八百年の世を持ちてアーナンタラメデタイ

扇の地紙で末広くナア

柳の木の葉で 末長くアーナンタラメデタイ

お孫様のお祝いでナ

お目出とうで ございそうろう

アーナンタラメデタイ

米 つ き (淡嶋講の祝い歌)

アースッター スッター スッター

一、おさんおきろや 夜が明ける

アースッター スッター スッター

朝の御飯が 四つになる

アースッター スッター スッター

(以下ハヤシ言葉省略)

二、向い小山の 百合の花

よくも咲いたよ ゆらゆらと

三、葛西田圃かさいたんぼの 稲のよさ

丈が一丈で 穂が五尺

四、ちやぼが三度鳴きや 夜が明ける

起して帰せよ 色男

五、つけたつけたよ この米は

糠がやぐらに 舞い上る

アースッターダーヨー スッターダーヨー

ウントコドッコイ ドッコイサト

たちはなみ (淡嶋講の祝い歌)

これさまへ 初にまいりて

お座を荒らして 立ち申す

われ／＼の 立たるあとへは

黄金の花が 振り湧くよ

黄金の花が 振り湧くよ

4 小南の子守り歌

一、かわいそうだよ太田の六兵衛ヨイヨイヨイ

親子三人梁はりの下 ヨイヨイヨイ

(以下ハヤシ言葉省略)

二、泣くな泣かすな 病を出すな

出した病は なおらない

三、おらが正ちゃんと 利根川の水は



どこへ流れるあてもない

四、ここは小南 なさけは夏目

なさけないのは 八重穂村

子守り歌(小南)

一、一にいちくられ 二に憎がられヨウ

三に三年 居てしまつたらヨウ ヨイヨオ

二、朝は早くから 泣く児をおつべられヨウ

夜は夜なべで 寝せられぬヨウ ヨイヨオ

三、おらが坊やに 飲ませる水はヨウ

金の茶碗で 水晶みずヨウ ヨイヨオ

四、こんながぎめに 飲ませる水はヨウ

ぶっかけ茶碗で 濁り水ヨウ ヨイヨオ

五、ホラや北海道の ホラ吹き蒸気ヨウ

ホラは吹いても 乗りてないヨウ ヨイヨオ

糸ひき歌

一、糸は切れるな 座繰りはまわれ

晩のしまいが 遅くなる

二、人は五升とる 三升とるなかで

私は二升で 情けない オヤソウ

毛毬唄けまりうた

一の丸越えて二の丸越えて、三の丸先きに井戸掘り掘って、井戸は丸井戸、釣瓶つるべは黄金、黄金の先きへとんび子かとまって、やれ飛べとんび、飛ばないとんび、飛ばなければ今来る鷹たかに蹴られるぞ

一にたちばな、二にかきつばた、三にさがり藤、四に獅子牡丹、五つ伊山の千本桜、六つ紫色よく染めて、七つ南天花、八つ八重桜、九つ小梅をちらり咲かせ、十で殿様あおいの御紋

〔東城村誌〕

5 田植歌

田植も、近年は機械化されてきたが、昔はこの時季ともなれば、農家の人々は大変な重労働であった。朝早くから男は畦くわとり、肥やしふり、代しろうない、苗運びなど。女は苗とり、田植えと、それこそ猫の手も借りたい忙がしさであった。ふだんは平静な人でも、疲労や焦あせりでいらいらしてくるものである。これらを少しでも癒いやすすために、「田うない歌」や「田植歌」が作られ、歌われたものと思われる。

誰れ彼れを憎むことなく、面白く笑いころげて、しばし疲労を忘れさせる。田植歌をただ単に低俗視するよりも、労働生活の智慧と見るべきであろう。

田植え歌（東今泉区、ほか）

一、とっさまヤアー とっさまヤアー

おいらはどうでも はーらんだー

（ホーイ ホーイ）

三升炊いたるぼた餅を

拘子のうらまでかんなめた

（ハア植えてしゃれ、植えてしゃれ）

（以下ハヤシ言葉省略）

二、権兵衛殿のバア様が

猫に×××なめられたア

この猫よい猫、三毛猫だ

もう少し中まで、なめてくれ

三、十六、七、八は

道はたの竹の子よ

通る人々が みな

手をかけ 掘りたがる

四、夕べもらったる花嫁が

雷チヨメもつてきた

さわるべいと思つたら

光が強くてさわられぬ

五、父<sup>ち</sup>ちやまや く

前なるものは そら何だ

いしゃ馬鹿だ べらぼうだ

夕べこねたる こね棒だ

六、おや笹川の けた沼で

ぶっかけ××××× めっけいだ

まわりは ぶっかけでも

中は上<sup>じょうみ</sup>味の 上<sup>じょうしな</sup>品よ

七、十四<sup>よ</sup>、七<sup>しち</sup>、八<sup>はち</sup>は 春野のひばりよ

声こそすれど すがたは見えぬ

八、しろ田は富士の山程ござる

日はしんとろと 山はにおちる

九、お田植文句もまだあるが

あまり長いと あきがくる

おめでたく お田植の式もおわりました

## 6 東庄音頭

林せい作詩（宿浜区）

佐々木章作曲

田うない歌（東今泉区）

木内幹夫補作曲（東和田区）

一、ありわらとうが むねに出て

桜田誠一編曲

おらもまた ひかいた酒がほされる

サテワエー ドッコイカヘシテ

(一) 利根の流れに まこもがゆれて

なくなよしきり 菅笠あがりや

舟の櫓音に 想ひもつゝのる サテ

二、目出たいものは 米のたね

ソコダニ ソコダニ（以下ハヤシ省略）

東庄よいとこ エエ 水の里

花咲いて 実って俵かさねる

(二) 雲井が崎の つつじの花は

三、ぜんべん餅は 豆でもつ

松のみどりに 香りをそえて

笹本のおさよは かみの毛でもつ

若い二人の 心を結ぶ サテ

東庄よいとこ エエ 花の里

(三) 八万石が 黄金にそまりや

鴨が鳴く鳴く 夏目の堰に

夢の城山 夕陽も赤く サテ

東庄よいとこ エエ 米の里

四桑の畠に 秋風吹けば

稲も稔るよ 蚕もあがる

汗を流して 手を取りあえば サテ

東庄よいとこ エエ まゆの里

(五)祭り囃子の 笛の音聴けば

天保以来の 土俵を囲み

踊るゆかたの たもとも軽く サテ

東庄よいとこ エエ 恋の里

この東庄音頭の元唄は、笹川音頭である。その作詩者は、高橋修司氏（宿浜区新切）で昭和二十三年頃の作詩といわれる。

昭和五十四年、「東庄音頭」としてレコードに吹きこむに至った。

## 7 小南区の謡うたい

小南区には、古くから観世流と亀山流の流れをくむ二つの地謡がある。

オボスナ様、小野神社の祇園祭り当番の引継ぎ、町内年度始めの謡うたい初め、また各家々の冠婚喜寿、米寿、あるいは神詣での旅立ち等々、ことば壽ぎの席に謡われたものである。

各家の長男は、十五祝いが済むと町内への仲間入りが許され、その同年輩達が五、六名まとまると、寒行といって一月の寒の入りから寒あけの節分まで、町内の謡の師匠の家に集って二〇数曲に及ぶ謡曲を、声かを潤らして教わった。

こうして、若い時に習い覚えた謡曲は、特に祇園祭り当番の引継ぎには無くてならぬものであり、当日は、麻袴かみしもに威儀を正した少年が、蓬萊山ほうらいざんを捧持して（島台持ちという）静々と来りて当番家の前に奉る。

また、謡い方の五、六名が揃いの浴衣に扇を持ち、謹厳な面持ちで蓬萊山ほうらいざんの謡いを朗々と謡い上げ、その座を一段と引締めたものである。

なお各町内の謡初めは正月二日（近年は十五日）に行われる。先ず町内の組長が正座に着き、各世話人がその次に居並び、あとは年輩順に着座し若衆五、六名が謡い方となり、まず盃を起して一盃こぶ「高砂」、二盃「四海波」の謡曲で新旧役員の交替、更に新人仲間入り、そのほかで一盃「尚喜び」、二盃「尚尚」、などの謡いで宴会に入る。

最後は、お中止といつて紀州椀の汁椀（小）二個を下座より廻して上座まで廻ると、小切り（高砂や、この浦船に帆をあげて）を謡い、さらに紀州椀の親椀（大）二個を膳にのせて下座の正面に置く。若衆より選抜された勇士二人が正座して、給仕人が注ぐ親椀一杯なみなみとつがれた酒を見事に飲み乾し、大切り（神と君との道すぐに）を下座、上座交替して、後尾の結びは一諸に目出たく謡い納める。手じめ三拍子を三回、合計九回をして謡い初めの式を終わり食事をすます。

解散のとき、それぞれの新任の役員の家へ太鼓を打ち鳴らしながら、酒と書類箱を持参して送り届けるのが習わしとなっている。

また、七ツ祝、十五祝、結婚式、金婚式、喜寿、米寿などにも、謡曲によって式順をすすめる慣習が今も残されている。

近年社会情勢の変化により、謡曲を習得する機会が少なくなり、青年のほとんどが謡えなくなったが、昭和四十年ごろまでは続けられていた。

所は高砂

所は高砂の尾の上の松も年古りて、老の波もよせ来るや 木の下影の落葉搔く、成るまで命長らえて 尚いつまでか幾きの松

夫れも久しき名所かな <

四海波

四海波しづかにて国も治まる時津風、枝も鳴らさぬ御代なれや 相に相生の松こそ芽出度かりけれ 実にや仰ぎても事もおろかや、かかる世に住める民として豊かなる

君の恵ぞ有難き <

尚喜び

尚喜びの盃の、かげもめぐるや朝日影、伊豆の三島の神風も、吹き治むべき代の始め、幾久しきをも限らじやん、嘉辰れい月とは此時を、祝ふぞ芽出度き

尚々

尚々巡くる盃も、度重なれば新家の、お酌に立ちて親と子の、定めを祝ふ祝言の、千秋楽の舞万歳楽。

長き命

長き命を組みて知る、心の底も曇りなき、月の桂の光うふ、枝を連ねて諸共に、朝夕なるる玉の井の、ふかき契りはたのもしや

庭のこゝろ

庭の砂は金銀の、玉を連ねてしきたいの、いお井の錦や瑠璃の友そ、碑礫の雪桁瑠璃の橋、池の汀の鶴亀は、蓬萊山もよそならず、君の恵ぞ有難き く

長生きの家

長生きの家にこそ、老ひせぬ門はあるなるに、是れも年古る山住の、千代のためしを松かげの、岩井の水は葉にて、老を伸へたる心こそ、尚行末も久しき

実の名

実に名を得たる松が枝の、老木の昔現わして、その名を名乗り玉へや、今は何をか包むべき、是れは高砂住の江の、相生の松の精、夫婦と現じ来たりなり



春の景色

春の景色松原に 波立ち続く朝霞月も 残人の天の原、およびなき世の眺めにも、心そらなるけしきかな

(五) ほめ言葉

1 鹿野戸区

膳 ほめ

これ様へ、お招よばれ申してお膳の上を眺むれば、先づ第一に、鯛たいの平盛ひらもり、二にはあわびのたこの手よ、三にはさぐえの壺盛つぼり、さても立派な七の膳 ほうやま

婿 ほめ

是様これの、小旦那様は日本一のお手書で、かみ硯すずり、京巻筆きょうまきふでで天飛たかぶ鷹たかを描きうつす ほうやま

嫁 ほめ

これこの方のお嫁さん、錦の前垂れひ緋ひのたすき、金はんま柄まがで金はかる ほうやま

庭ほめ

此方こちからさま様の内庭見申せば、松竹梅に紫藤がからまりて、これがしんしょの上り藤 ほうやま

おいとま

これ程の、花の御座を置いてたつのは惜しけれど、日は暮れる、家では待つる迎への者が立ち明かす。

2 東今泉区

嫁

こちら様のお嫁様を見申せば

ピンもよく、たぼはあやがけ

夫婦まげと申します

座敷

只今歌うたその声で

琴、三味線、笛の音か

おあと、も一つ、ごしょもうく

嫁の座敷

ちよつとあがりて長座をいたし

お茶は新茶でかものつめ

あとから出るのは山吹茶

ほどよい処で、いとまごい

3 小南区御園

嫁のほめ

- 一 鎌倉の 泉村から 花のようなる嫁がきて、置き付けは 寿老人(七福神の一つ)にて のりこむ嫁は 福の神
- 二 これ様の お嫁様の おのりこみをば 見申せば 樟くすの木で 船こしらえて 船はお堀へつなぎそよ、船錨いかり、ずんとおろしてお嫁御様は 御繁昌ごはんじやう
- 三 これ様の お嫁御様は 上に召したる花小袖こそで、肩先きに 梅にうぐいす、腰には卯月卯の花うづきうづきのが、賑やかに咲きそろうて さても美事な模様どり
- 四 これ様の お嫁様の 髪かみの結いふうを見申せば、前髪は ふくと結んで うしろはいんの縁結び

お茶のほめ

一 これ様へ およばれ申して さても美事なお茶くれた、手にとれば 金の色するたべろば うちのかんばやし  
二 只今の お茶の台は 金のお重に黄金ばし、風味をば 何とつけそよ 甘露の味か はながしか

だんなのほめ

是様の おだんな様は ご器量うんとみいてそよ からかねの 火鉢をかかへて 千両箱へ よりかかる

かみさんのほめ

これ様の おかみ様は 七つのお倉くらの おかきもと 玉たすき 錦の前掛 黄金のますで よねはかる

満こん

まんこんの お酒盛は おめでたいの おさかもり、おえびすが 控へ召されて 弁財天が 酌にたち 有難や  
大黒様が 千秋楽とおさめおく

(六) 童 戯

子供たちのあそびも、近代化と共に大分変ってきている。その理由は家の構造の変化、各種遊戯道具の発達、遊び

場所の整備などがあげられよう。

子供の遊びそのものには、屋内、屋外、伝統的なもの、新しく流行するもの、個人的な遊びと集団など、観点はさまざまである。

東庄地域で行なわれた昔(明治、大正、昭和初期)の遊びには、どんなものがあつたのであろうか。

### (1) 冬から春にかけての遊び

#### 男子

かるたとり、凧あげ、げんぶ(駒まわし)、竹馬、めんこ(からばん、びた、などともいう)、ねがら(ねっこともいう)、さしこぼな、ごむかん(パチンコ)、とりもち、ぶっちめ、いくさごっこ、鬼ごと、雪合戦、すもう、格闘など

#### 女子

羽根つき、まりつき、かるたとり、なわとび、お手玉、あやとり、おはじき、ままごとなど……。

### (2) 春から夏、秋にかけての遊び

男女とも次の遊びは同じである。

木登り、ぶらんこ、どじょう(魚)すくい、どじょうたたき、魚つり、川干し、水遊び、舟遊び、山遊び(きのことり、栗ひろいなど)、虫とり(とんぼつり、おにむし、せみなど)

こうしてみると、むかしは自然に親しむ遊びが多いが、今でもこれに似たような遊びも存続している。然し、忘れ

られたものもあるので記してみたい。

### ネガラ

生木の枝をけずり尖らせて、勢いよく地面へ突きさし、相手のそれを倒せば勝ち。かわるがわるに突きさす。

### サシコ（小鳥を生け捕りにするかこ）

主にめじろ捕りである。おとり（招きよせるための小鳥）を入れておき、入った途端に出入口がしまってしまう仕組み。このサシコ籠は、竹をさいて自分達で作ったものである。

### ブツチメ

山の中で、竹のバネ仕掛けによって小鳥を捕り押える。押えこまれた小鳥は、殆ど死んでしまうが、昔は焼き鳥にして食べた。仕掛け作業中にあやまって竹のバネの反動によって、自分の眼をはじいてしまい、一生の大けがをした者もいた。

### カッポシ（川干し）

何人かで協力して、川やえんま（舟の通路）を二か所、土止めして区切り、バケツなど（近年は動力ポンプ）で水を払う。中の魚を全部生け捕りにしてしまう。ふな、泥鰌、うなぎ、なまず、かもちんなど。

なお、遊びもこのように大仕掛けになってくると、大人も加わる。

## 泥鱈たたきどじょう

水田稲作において、農業の使用しなかった頃の水田には、泥鱈がたくさんいた。夏も近づく五月の夜は、水も温く泥鱈達は静かに田たの面も(水面に近い)で眠る。それを叩たたき針で捕える。叩たたき針は、縫ない針の長いものを十数本用意して、篠竹しのの先を割きいて縦に並べて結びつける。昔は自分で作ったが、その後、金物屋で売ようになった(長さ一五cmぐらゐ)。

明かり(灯火)として冬のうちからヒデボック(松の根ほつくの芯しん)を用意しておく。これを燃やしながら、畦畔けいはんより水面の泥鱈を照らして叩く。一晚に一升〜二升も叩きあげる者もいた。

その盛りの夜は、広い水田のあちこちで、ともし火が動きまわって、美事な夜景を描き出したものである。

## 第七節 社寺一覽・文化財

## (一) 社寺一覽

## 1 神社の一覽

遠い昔から、われわれの祖先が郷土を開拓してきたその精神的な拠りどころの一つは神社であった。聖なる所を選び、そこに心をこめて神を祭り、神殿を建てて、村の鎮守とした。町内各区に存在するウブスナ様（鎮守）、あるいはさらに小さな範圍で祀られた社などその数は多く、調査の結果を集録してみたのが次の一覽表である。

## 神社の一覽

神社名	所在地	祭神	造立年号	備考
左右大神	舟戸七二六	伊弉諾命 伊弉册命 外	不詳	社伝散じて明確ならず未年に八崎御神幸祭あり
愛宕神社	大久保七九四	軻遇突知命	永禄二年九月 勸請	慶応三年再建、明治四十三年修復、昭和四十九年新築
稻生神社	東和田二四四	倉稻魂命	不詳	上代郷明細記にあり、上代郷四稻荷の一つ



宇賀神社	神田二二一	〃	永正七年	社伝、宇賀神社縁由あり、オビシヤには必ずセリとタニシ献上
稲生大神	稲荷入字稲荷山	〃	万治二年	上代五左衛門、和田村の稲生神社を分霊勧請す
六所大神	小貝野一二七	伊弉諾命外五柱	不詳	オビシヤ、ギオン、秋祭り、と年三回の例祭あり
天満大神	大友九七	菅原道眞外	不詳	縁由書有り、東胤頼の造立によると
窪谷神社	窪野谷二二二	大山咋命	康保元年	江州坂本より遷座と、記録されている
愛宕大神	窪野谷字大崎	火産靈命	不詳	窪谷神社へ合祀してからは祭事はやらない
平台大神	平台字妙見台	天御中主命	不詳	通称、妙見様、九月九日平台関係役員により祭典が行なわれる
滝大神	平山二四七	罔象女命	不詳	享保四年再建し鎮守となす
稲生神社	高部三五八	倉稻魂命外	不詳	安永丙午年改めの鎮守御祭祀当番帳などあり
諏訪神社	笹川い五八〇ノ一	建御名方命外 事代主命	大同二年八月	征夷大將軍坂上田村麻呂が祭ったといい伝えられる
八坂神社	宿浜(東浜)	素戔鳴命	慶長年間	新田、東浜の鎮守、津島午頭天王の分霊を勧請
八幡神社	宿浜(西浜)	誉田別尊	慶長年間	口伝によると、右と同じ頃、誉田別尊の分霊を勧請
日枝神社	根方い五七八四	大山咋神	村上天皇康保年間	神社記録不明、通称、山王様という
葦芽神社	仲内原	宇麻志阿斯備比古遲神	不詳	往古は「大六天宮」と称す、明治二年現在地に遷す
熊野神社	鹿野戸ろ一〇三八	伊弉册命外	明和年間	七月十八日のギオン祭も近年は「笹川のすもう」の日に統一された
八坂神社	孤敷る四七八五	建速須佐之男命	明和二年 乙酉年	羽計村名主伊兵衛という人、津島神社の分霊を勧請す。通称「天王様」
東大神	宮本字八尾山	玉依姫命	景行天皇五十	『東大社史』に記述あり

神社名	所在地	祭神	造立年号	備考
代大神	青馬字大明神	不詳	三年	東大社氏子諸社明細帳には祭神不詳
天満天神社	今郡字北口	菅原道真	不詳	資料によると祭日は旧、現在は十一月二十五日、七月二十日
秋山神社	谷津字秋山	倉稻魂命 伊弉那美命	不詳	一月十八日オビシヤ、十月十八日氏神祭
愛宕神社	羽計字平内	迦具土命	不詳	町村合併までは、七月二十四日の祭日であった、火の神とあがめられる
浅間神社	羽計字婆里	木花之佐久夜毘売命	不詳	七月一日の例祭日には、早朝参拝が多かった
八坂神社	新宿字浜組	素戔鳴命	不詳	旧号午頭天王、明治元年八月八坂神社となる
星宮神社	石出字上通	天御中主命外四柱	天正十年一月	町村合併前までは祇園祭りは七月二十一日であった
稻生神社	東今泉字馬場	倉稻魂命外	明歴二年二月	旧地頭石河土佐守利政が崇敬、本社造進
琴琵琶羅大神	東今泉字三本松	大物主命	享和元年酉年三月	野口六郎左衛門、青柳新右衛門、兩人の発起により鎮守する
御嶽神社	東今泉字大堀	八意思兼命	安政元年八月九日	祭日は一月九日遠藤太治衛門家を中心となり供物をあげる
子之権現	羽計字権現前	大国主命	不詳	昭和四十五年、台風被岸により石宮に修復される、田谷家祠守り
白幡神社	宮本字白幡	景行天皇	不詳	近年、石宮に改められた
神明社	宮本東大神境内	天照大御神	不詳	東大社末社
子安社	宮本、東大社境内	豊受大御神	不詳	東大社末社
高木大神	東今泉稻生様境内	木花之佐久夜毘売命	天明元年九月	明治四十五年以前は字台にあった
磐長様	宮本(宮司宅)	皇産靈神 磐長姫命	不詳	祭日は、六月三十日、寿命の神様である

子安大明神	青馬字作ノ台	神像	不詳	祭日は、年二回、一月十三日と、八月十三日区内で行う
小野神社	小南一〇七五	建速素戔嗚命 <small>タケノハヤヒ</small> 外七柱	天安元年 (八五七)	社伝その他の記録が残されている
星宮神社	粟野一〇〇八	天御中主命外	不詳	通称妙見様、小南沼闕城の守護神と伝えられる
風王大神	小座三三二	級長津彦命 <small>ツツノノミコ</small> 級長津姫命 <small>ツツノノメノミコ</small>	不詳	春のオビシヤ、秋の氏神祭の例祭が行なわれる
八幡大神	夏目一五五二	誉田別命	元禄九年	千潟千拓後、源石衛門等、京都石清水八幡宮の分霊を勧請する
稲荷神社	八重穂字川之上	倉稲魂命	不詳	二月初午祭が行なわれる
毘教小南分院教会	小南九八二ノ二	天照大神外一二柱	明治九年	明治九年小南一五七番地に設立、昭和九年現地へ移転
神明大神	夏目四五四	天照大神	不詳	西町内鎮守
稲荷大明神	栗野字伊能	倉穗魂命	不詳	昭和五十六年五月、石宮に改築
淡島神社	小野神社境内	少彦名神 大名持乃命	不詳	小南区中の婦人、例祭に多数参拝する
石尊大権現	小南字古ヶ崎	大山祇命	不詳	夏目浅間山中腹に祀られている
稲荷大明神	小南字御園	倉穗魂命	不詳	二月初午祭を御園町内によって行なわれる
稲荷大明神	大木戸諏訪社境内	倉穗魂命	不詳	祭日は二月初午、有志信者により行なわれる
稲荷大明神	仲内字西場	倉穗魂命	不詳	区の行事として初午祭が行なわれる
稲荷大明神	大木戸東町	倉穗魂命	昭和二年二月十一日	信者有志によって豊川稲荷より勧請す(箕輪市右衛門家)
稲荷神社	羽計字清水	倉穗魂命	不詳	区内、祇園当番の組によって祠守りされる。吉祥院所有
弁天宮	宿浜(東浜)	弁財天	天保七年	棟札あり
子安神社	本郷窪谷神社境内	木花之佐久夜毘売命	不詳	区内、婦人達に信仰されている
子安様	笹川諏訪社境内	木ノ花之佐久夜毘売命	不詳	笹川の婦人達に信仰されている

神社名	所在地	祭	神	造立年号	備考
神明大神	東和田字神明	天照大神	不詳	不詳	上代御明細記にあり、祭日は二月十五日、町内講を催す
淡島神社	羽計字徳蔵寺	少彦名神 <small>スサノヲノミコ</small>	不詳	不詳	一月十一日例祭、針供養あり、婦人達がお参りに来る
淡島神社	石出林福寺境内	少彦名神	不詳	不詳	字中野にあり
淡島神社	東今泉字馬場	少彦名神	不詳	不詳	神社境内にあり、婦人病に靈驗ありという。婦人達が中心となつて針供養する

## 2 石宮・石祠一覽

各区に鎮座する「ウブスナ様」のほかにも、多数の小さな社（石宮）、石祠が祭られていることが次の石宮・石祠一覽表によってわかる。

中でも、水神信仰に関するものが多いのが特色ともいえる。

水神信仰については、利根川沿岸の住民として当然と思われるが、また当町では山あいやまがきに堰も多く、そこには必ず水神、あるいは弁天様などの石宮が祭られている。特に笹川龍神台区に見られるように、龍神（水の神）が山の頂きに祭られることは、きわめてまれといえよう。

石宮・石祠所在一覽

名稱	所在地	造立年号	造立者	備考
稲荷大明神	舟戸字八崎七九	寛政六年九月吉日	願主八崎	未年 <small>ひつじ</small> に行なわれる左右大神神幸祭のお浜降りの場所である
稲荷大明神	舟戸字蔵作	寛政四年	不明	新兵衛稲荷ともいう
稲荷大明神	小貝野字六萬部	嘉永六年	不明	祭日は三月十五日、順当番制で、祝宴を催す
稲荷神社	石出字稲荷	不明	不明	もと、東林寺の氏神、京都伏見稲荷より勧請す
浅間神社	新切字粟堀	寛政三年六月	願主岩瀬伝五郎	長山台地 <small>ちやうざん</small> にあり、もとは旧六月一日朝、はだし参りをした
浅間神社	竜神台	昭和五十五年改築	竜神台区	もと、山開きの朝早く、お参りをした
浅間大神	石出字辺田	明治二十七年三月	総区中、発起人清水嘉年他四名	林福寺の寺山にあり、同寺の氏神である
浅間神社	小南字古ヶ崎四八九	弘化二巳年六月吉日	小南村蔵福寺氏子中	例祭、七月一日、富士大行者（文化十二年）の碑もあり
浅間様	今郡字東台	文化十五年三月	願主村中世話人助右衛門他二名	もと、助右衛門家で七月一日お祭を催した
水神宮	大木戸字別当内	明治三十二年	向後常蔵他九名	祭日は一月十五日
弁天様	大木戸字別当内	不明	不明	通称弁天という。前方後円墳の頂にあり
水神宮	宿浜（東浜）	不明	不明	祭日は九月二十三日
水神蛭子大神	宿浜八坂神社境内	不明	願主、林新兵衛、林甚右衛門、宿浜、新田	もととは船手組合で祭が行われた
水神宮	宿浜（西浜）	不明	不明	
水神宮	新切字根岸	文政元年十二月	不明	
水神宮	新田	不明	不明	
水神宮	仲内原	不明	仲内町船持連中	
水神宮	孤敷天王様ウラ	不明	発起人一六名	「漁獲仰神徳」と刻まれてあり

名称	所在地	造立年号	造立者	備考
水神宮	新宿	大正七年一月		もとは、二月十五日に、村中でお祭りをした
水神宮	石出字川岸	宝曆五年三月		もと、漁師仲間で水神講を行っていた
水神宮	東今泉字水神	不詳	東今泉四番組	
弁天様	粟野字松山	大正五年一月	願主一同	発起人、鈴木セイ、鈴木ミヨ、山の中腹にあり
弁天様	夏目堰	不明		もと、鹿野戸大堰中ノ島に祀ってあったものを 山上に移したといわれる
竜神社	竜神台	寛延四年正月		長山台地にあり
金毘羅大神	新切字粟堀	明治十八年十二月	須賀山村保科春次郎	
金毘羅様	小南字上宿	大正五年二月	願主岩瀬與四郎 他大勢	
琴平宮	夏目八幡様境内	昭和四十八年十一月		近年石宮に修復
羽黒山大権現	大久保字羽黒	不明		
牛頭天王	孤敷天王様ウラ	享和二年	孤敷講中	
青竜権現	青馬代大神境内	昭和六年旧正月	高神村	
疱倉神	大木戸諏訪様境内	文化□寅十二月	山口縫右衛門67歳	
疱倉神	根方日枝神社境内	天保六年未十月	願主己之助	
三峯神社	窪野谷字爰后	明治十四年	願主根方女人衆	ほかに一基あり
三峯神社	東今泉字二本松	不明	伊藤勘左衛門外大勢	
皇産彦命	大木戸諏訪様境内	文化九年	宿浜、新田	
雷神社	新切 粟堀	天保六年六月朔日	惣村中	長山台地にあり
鷲大明神	青馬字鷲	不明	佐原長兵衛ほか七名	
金宮神社	〃	不明	宮崎甚兵衛	

田之神様	今郡字兎入	文化三丙寅五月吉日	願主滑川□□ほか四名	埴媛命、大己貴命、天照皇大神、少彦名命、倉稻魂命とあり
石尊様	新宿八坂神社境内	安政四年	願主佐久間林内村中	
石尊大権現	小南字花之入	天保十一年二月	講社中	
石裂山権現	大友天神社ウラ	文化四年		
大山阿夫利神社	八木山五九二	明治三十四年七月五日		
石尊権現	根方字年能	天保十四年卯月	根方講中	大天狗、小天狗と刻みあり 年能台地にあり
金毘羅大権現	〃	〃	〃	年能台地
道祖神	小南中宿新田	文化十年	海保源左衛門	ほかに一基あり
甲子神	夏目神明社境内	元治元年	願主清兵衛	
足尾山大権現	東和田字弥陀作	不明	他世話人二名	
子安神社	高部稻生神社境内	不明	高部区	
愛后様	大久保愛后社境内	寛政二年九月二十四日	大久保村参宮講中	
愛后神社	小南字花ノ入	昭和三十四年八月二十二日	仲下組	祭日、二月と八月の二十二日
秋葉神社	〃	文化八未三月吉日	仲宿、下宿組	
鷺の宮	東今泉字鷺の宮	不明		
猿田彦大神	小南字大平	不明		
伊勢神宮	小貝野字千神	不明	秋幡政満	駒形大明神
道祖神	仲内字辻	不明		近年新たに石宮建立
〃	根方区三反町	〃		
〃	粟野字宿	〃		

名称	所在地	造立年号	造立者	備考
浅間様	宮本字浅間	昭和七年		
道祖神	青馬新田	不明		
浅間様	青馬	〃		
弁天様	青馬ぜぎ	〃		
金刀比羅神社	青馬字白旗	明治二十五年十月	願主高嶋政藏	世話人高嶋□□門、石毛五郎左衛門
道祖神	青馬字庭内	昭和四十一年		小野氏、高野氏
道祖神	鹿野戸妙幢院	延享五年		奉祈願道祖神

## 3 寺院一覧

町内または町民に関係ある寺院は、次の表のとおりで、宗派としては真言宗智山派が多いようである。廃寺については、あるいはもつと存在したかもしれない。寺跡の確認ができなかったものもあることをおことわりしておく。

## 寺院の一覧

寺院名	所在地	本尊名	宗派	備考
天福寺	窪野谷三六〇	阿弥陀如来	真言宗豊山派	稲荷山西光院天福寺という。百万遍の行事などあり
東徳寺	大久保四八一	十一面観音	曹洞宗	大窪山東徳寺、大正六年火災にあい古文書類なし



東福寺	笹川い五八二八	大日如来	真言宗智山派	須賀山教智院東福寺、徳一僧上の建立と伝えられる
西福院	笹川い二二八〇	大日如来	真言宗豊山派	稲荷山西福院正観寺、意教上人の創立開基
延命寺	笹川い五九七	大日如来	真言宗智山派	盆の舟流しの日、川施餓鬼を行う。天保水滸伝笹川方墓碑存す
妙幢院	笹川ろ九六七	大日如来	真言宗智山派	龍神山妙幢院慶龍寺、火災で龍光院へ移転、そのまま在所
秀蔵院	新宿字上通	大日如来	真言宗智山派	王子山秀蔵院神宮寺、もとは宮本村坊屋敷にあったといわれる
林福寺	石出字中野	薬師如来 大日如来	真言宗智山派	昭和三十二年東林寺と長福寺が合併、寺名を林福寺と改称した東庄六観音の一つ准胝観音がある
吉祥院	羽計字権現前	大日如来	真言宗智山派	妙見山吉祥院星福寺、東胤頼、この台地に支城を構へ妙見を安置と伝う
東泉寺	東今泉字馬場	薬師如来 大日如来 十一面観音	真言宗智山派	昭和三十五年四月六日旧名妙義山弥勒院妙蔵寺と観音寺が合併して東泉寺と改名した
蔵福寺	小南字上宿	大日如来	真言宗智山派	円覚山地蔵院蔵福寺、始め禅宗であったが享保年間より真言に変わる
福聚寺	小南、城山	十一面観世音菩薩	黄檗宗(禅宗)	補陀洛山福聚寺、鉄牛禅師の開基
満願寺	小座三三三	正観世音菩薩	真言宗智山派	天竺山満願寺、火除け、安産の守護ありとて、縁日は賑う
禅定院	夏目二三七七	正観世音菩薩	真言宗智山派	もとは、城山の山麓にあった沼闕山善乗院湖水寺を移したものとされる

寺院(町外にあり檀家あるいはその他東庄町に關係のある寺)

寺院名	所在地	本尊名	宗派	備考
東栄寺	干潟町溝原字下谷	阿弥陀如来	天台宗	東和田、神田、稲荷入、舟戸の各区に檀家が多い
来迎寺	小見川町貝塚	阿弥陀如来	浄土宗	小貝野、平山、高部の各区、笹川の一部に檀家あり

寺院名	所在地	本尊名	宗派	備考
芳泰寺	小見川町岡飯田	十一面観世音	曹洞宗	平山区に檀家が多い
東光寺	銚子市小舟木町	阿弥陀如来	真言宗智山派	東今泉区、東泉寺の本寺である
樹林寺	小見川町五郷内	千手観世音	禅宗	地方の名刹であった。明治四年、火災にあう

廃寺一覽

廃寺名	元所在地	本尊名	宗派	備考
香樹寺	小貝野五四	阿弥陀如来	浄土宗	来迎寺(貝塚)の住職が開山、昭和三十年代、火災焼失
長光院	舟戸字宿七三五	不詳	天台宗	溝原東栄寺の末寺、同寺文書によれば最後の住職行善、文化十二年
神前寺	舟戸作ノ内七八三	阿弥陀如来立像	天台宗	右同末寺、同寺文書によると最後の住職法印智蔵、天保四年
慈眼寺	東和田字弥陀作	阿弥陀如来	天台宗	法鏡院慈眼寺といった。右同末寺
東光寺	東和田	阿弥陀如来	天台宗	花蔵山花王院東光寺、右同末寺
円満寺	神田字坊作	阿弥陀如来	天台宗	華香山勝宗院円満寺、右同上代八ヶ寺の内
満蔵院	神田字内出	阿弥陀如来	天台宗	右同上代八ヶ寺の内
観音寺	神田	聖観世音菩薩	天台宗	右同
薬師寺	神田	薬師如来	天台宗	右同
福寿寺	大友観音堂	阿弥陀如来立像	天台宗	稲荷山敬王院福寿寺、東栄寺末寺、明治九年廃寺となる
浄光寺	平山字辺田	不明	不明	直木山浄光寺
密蔵院	平山字寺台	不明	不明	
芳泰寺跡	平山字堂内			平山寺と称したが建仁二年(一一〇二)に岡飯田へ移転

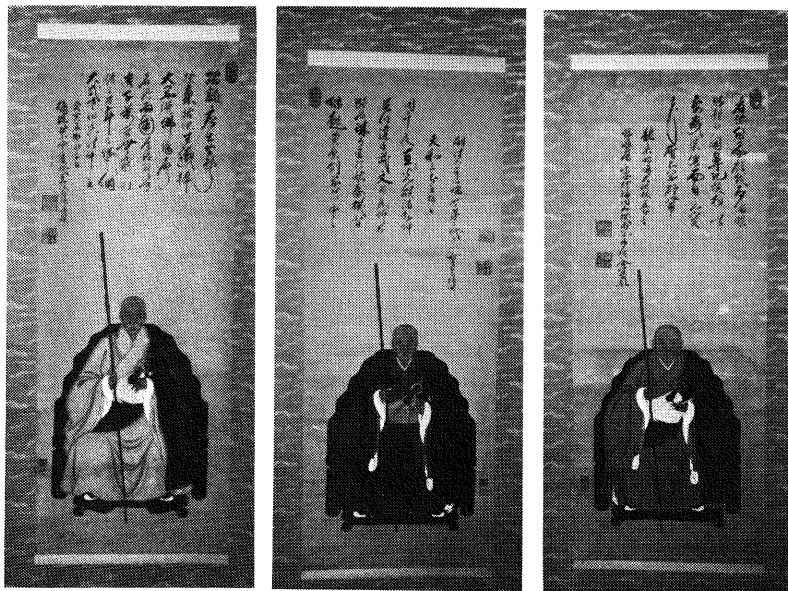
来迎寺跡	平山字夏見			建久九年(一一九八)に貝塚へ移転
西光寺跡	平山字山田入	不明	真言宗豊山派	笹川、根方区へ移転したがその年代は不詳
寿福院	高部字入場	阿弥陀如来	浄土宗	天福寺の末寺、正徳二年創立、明治五年廃寺
西光寺	根方	不動尊	真言宗	明治初年廃寺、須賀山小学校発祥の地
不動院	根方字山王	不明	不明	東福寺境内へ移転
普門院	仲内辻			
文珠院	大木戸別当内			
正幢院	大木戸坊内			
延寿院	鹿野戸			
竜光院跡	鹿野戸			
福寿院	須賀山			
普賢院	須賀山			
成連院	須賀山			
妙幢院跡	鹿野戸			
実相院	羽計字権現前	不明		
正善院	谷津字入	聖観音	真言宗智山派	聖観音立像等身大のものあり
十王寺	宮本字十王	不明		
密蔵院	青島字庭内			
阿弥陀院	今郡字弓山			
宝蔵院	今郡字弓山	大日如来	真言宗豊山派	妙幢院(鹿ノ戸)の末寺
長福院	今郡字辺田	不明	真言宗智山派	天福寺(窪野谷)の末寺
徳蔵寺	羽計(青年館敷地)			妙幢院末寺
普賢院	小南一、〇〇七	正観世音		
善乗院	小南	不明	真言宗智山派	現夏目禅定院の前身といわれる

廃寺名	元所在地	本尊名	宗派	備考
尊乘院	小南字赤羽根	〃		
恵光院	小南	〃		牛頭天主(小野神社)別当寺
宝蔵院	小南下宿	〃		
養仙院	小南御園	〃		
光明院	小南北宿	〃		
宝田寺	八重穂字川之上	薬師如来		
延正院	青馬字作ノ台	不明		
満藏院	青馬字延内	〃		
悟禪院	夏目字浅間下	薬師如来	黄檗宗	福聚寺(小南)の末寺

## (二) 文化財

「文化財」といえば、大きな寺院・神社・旧家等に伝わる歴史上有名な工芸、技術家の手によって創造されたものと一般に考えられがちである。たしかに、そのような一面ももっているのであるが、他方では、われわれの身近にあって、しかもそれを通して町の歴史あるいは「くらしの歴史」がわかるものも、大切な文化財であることを忘れてはならないであろう。

現在では、このような広い視点に立って、国や県や町がそれぞれ独自の立場から文化財を指定し、それらに対する保護を加えている。



福聚寺所蔵三幅一対画軸

本町の文化財は広く美術・工芸・芸能に及び、長い歴史のながれの上で展開された本町のくらしを知る大切な手がかりでもあると考え、ここにまとめて掲載する。ただし、金石文等でとりあげたものは、項目のみを記し他は省略した。

## 1 県・町指定文化財

(1) 紙本著色隠元和尚像

紙本著色木庵和尚像

紙本著色鉄牛和尚像

三幅一対画軸

県指定文化財

東庄町小南六九〇

福聚寺所蔵

計測 本紙

タテ一・一メートル

ヨコ四二・五センチメートル

この三幅の肖像画を描いたのは、喜多元規<sup>きたもとりのり</sup>で、天和三年（一六八三）の作であることが鉄牛自筆の賛の年月でわかる。

禅宗の高僧の肖像であることを良く示しているのは、いずれの肖像も向って右胸の部分に袈裟を結ぶ「ひも」のところに金属製の環をつけていることである。

隠元も木庵も、ともに鉄牛に師と仰がれた高僧である。この絵が描かれた天和三年、木庵が重病にかかったとの報を受けとった鉄牛は同年一月十七日に宇治の黄檗山に木庵を見舞った。この肖像画が木庵の病いと何らかの関係で描かれたものと思われるが、詳細は不明である。

作者の喜多元規は薩摩藩士で南蛮画を学び画才があり、また一方では鉄牛に師事し禅を修めたといわれ、異色の画家ともいえよう。

また、洋画的特色のひとつといえる「没線描法」を用いているのも、これまでの和風の画家とは異なった一面であるといえよう。

この三名の禅宗の高僧に付けられている賛はすべて鉄牛が記したものとみられる。

三幅の賛

(1) 隠元和尚像

踏<sup>フミ</sup>三翻唐土、坐<sup>イマス</sup>三断ス扶桑、

拈<sup>ニギ</sup>三条ン生鉄棒、大<sup>オホ</sup>ニ開クニ選仏場、

声名馳<sub>二</sub>兩國<sub>一</sub>道徳冠<sub>二</sub>諸方<sub>一</sub>  
遺<sub>二</sub>一千万古無窮之利<sub>一</sub>  
振<sub>二</sub>三百年已墜之綱<sub>一</sub>

大哉<sub>二</sub>老祖<sub>一</sub>、真ノ法中ノ王

癸亥孟陬初三日

嫡孫紫雲道棧薰木百拝 謹讚

(2) 木庵和尚像

繼<sub>二</sub>起黃葉<sub>一</sub>創<sub>二</sub>開紫雲<sub>一</sub>

施<sub>レ</sub>為誠可匡<sub>二</sub>於龍象<sub>一</sub>

機智足<sub>レ</sub>以達<sub>二</sub>乎武文<sub>一</sub>曾見<sub>二</sub>燈花開<sub>一</sub>三夜<sub>二</sub>百教<sub>一</sub>光燄滿<sub>二</sub>乾坤<sub>一</sub>

天和三春 日

嗣法不肖徒瑞聖第二代道機稽首百拝

(3) 鉄牛和尚像

看<sub>レ</sub>爾非<sub>レ</sub>我願<sub>レ</sub>我即爾

眼<sub>レ</sub>睛雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>同鼻<sub>レ</sub>孔頗相似

要<sub>レ</sub>識<sub>二</sub>渠儂面目真<sub>一</sub>

宝花警爾開<sub>二</sub>確齋<sub>一</sub>

龍集昭陽大淵猷孟春 三日

臨濟正伝三十四世修福開山機鉄牛檀合十自題

(2) 紙本著色鉄牛和尚像一幅 県指定文化財

(上巻口絵参照)

小南六九〇 福聚寺所藏

計測 本紙

タテ一・二二メートル

ヨコ三九センチメートル

この鉄牛禪師の肖像は福聚寺に永い間おかれていたものであったが、その存在が知られたのは最近のことである。

拙者老夫 誰敢輕一賭

有時慈似ニ仏陀一 有時威如ニ猛虎一 暗設ニ鉄牛機一 明搗ニ塗毒鼓一 直令ニ人天一 耳聾目瞽一

元禄九年丙子秀夏

巨龍禪人画老僧清題 干上

因遂自讚

弘福鉄牛機平書

作者は巨竜禪人画と記されていることから我が国の初期の洋画家のひとりとして知られている巨大元竜であろうと考えられる。

あかるい色彩と、やわらかい線の表現の出し方に特色があり、南蛮画とか泰西画あるいは長崎絵といわれた江戸時



代の洋画の技法を巧みにいかした肖像画として、また元禄年間という時期からしてわが国における初期の洋画のあり方を考える上での参考資料として貴重なものであるとよいていであらう。

(3) 絹本著色十六羅漢像(全四卷) 県指定有形文化財(絵画)

(上巻口絵参照)

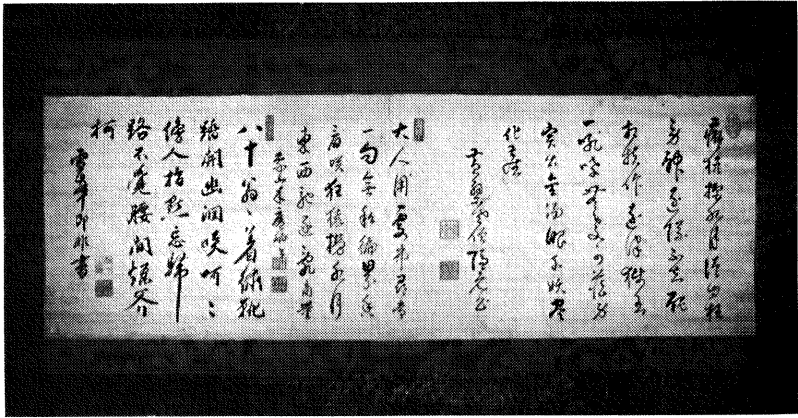
小南 蔵福寺(真言宗・智山派)

仏教説話などに良く出て来る羅漢は、われわれの周辺に五百羅漢などの名で各地にありながら、その存在意義を正しく把握している人が少ない。羅漢とは「シャカ」の教えを受けて修業し現世の人々から崇拜されるにたる高徳を具備した修業者で、一六人を一団―五〇〇人を一群の存在とする。

蔵福寺の羅漢像図は一六人三四巻に分けて描かれている(一巻は幅七五、長サ二七〇センチメートル)。

作者は房総の画家で谷文晁晩年の弟子だった鈴木鷲湖(一八一六―一八七〇)である。彼は四十歳で一派をなしその特色としたのは山水・人物・花鳥などであったといわれる。作品をみると形式化した山水画というような感じはなく、むしろ絵巻物の描法にみられる「大和絵」的手法が工夫されている様子がうかがわれる、すぐれた作品といつてよいであらう。

寺伝では、当地の素封家青野権右衛門が当寺の欄間に掲げるため特別に依頼したが、寺の宝物として秘蔵され、人々の目にとまらず知られる機会が少なかったことが、このような保存の良好な状態で残った理由であらう。



藏元、木庵・即非墨蹟・小南福聚寺藏

(4) 隠元、木庵・即非墨蹟 梟指定有形文化財

小南 福聚寺

癡猴探<sup>ル</sup>水月 從<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>枉<sup>ラ</sup>勞<sup>シ</sup>神<sup>ト</sup>  
 逐<sup>レ</sup>隊<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>醜<sup>ク</sup> 相扶<sup>テ</sup>作<sup>ニ</sup>遠<sup>シ</sup>洋<sup>ヲ</sup> 獅王<sup>一</sup>吼<sup>ク</sup>哮<sup>ク</sup> 無<sup>シ</sup>処<sup>ト</sup>可<sup>レ</sup>藏<sup>ス</sup>身<sup>ヲ</sup>突<sup>テ</sup>出<sup>シ</sup>テ金<sup>ヲ</sup>  
 渴<sup>シ</sup>眼<sup>ヲ</sup> 干<sup>シ</sup>妖<sup>ヲ</sup>尽<sup>シ</sup>化<sup>シ</sup>瘁<sup>ト</sup>塵<sup>ト</sup>

黄檗老僧隠元書

大人用<sup>ル</sup>処<sup>ニ</sup>非<sup>ニ</sup>尋<sup>ニ</sup>常<sup>ニ</sup> 一<sup>句</sup>無<sup>私</sup>編<sup>界</sup>香 看<sup>咲</sup>狂<sup>猿</sup>撈<sup>ニ</sup>水<sup>月</sup> 東<sup>西</sup>馳<sup>逐</sup>亂<sup>商</sup>量<sup>ヲ</sup>

象山木庵端書

八十翁<sup>着</sup>繡<sup>靴</sup> 踏<sup>ニ</sup>開<sup>シ</sup>幽<sup>洞</sup> 吟<sup>阿</sup>々

傍<sup>人</sup>指<sup>默</sup>忘<sup>二</sup>掃<sup>路</sup> 不<sup>レ</sup>覺<sup>ニ</sup>腰<sup>間</sup>ノ爛<sup>斧</sup>ノ柯<sup>ヲ</sup>

雪峯即非書

福聚寺所藏のこの墨蹟は「黄檗」の名僧が記したものである。この三人とも中国の明代の僧侶で、木庵・即非は隠元の弟子である。

隠元は承応三年（一六五四）日本に来て宇治に黄檗山万福寺をおこし、黄檗禅を伝えた。このあと木庵、即非も来日し黄檗宗の広宣に尽力し

た。写真でも見られるように、これらの禅僧の書蹟は大変見事なもので、江戸時代の唐様書道の特異な存在として知られている。

この書は、これら三人の来日中国僧に教えをうけた鉄牛に与えられ、それが鉄牛とともに小南の福聚寺にもたらされたものと推定されている。このような珍品といってもよい墨蹟は、黄檗宗総本山の万福寺にも存在しないということである。

(5) 鉄牛和尚墓 県指定有形文化財（史跡）

小南 福聚寺

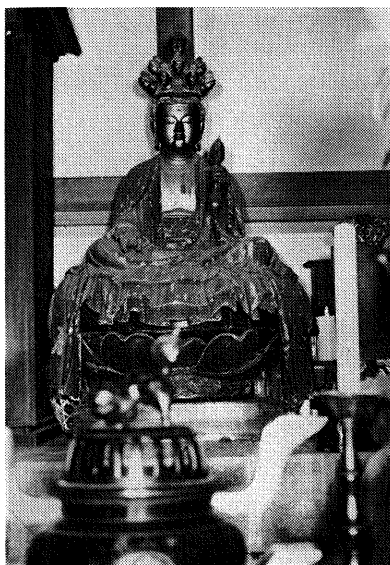
鉄牛禅師はその晩年を干潟干拓地をのぞむ小南の地にある福聚寺ですごした。

鉄牛が椿海干拓に功績があり、將軍家綱から、この干拓地に、三か寺を創建する土地を与えられ、延宝六年（一六七八）この地（東庄町小南）に福聚寺を建立した。ほかに広福寺、広徳寺の二か寺はすでに廃寺となっている。

鉄牛和尚墓  
元禄十二年（一六九九）江戸、牛島の弘福寺から小南の福聚寺に移り住んだ鉄牛は、七十三歳で没した。遺言によって境内で茶毘に付され、そこにこの塔が建てられた。

「開山鉄牛機老和尚之塔」の文字が刻まれている墓石の部分は仙台藩主伊達綱村の寄進による安山岩である。台座





木造十一面観音座像（小南福聚寺）

や基壇の部分は花崗岩で、これは稲葉正通の寄進である。  
形式は卵塔といわれる無縫塔の一種で総高二メートルほどのものである。

隠元と木庵をたすけ、日本の黄檗宗を創立した鉄牛は近世高僧の一人にあげられており、エネルギーシユな生涯をおくった人物である。その実力は、この石塔をつくるにあたってその石材を一人は東北の大々名伊達藩主、もう一人は幕閣の要人が寄進していることをみても理解されよう。

(6) 木造十一面観音座像 町指定文化財

小南 福聚寺

福聚寺には延宝五年中国福建省温州開元寺の石帆和尚からおくられた等身大の十一面観音が安置され補陀落山と号したといわれているが（『鉄牛』・大正二年千葉県内務部刊行）、これがそれにあたるものかどうかは現在のところ、はっきりとはしていない。しかし「十一面」の排列方法などが日本の形式とは異なっている。そのためあるいは、この仏像が、という見解もある。

台座より化仏頭頂まで一四〇センチメートル・膝張り七八センチメートル・厚手の衣紋が重々しく膝をおおい、蓮弁は簡単ではあるが分厚いのが特色である。

寺伝では、陳和郷(中国の宋時代の鑄物師・寿永二年に奈良東大寺大仏を鑄造した人物)の作というが本像は木像でもあり  
確証はない。

(7) 渡辺華山筆紙本著色花鳥図(一幅)

稲荷入 上代和男家蔵

江戸時代のすぐれた文化人として有名な渡辺華山は、三河の田原藩の家老でもあった。  
上代家に伝わるこの「花鳥図」は華山が銚子に來たとき上代家において描いたといわれる。たて一三〇×よこ六二  
センチメートルというかなり大きなものである。「ボタン」の花の上に二羽のクジャクが描かれており、特にその写  
実性が高く評価されている。



渡辺華山花鳥図

なお裏に、椿つばき椿山ちんざん(華山の第一の門人)の奥書で「我師華  
山の御遺墨也。今春此幅如会故人」(自分の先生である華山  
の残した作品である。今これをみると亡き先生に会っているよう  
である。)と記されている。

東庄町と渡辺華山の関係はいろいろあったらしい。ま  
ず、この椿 椿山が一説には東庄町の出身者だともいわ  
れ、窪野谷の高木甚左衛門宅にも華山が来て、絵を残した  
ともいわれている。しかし此処は焼けてしまい現在それを  
みることはできない。

(8) 木造妙見菩薩 町指定文化財

(上巻口絵参照)

宮本 東保胤家蔵

千葉一族が妙見尊を一族の守護神として信仰していたことは、史書や家紋に、よくあらわれている。東氏の子孫にあたる宮本区の東家にこの木造妙見菩薩が伝わっていたのが判ったのはそう古いことではない。これが発見された後バラバラの木片のようになっていたのが復元されて、現在、東庄町役場に保存されている。

総高五二センチメートル、像の身長、約四六センチメートルで一般の妙見像と対比すると大型の部類に入る。

本像が僧形であること、前述の如くかなり大形であること、千葉市千城「栄福寺」所蔵の『千葉妙見縁起絵巻』に見られる妙見尊の画像と良く似ていることなどから南北朝から室町時代の作品かと推定される。しかし、千葉系図中の「建久三年壬子正月廿二日城中に妙見尊星王ヲ勸請尊像ハ運慶之作也」とあることと、この妙見像を対比して考える意見もある。

(9) 筒井内蔵忠次略画像(一幅)

稲荷入 上代和男家蔵

筒井内蔵忠次は、戦国時代の名将といわれた筒井順慶の一族で、関ヶ原合戦のころには徳川家康に仕えた。ある日、家康が「お前の絵だ」といって書いたものを忠次に与えたのが、この絵だと伝えられている。なおこの絵は筒井忠重のものという説もあるが、忠重は忠次の子どもで忠重が三十七歳のとき、家康が死んでいるので、おそらく絵の

表現からみて若者ではないので父にあたる忠次のものであろう。

東庄町上代郷はこの忠次の子孫の知行所として、明治維新に至っていた。維新で旧幕臣は一般的に生活に困窮し

た。当時の筒井家の当主（栄太郎忠奉）も例外ではなく稲荷入の上代家に寄偶したが、世話になった代償として上代家にこれが遺されたという。

たて五五×よこ三九センチメートルの大きな紙の中央に不釣合な小さな武士がひげ面で肩衣かたぎぬをつけて坐っている姿が描かれている。

徳川家康の「イタズラ描き」とでもいうべきもので、伝来がはっきりしていないければ、とても現代まで残ったとは思えないものである。



徳川家康の描いた筒井忠次略画像

(10) 木造聖観音立像（一躰） 町指定文化財

夏目 禅定院



聖観音立像（夏目 禅定院）

東氏の初代、千葉常胤の六男東胤頼の次男胤方は海上氏を名乗り、海上次郎胤方と称した。この次男は東盛胤といわれ本町の沼闕城に在った。この聖観音立像は、東盛胤の守護仏として初めは、城中にあったといい伝えられている。後世掛巢実胤



多田舎人肖像(探元守国描画)



多田舎人肖像(桂林守部描画)



多田舎人肖像(藤原惟程描画)

が現在地(禪定院の地)に移したと伝えられている。  
像高一一五センチメートル、楠材が用いられ藤原期の様  
式を伝えているといわれているが虫損が甚だしく、それだ  
け古さを良く示しているともいえる。

(1) 紙本著色多田舎人肖像画(三幅対)

町指定文化財

根方 西福院

西福院に存在するこの肖像画は当寺の大檀那で名主でも



あつた多田舎人知義を描いたもので同一人物を三人の画家に描かせたところに特色がある。

多田舎人知義は西福院を再興した人物として知られ、同寺院の再興のために仏像、仏画、仏具を購入したり、自宅にあるものを寄贈したりしたといわれている。

桂林守部の作品には賛がない。たて八九・二×よこ三二・八センチメートルであり、探元守国の作品には「稻荷山正観寺西福院、中興開基皆建立護持・大檀那多田舎人知義之肖像」と賛がある。たて一一〇センチ、よこ三五・五センチである。

藤原惟程の作品には「当時皆建立大檀主多田舎人知義春秋六十三歳の像」と賛があり、たて九三・四センチ、よこ三三・四センチで、賛の内容からみても三幅対の肖像画として同年代かあるいは、そうはなれていない年代のうちに書かれたものであるといつてよいであろう。

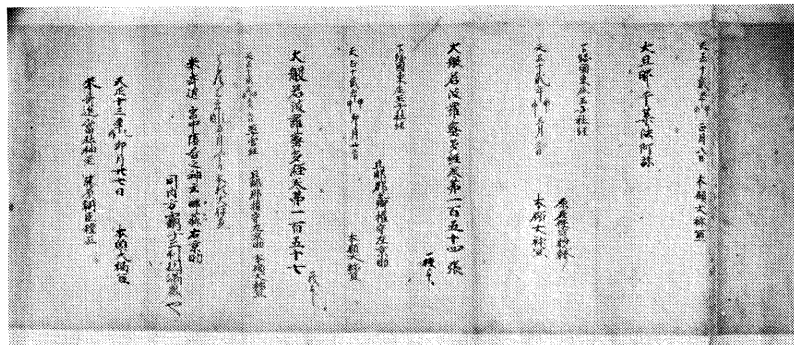


根方西福院聖観音立像

(12) 銅造聖観音立像（一鉢） 町指定文化財

根方 西福院

西福院の秘仏として伝えられているが、いつ西福院に、どのような経路で入ったか不明である。像高三四センチという小さいものであり、これを直接見られた海老名雄二氏は作期に関し、小さいが全体として良く整っている。髪に毛筋が立ててあり鎌倉後期の作と推定されている。



東大社藏大般若經奥書

(13) 紙本大般若經奥書集 町指定文化財

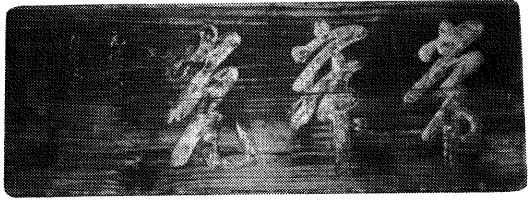
宮本 東大社

神社に寺院で用いる経典が存在するというを不思議がる人もあるが、これが中世から近世にかけての神社の実際のすがたであって、われわれが目で見える神社と寺院の關係は明治維新で神仏分離令が出されて以後の実態にある。江戸時代まで「○○宮」といって神社様式であって、鳥居があってもそこに僧侶がいるということは、さして珍らしいことでもなかったのである。

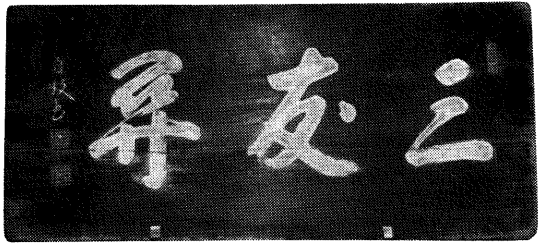
したがって、神社にも経典が奉納されたりしている。

大般若經の奥書とはこれを書いた年月日や作者を記してあるので大変貴重なものであり東大社に現存するものは鎌倉時代から江戸時代にかけてまとめである。これは昭和十三年、宮地直一博士の手でまとめられたものであつて史料的价值が高いものである。

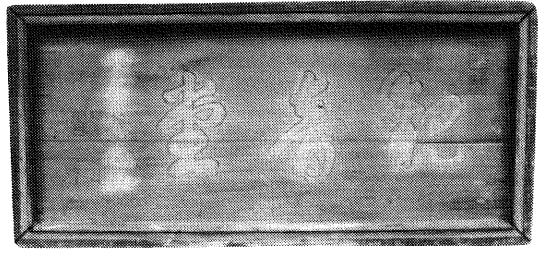
金石文の項でとりあげたため、此処では再度とりあげなかったが、当社所藏の「蒔絵玉鉢宝函」の朱書のなかにも「奉三施入ニ金字大般若經一卷……」とあることを付記する。



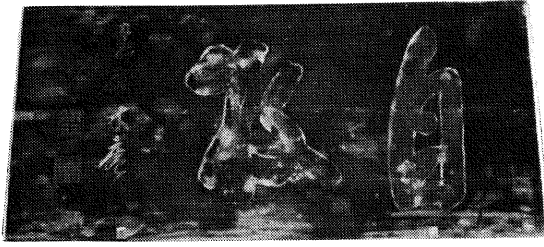
鉄牛（号自牧）の筆による扁額



同上



隠元の筆による扁額



木庵の筆による鉄牛に与えられた号の扁額

福聚寺は鉄牛の名とともに知られている黄檗宗の寺院で初期には山門、仏殿、観音堂、方丈、庫裡などが軒を並べ、偉観をほこっていたと推定されるが、現在は旧観を知ってだてすら存在しない。

(14) 扁額・柱聯 町指定文化財

小南 福聚寺



福聚寺の柱聯

ただ、当時これらの諸堂舎の柱に掲げられていた柱聯が数点と堂舎にかけられたであろう扁額によってわずかに往時をうかがい知ることができ。

殊に鉄牛の筆によるところの「普陀洛山」「常寂光」「三友關」の木額や

鉄牛の師、隠元禪師の筆による「観音堂」の額は、貴重なものである。

また柱聯は寺院の柱にかけられているもので、大体は中国の元朝以降の寺院での流行のようにも言われているが、日本では禅宗の寺院にこれがみられるのは、禅宗という宗派が鎌倉新仏教のひとつとして、成立したものであるからであろう。

福聚寺に残されている柱聯は鉄牛の筆によるものでダイナミックな筆力と唐様書風などに、その特色が見られる。

## 2 郷土の文物

古い歴史をもつ本町では「文化財」と規定できないが、郷土の歴史を伝えるものがいろいろ存在する。

これらのものは価値判断もあいまいで、とかく軽くみられがちであり、「文化財」の指定をうけたかどうかで評価されやすいが、もう少し広い目でみて郷土にある先人の遺したもののいくつかをここにとりあげた。

第7表 東庄町所在 県、町指定文化財一覧

区分	番号	名称	所在地、指定地伝承地(番地)	所有者または伝承者	指定年月日	員数(面積) m <sup>2</sup>	周知施設の有無
県	1	笹川の神楽	笹川い677	笹川神楽保存会	昭和 40. 2.27		
	2	紙本著色隠元和尚像・木庵和尚像・鉄牛和尚像	小南690	福聚寺	45. 5.17	3幅	
	3	紙本著色鉄牛和尚像			45. 4.17	1幅	
	4	隠元・木庵・即非墨跡			45. 4.17	1幅	
	5	鉄牛和尚墓			45. 4.17	5 m <sup>2</sup>	○
	6	絹本著色十六羅漢像	小南1021	蔵福寺	46. 3.26	4巻	
		下総国香取郡東庄郡郷枝谷村野帳	谷津	谷津区	57. 4. 6	2冊	
		下総国香取郡東庄郡郷枝今郡村野帳	今郡	今郡区	57. 4. 6	2冊	
		下総国香取郡東庄郡郷枝鹿野戸村谷帳	鹿野戸	鹿野戸区	57. 4. 6	3冊	
町	1	木製玉体宝函	宮本434	東大社	48. 2.19	1基	
	2	紙本大般若経奥書集	宮本434	東大社	48. 2.19	1幅	
	3	木造十一面観音坐像	小南690	福聚寺	48. 2.19	1軀	
	4	木造観音立像	夏目2377	夏目禅定院	48. 2.19	1軀	
	5	木造妙見菩薩像	笹川い579-1(役場保管)	東 保胤	48. 2.19	1軀	
	6	下総式石塔婆	東今泉942	東泉寺	48. 2.19	1基	
	7	紙本著色多田舎人肖像	笹川い2280	西福院	48. 2.19	3幅	
	8	銅造聖観音立像	笹川い2280	西福院	48. 2.19	1軀	
	9	左右大神の神楽	舟戸716	左右大神神楽保存会	48. 2.19 56. 4.23		

### 肉筆「長崎絵」について

東和田区 木内勝男家蔵

江戸時代末期に、長崎で医学を学んだ本町木内家（当主は勝男氏）初代東行氏が遊学先の長崎にて入手し故郷にもちかえったこの一巻の絵巻は、おそらく当時あまり旅をする機会に恵まれなかった土地の人々の目をどの様に驚かしたか、想像するだけでもあまりあるものである。

今回、町史編さんにあたり木内家を訪問し、たまたまこれが編集委員の目にふれたもので、このような珍しいものがあることすら一般の人々の記憶から消えていたのである。

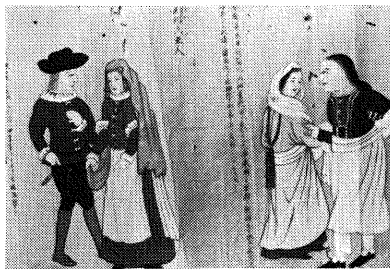
由来をうかがうと、先々代の木内東行氏（生年寛政十年（一七九八）—明治四年（一八七一）73歳没）が長崎で医師修業のおりに入手されたものであるとのことであった。

木内家所蔵になる「木内東行墓碑銘」（依田百川撰）によると、木内東行は匝瑳郡東谷村の出身で、長崎に西洋医学修学に出かけたのは嘉永三年（一八五〇）のことで師は田中周作であったと記されている。

「長崎絵」とは、鎖国を続けていた当時の日本にあって唯一か所だけ外国文化の西の玄関として開けていた「長崎」にみられる異国人（主としてオランダ人であるが）の生活や風俗習慣を描いたものである。

日本の西端にあり、自分たちの環境とは全く異った特別のムードをもった土地の香りをもたらずものであり、その多くは当時流行した版画となり、人々の目にふれたものである。

しかし、木内家所蔵の絵は版画のような単片のものではなく、絵巻物形式の肉筆であり、しかもそれに丁寧な色彩がほどこされていてその価値は一層高いものである。これが表装でもされていけば人々が関心をもったであろうが、



長崎絵の一部

和紙を丸めたようになっていて周辺がすり切れたりしているためあまり関心をもたれなかったものと思われる。

最近『みづゑ』（一九八一）八月号で、兼垂護氏が「長崎絵」を紹介しているが、それでも一般にあまり知られているとは言えない。「長崎絵」は江戸時代中期（延享の頃）から始まり幕末まで、およそ二〇〇年間もの間人々に親まれて来たものである。そのテーマは主として、船・紅毛人・東洋人・黒人・珍しい動物・唐人風俗・風景・地図などが対象となっている。

木内家所蔵のものは、この人物（世界各国の人種）を描いたものである。

「長崎絵」を買い求めた人々は、遠く故郷を離れ長崎を訪れた人で、商人・医者あるいは蘭学者とか向学心にもえて長崎で西欧文化を学んだ若者あるいは見物を目的に当地を訪れた富農の御隠居などであった。

このような人々は、長崎に行った証拠として「長崎絵」を買い求め、長崎のおもいでとして「ふるさと」に持ち帰り、とぼしい灯火の下で、それをひろげて村人に自分の見

聞いた長崎のことをかたったことであろう。ある人はここに描かれた唐人の姿を見て目を見はり、またある人はさまざまな服装や肌の色をしたいろいろな風俗に好奇の目をみはったことであろう。

木内家にこの「長崎絵」に関する記録はないので良く判らないが版画に比して、これは当時かなり高価なものであったと推定される。それは、この絵に描かれている各国の人々の姿がかなりしつかりとした筆致で描かれているし、色のぬり方も大変ていねいである。安物のその場しのぎの間に合わせ物でないことは、この絵の現在の様子をみれば一目瞭然であり、それは当然この「長崎絵」の価格に反映していただであろうと考えるからである。

時代の変遷とともに人々から忘れ去られた肉筆の「長崎絵」の存在は、これが当地にもたらされた経過と併せ考えるに、当時の本町の文化を探究する上で貴重な一史料であるといつてよいであろう。

なおこのほかにも、西福院、その他に特記すべきものもあるが、全てをとりあげきれないので、ここに代表的事例として「長崎絵」をとりあげた。

### 3 文献・記録

#### 東氏関係資料（宮本区 東 保胤氏蔵）

東庄の東氏といえは、千葉常胤の六男で胤頼という人物が遠藤左近将監持遠に従い上西門院に仕え、従五位に叙せられ、源頼朝が源氏再興の拳兵にあたり、兄弟の中でも大功抽んで、頼朝の一字を与えられ胤頼としたとか『千葉伝考記』の中に特筆されている人物である。

特に東氏に関しては、嫡孫胤行が素運と称し和歌の道に秀で藤原定家の門人として「古今伝授」の中に特記された



る人物である。

したがって、東氏といえは鎌倉武士の中でも文武両道にすぐれたる家柄として『吾妻鏡』の中にも一族の名が出てくる。町史編纂にあたっては、このことに關しては、中世の項目に記されているので、この関連項目を参照されたい。本項においては、それらの中でも現在その子孫として、東氏關係の文芸に關する諸資料を保存されている当町宮本の東保胤氏のところの資料を紹介しておく。



東保胤家

当家は何回か火災にあい古いものを焼失しているので、数代にわたり書写されたものなどを現在手許にとどめている程度であるが、最近は冷泉家の史料公開などのニュースもあり町史編纂では間に合わなかったが、今後に期待し、宮本の東保胤氏の手許でみられるものをもとに、ここにとりあげた。

なお東氏の歌道關係の史料に關しては、岐阜県郡上郡大和村の『大和村史 史料編』にくわしく記されているので、これを併せて参照してほしい。

東保胤氏が所蔵する文献（筆写本）

- (1) 東野州聞書卷之一  
(一四四九)  
文安六年七月廿二日拓月
- (2) 宗祇禪師貴報 文明十四年
- (3) 源語秘決附録 文明九年

- (4) 東家代々和歌(全) 寛文十一年
- 二条家和歌指導
- (6) 常縁集 寛文十一年秋
- (7) 家大系譜 附録 明和
- (8) 東禅寺創立由緒書 弘化二年十一月
- (9) 千葉系図並ニ系譜 幕紋之図
- (10) 上野国染谷川合戦妙見尊神言之事
- (11) 東家歌道血脈伝
- (12) 芳泰寺創立由緒書 明治四年
- (13) 湯本堅メ

この他筆写本として東家に伝わるものは、いろいろあるが、東氏の文芸を知る資料として、主たるものを、ここにとりあげた。

なお東氏といえは古今伝授であるが、これは日本文学史上の特記事項でもあり、あまりにもひろく知られていることなので、中世の記述を参照していただくことにして、郷土に伝わる文献の中で、このことをとりあげている。『千葉伝考記』の関連部分を次に引用しておきたい。これは千葉氏関係の史料として千葉家の遺臣(天正十八年・千葉氏滅亡後)が江戸時代の享保・元文年間に記したものとされ、その内容も比較的信頼するに足るものである。

ここにとりあげた「古今伝授の事」の内容も、そう大きな過誤はみられないので、ここに参考までにとりあげるものである。

## 千葉伝考記「古今伝授の事」

古今集脈伝のことは藤原定家卿の家伝にして、二条家の上の冷泉家に伝来せるものあり。されど其の頃は兵乱打絶ゆる日なく、公家と雖ども文事を顧る違なき有様なりければ、歌道の如きも随つて衰微に赴くを慨し、予て歌道に熱心深き東常縁は、冷泉家に金銀の幣物を贈りて、懇望他に異りければ、古今集の奥儀は悉く伝授せられたり。然るに上の冷泉為□卿は其の後急死せられければ、冷泉家の伝来は、ここに絶え果て、今は東家にのみ伝はる事となれり。然るに西三条の実孝卿（三条西実隆カ）、歌道熱心につき、宗祇法師が諸国修行するを以て、之を中人として、東野州方へ古今集の伝授を所望に及びぬ。常縁は実孝卿（実隆）の熱心に感じ、授与することを諾したり。宗祇その伝授を得て之を実孝に通達せしが、宗祇は元來中人として伝授せられしものなれば、余人には伝授する事なかりしを、世に「宗祇が伝授を惜しみため相統の人なし」と云ひ伝えたるは、此の事を知らざるが故なり。

三条実孝は後に称名院と号せり、其の子息は逍遙軒と号せしが早世せしかば、古今の伝授は、細川兵部大輔藤孝入道幽齋へ渡されたり。藤孝は細川陸奥守元有が家督なりと雖も、実は足利將軍義晴の子にして、母は三条実孝の女、即ち義晴の愛妾なり、されば藤孝は、実孝の外孫なるが幼少より諸芸に通じ中にも歌学にいそしみ、外祖父実孝に就て学び、奥儀の伝授ありしといふ。

其の後豊臣秀吉が文禄元年朝鮮征伐の時、名古屋（肥前国名護屋）の御陣へ藤孝入道幽齋も参りけるに、日本に一つの伝授なる古今奥儀の一書は箱に蔵め、烏丸光広卿は歌道の門弟といひ殊には婿なりければ、之を預け置き「我若し遠境にて終命せば、三条家へ対談し、禁裏へ献上し賜はるべし」と言ひ遣して一首の歌を添へたり。

いにしへも 今も替らぬ言の葉の

こころの末を残す言の葉

幽齋は其の後西国より悉なく帰京ありければ、烏丸光広卿より、此の箱を元の如く幽齋方へ返戻せり。その時「明けて見ぬか

ひはありけり玉手箱昔にかへす和歌の浦浪」と一首をぞ添へられける。慶長五年大阪の戦役起るや細川幽斎、同越中守忠興父子、東照公の御味方として、忠興は関東へ御供申し、父幽斎は丹後国田辺にありけるを敵徒忽ち此の城を包囲せり。時に八条親王を以て、伝授の箱の儀、此の度討死仕り候はば、日本第一の伝授絶えん事を歎かはしく存ずるに付き献納致したき由を以て禁裏へ差上げらる。

後陽成天皇畏くも幽斎が死を惜しませ給ひ鳥丸大納言光広、三条実条兩卿に中院通村卿を添へて差遣はされ、和睦の御扱ひを勅命あり。古今伝授の事、其家なれば三条実条卿対面して、直に相伝申すべき由にて、古今に限らず八代集、源氏物語の伝授なさしめ給う。実条卿伝授の頭人となりて、禁裏へ御取次申上げらる。光広、通村相添へて、此の事を残らず聞き得たり。然れども伝授の正脈といふには非ず。

かくて、古今の伝授禁中へ上つてよりは、公家の伝授は禁裏にて御相伝あり。奥意の書付箱に納め、勅封にて賜はれり、之を古今伝授といひ、自分には、此の勅封を切る事能はざる由なり。されば古今伝授望みの公家あれば禁裏へ奏聞して、彼の箱を持参し、御前に於て御封を切らせられ、其の所を拝見したる後、直に直封にて預るなり。故に、子孫へも伝来あらず、若し死亡する時は、禁廷へ返上し奉るなり。されば中院通茂卿は古今の伝授ありしかとも、子息の通躬へは伝授ならず、斯くの如き有様に、古今奥儀書の箱は勅封なれば、唱へ誤りて箱伝授と世話に云ひ伝へ、箱伝授は誰人もなるやうに言ひ習はすと雖も、実は格別の事なりと知るべし。

東 莊 志 (全九冊)

東 莊 嘶 (全一卷)

(菅佐原治郎左衛門家藏)

この二つの著書は、江戸時代末期(慶応三年までの記述あり)に現在の小見川町貝塚に住んだ、菅佐原治郎左衛門によって記述されたものである。両方を一緒にとりあげたのは筆者が最初から、これをワンセットとして作成したらしい傾向がみられるためである。

東莊志の内容は、本町を中心にして、さまざまな歴史・伝承をかなり巾広くとりあげ、当時、この地域の人々が土地の歴史として言い伝えていたことをかなり詳細にわたり探訪してあり、一面では貴重な民俗学的資料でもある。第一巻〜七巻が一区切りで第八巻は追加田舎論語という副題があり、第九巻も追加編という構成になっている。内容についてみるならば、第一巻（巻之一）は、次のように書き出されている。

#### 阿玉台村

○和名抄ニ曰海上郡郷名編<sup>7</sup>玉

今云香取郡阿玉台村是なり

阿玉台村初産神様之御神宝ニ黒き

玉有り黒きは闇なり〜以下略

このように東莊志とはいいなながらも東庄町周辺町村のことをかなり広範囲にとりあげている。地名のいわれなど、かなりくわしく考証していて著者の博識ぶりがうかがわれる。

第五巻などには、小南の福聚寺と鉄牛のことをとりあげ、鉄牛と伊達綱村・稲葉正通との間にとりかわされた書簡の写しなども入っており、全く伝承などだけを集めたものとは異なった、史料集的性格をも備えている。

東莊断になると、東莊志の補遺のような内容を簡略な文体であらわしている。

この力作を残した、菅佐原治郎左衛門は享和元年（一八〇一）に生まれ、明治十三年（一八八〇）に八十歳でなくなっている。

友垣とも称し、子孫も代々治郎左衛門を名乗ったという。

家塾を開き、子弟を教育するかたわら、このような著書を著わした。

貝塚雑話・古戦場考・下総雑話などがある。

墓所は小見川町来迎寺にある。

下総国名勝図絵 (宮負定雄画)

宮負定雄は現在の香取郡千潟町の出身で、寛政九年(一七九七)に当地松沢村の名主であった宮負定賢の長男として生まれた。

平田国学の熱心な信奉者であり、自らを「芋掘名主」と称し家族主義的な農業振興案を提示し、実践し、平田氏が処方するところの和方医学の薬の販売もおこなっていた。

また彼は一方では、博物学者的な存在でもあり、植物を研究したりしている。

同時に絵を描くことが上手で、現在でも宮負家に定雄の作品がいろいろ伝えられているが、それらの中でも、ここにあげた『下総国名勝図絵』は代表的なものであろう。

東庄町に関連したのもかなりとりあげられていて、写真のなかった江戸時代に当時の様子を知る貴重な資料でもある。

『下総国名勝図絵』のうち当町関連内容

○小南村補陀洛山

○開山鉄牛機老和尚之塔

- 小南村補陀洛山（絵）
- 同（絵）
- 同（絵）
- 桜井村前掛城跡（絵）
- 玉子明神社
- 同（絵）
- 今泉村 愛宕山に登りてよめる長歌
- 鹿の戸村 竜神山に登りてよめる長歌 短歌
- 菰敷の原をよめる長歌
- 今泉 愛宕山（絵）
- 鹿の戸村 竜神山（絵） 南方眺望
- 今泉 愛宕山（絵） 其二
- 鹿の戸 竜神山西方眺望（絵）
- 同 北方眺望（絵）
- 同 東方眺望（絵）
- 菰敷の松原（絵）
- 笹川諏訪神社（絵）
- 森山城跡（絵）

宮負定雄は安政五年（一八五八）九月、六十二歳で世を去った。

### 大友城址考

（飯田伝一著）

### 大原幽学の事蹟

飯田伝一氏によって著わされたこの両書とも当地域にとつては大変重要なテーマをとりあげたものである。

『大友城址考』は、大友城にかつて平忠常が在住したという前提に立つて飯田氏のこれまでの研究をまとめたものである。

『大原幽学の事蹟』は飯田氏の著作物の中でも特記されるべきもので、大原幽学の経歴と農民教育という視点を重視して著わされている。大原幽学の研究としては越川春樹氏のもの、読みものとしては高倉テル氏のものがよく知られているが、飯田氏の著書の内容は学的要素をもっているといつて良いであろう。この本は昭和九年五月東京・東興社と財団法人、八石性理学会によって刊行されたものである。

著者の飯田伝一氏は、明治十二年（一八七九）十一月に当時の大友村で生まれ、千葉県立師範学校卒小学校訓導、中等学校教員、上智大学教授などを歴任された。大正六年刊行の『大字典』（講談社）の編者の中に上田万年博士らと共に飯田氏の名がみられる。

飯田氏は昭和二十年の東京空襲で罹災、郷里東庄町大友に帰り、上智大には当地から出かけていた。

昭和三十三年に大学教授を引退後、東庄町の教育委員などをし、昭和三十七年四月に病没した。

墓所 大友観音堂墓地



千葉県郷土史 (笹川 矢部鴨北(桂三))

世界中が不況にあえぎ、日本でも後に、昭和恐慌時代といわれた昭和四年一月に、千葉県のことをくわしく記した本書が刊行された。

同郷人(同じ長生郡出身者)のよしみであろうか、東洋史研究の大家白鳥庫吉博士が推せん文をかき、当時の千葉県知事福永尊介も一文を寄せている。

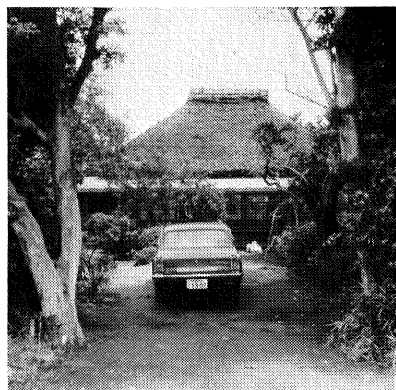
内容は旧房総三国、安房・上総・下総の三ブロックに区分し、それぞれの最初の部分に概略を記述し、その後各町村に分けて各地の特色、神社・寺院に関し、あるいは名勝・旧跡などをとりあげている。それが単なる観光案内書にならないのは史料をあげて説明や考証を加えているためである。一例をあげれば、「日蓮」のことを書くにあたっては『日蓮聖人註画讃』の記述を引用したりして、それまで「郷土関係の著作物」といえば「オラが郷土は日本一」的な筆法で書かれたものが多かった中で、従来とは少し違った感じの著作物として特色があった。

この著者矢部鴨北(本名(桂三))氏は長生郡八積村信友で文久三年(一八六三)に生まれ明治十五年千葉県師範学校を卒業し本町の笹川小学校の先生となり、その後夷隅郡長者町の小学校に転任したりするが退職後また笹川町に移り住み、昭和十八年六月に当地で病没した。墓地は、笹川坊内原共同墓地。

香取郡誌

(青馬 (岩堀)  
山田角次郎号・秋堂)

現在われわれが手にする「○○郡誌」という本は、千葉県では大正末年に、郡制廃止を契機として県内各地の教育会が中心になって編さんしたものである。



青馬区 旧岩堀家



岩堀角次郎の墓碑

しかし、ここでいう『香取郡誌』は全く別のものである。したがって郡制廃止に伴って刊行された香取郡誌もあるので、香取郡では二種類の郡誌が存在していることになる。

本書は、明治三十二年に刊行されたもので全五巻（但し一冊本）約五〇〇ページに及ぶ大作である。内容は地誌・歴史・寺社・名勝旧跡・人物に及んでいる。

著者の山田角次郎は慶応三年東京生まれ本町橋村青馬の岩堀太郎左衛門家に養子に入った。しかし著作物に岩堀姓を用いるのは後年のことで、本書編纂のころは旧姓名山田愨を用いている。

青馬では郷土研究のかたわら塾を開き、漢籍を教授していたということである。

大正末期に刊行された郡版の千葉県香取郡誌の刊行・千葉県郷土誌刊行などの事業に関係し、昭和二十九年二月五

日病没した。墓所は町内向台共同墓地と遺族の住居の関係で東京霊園に分骨されている。

大利根物語——流路変遷と伊奈家の人びと（柳瀬 至康）

三国山脈に源を發し延々三二二キロメートル、関東平野を斜めに突っ切るように流れ、坂東太郎の異名をもつ利根川について、人々の知識は意外なほど少ないものである。

第一に利根川が昔から銚子の方に流れていたのではないということ、承応三年（一六五四）、四代將軍家綱の時代に、伊奈氏によって手がけられたこと、もっとも最初のころみはもっと早く文祿三年（一五九四）ころ開始されたことなど歴史上利根川はどのように改造されてきていたかということ、洪水の問題、現在に至って塩害の問題、印旛沼開発のこと、など利根川に接する土地に住む者として、利根川に関する基本的知識をまとめられているのがこの本である。

著者、柳瀬至康氏は、笹川の出身で大正七年生まれ、社団法人水道協会、東京都水道局、銚子市水道部工務課長などをつとめ、その経歴から推しても、水と因縁の深いことがわかるし、本書を著わそうとした意図の根源も理解できるといふものであろう。

本書は昭和四十年十月に刊行された新書判一五〇ページほどの内容で日本水道新聞社刊行ものである。

柳瀬氏は本書出版後、昭和五十三年四月に病死した。墓所は鹿の戸西共同墓地にある。

上代郷明細記（著者不明）

本町の一部である旧和田村、神田村と桜井村（現千潟町）三村に関する、村治資料である。内容から推察して江戸時

代の文化年間ごろに記されたものであろう。

江戸時代の村をおさめる、庄屋、名主の「手鑑」のようなものとして作られたものであろう。作者がわからないのは、何人(何代)かにわたって書き続けられたらしいので、当然のことといつてよいであろう。ここにあげた三部の「明細記」は本町、稲荷入区、上代和男家に伝わっていたものである。

神私実事 (宮本 東大社蔵)

東大社にのこるもので、地域に関する記録としては最良のもので、神社関係の記録から、神職家の個人的な交際のことまでかなりくわしいものである。

ただし、この神私実事は天正十二年(一五八四)〜弘化四年までのことが記されているが一人の筆跡であるので別に原本があり、それを更に筆写したものである。

自	天正十二甲申年	東之庄 神主家	所
至	天保二辛卯年	役	
神私実事集			

原本は各冊になって残っている。だからこれは一定年間のダイジェスト版である。各年度にわたりくわしく記述されているものが別にある。

本書が有名なのは天保十三〜弘化四年の記録で、天保十五年八月六日、飯岡助五郎と笹川繁蔵との間におこった乱闘事件の経過を知るもつとも信頼すべき史料としてである。無論記録者が乱闘の場に駆けつけて書いたわけではなく聞いたことなども含まれているためか、事実と異っている記録もある。一例をあげれば「平田深木ト申スモノ即

死」(実際は一昼夜程度生きていた)とあることなどである。

しかし、この記録の本来の価値は、このような事件史の資料としてではなく、江戸時代香取郡の一農村でどのような生活が展開していったかという村落共同体のあり方を知ることができることであろう。

前述のことは、こうした中に含まれているひとつのできごととして目を向けていくべきものと思われる。

東庄町にもこのほかいろいろな記録類があるが、一時期の資料として量的にも内容的にも本書をしのぐものはない。

「神私実事」という表題のいわれなどに関してはどういう意味でこの題がつけられたか、特に言い伝えられていることとはないということである。

## 4 金石文資料

### (1) 概 説

私たちが自分の住んでいる「まち」の歴史をしらべようとするとき、多くの場合、紙や木などに書かれているものを史料として用いている。ところがこういうものは、保存がしっかりしていない限り虫にくわれたり破損して、バラバラになったり、火災にあったりして長い年月残らないことが多い。

しかしここにとりあげた金石文というのは、石やかなものに刻み込まれたものとか、鑄造したものであり、紙や木などよりもはるかに、長い期間のこっているものが多い。

東庄町にも、さまざまな金石文関係の史料が存在する。

金石文の調査研究という了一般にわが国独特のもののように思われるが、「金石学」というのは西欧で主として発達し、東洋では中国、特に宋時代のものが知られている。

石に刻みこまれたものは「石刻」、「石文」と称し、金属に刻みこまれたものを「金文」と称し、これらを併せて「金石文」と称しているのである。

わが国に影響を及ぼしたのは、中国の清朝の頃のもので日本では江戸時代の「元禄期」に入ってきて、考証学の一部として発展している。本格的になったのは、江戸時代末期のことであるが、それ以前でもすでに鎌倉時代末期の仏教関係の文献『元享積書』には、金石文を史料考証の素材としていふことから、この歴史も決して新しいものではないといつてよいであろう。

江戸時代の事例としては徳川光圀の「那須国造碑」の発見などが知られている。

また藤貞幹は民間の研究家の第一人者で、図録作成者としても知られ「古瓦符」の作者としても有名である。

松平定信も研究者として知られ、考古学関係の資料を集めた『集古十種』などは比較的正確なものとして知られている。

狩谷掖斎は『古京遺文』を著わし日本の金石文、特に奈良時代以前のものにまで目を向け考証を加え、江戸時代金石文研究史上すぐれた実績をあげたことで知られている。

西田直養は国文学者であるが金石文の年表を作成したりしている。市川寛斎は『金石私志』を著わし各地の金石史料を集め考証をしている。

これらのほかに新井白石、『南総里見八犬伝』で知られている曲亭馬琴なども金石文に注目している。

ところで、金石文研究の対象となるものとは、どんなものかというところの次にまとめることができよう。

- 一 金工品 銅・鉄・金・銀などでできたものに刻みつけてあるもの。
- 二 石造碑 石に刻みこんであるもの。
- 三 木製品 木に刻みつけたり、墨書されたもの。
- 四 陶器類 土製品で、絵や銘文がやきこまれているもの。
- 五 その他

(1) 御正躰 前述のいずれかでできていて御神躰として礼拝の対象とされたもの(御正躰ということとは新しく江戸時代のことばである。)

(2) 経巻 経文の奥書きとして写経などのおわりに人名・年月日などが記されているもの。ただし、これは金石文に入らずに別に扱うべきだと主張する研究者もある。

(3) 布製品 布に文字が書かれたものとか『天寿国マンガラ』のようなもので、これも金石文に入れるかどうか見解がわかれているものである。

(4) 骨角製品 本来は甲骨文のようなものであるが、日本では存在しない。

このようにいろいろと区分される金石文であるが、従来は意味的なものを重視する傾向が強かったが、最近は「銘文」とともに、そのもの自体に対する追求が必要だと考えられるようになり対象物自体の変遷や分類、形態などへの究明が必要であると認識され、文献学と考古学の間においてその谷間の「橋渡し」的な役割をもっている。

また最近では発掘調査が単なる考古学として縄文や弥生時代のみに限らず古代から中世に至るまでにひろがり、地方においては「文書」の限られたなかでかなり有力な史料が提供されている例も決して少なくない。

本町の町史編さんにあたって「金石文」の調査は十分とはいえないが、これまで述べてきたようなことをふまえて

て、実施されたものである。

結果としてみるに、今回の調査では古い時代にさかのぼるといふよりも、むしろ中・近世の本町の歴史を考える上でさまざまな手がかりを得ることができたといえそうである。

本来は、各時代に、その調査結果をさしはさむべきであるが、調査の時期的な問題もあり、此処に集約してとりあげた次第である。

また、千葉県においては篠崎四郎氏の『房総金石文の研究』というすぐれた著書があり、一方千葉県史編纂室が『千葉県史料・金石文篇』全三巻を刊行しているので、これらの成果を活用させていただいたことを付言しておく。次に本町の代表的な金石文史料を掲げ、後に一覧表を付けた。

(2) 東大社所蔵の金石文資料ほか

東大社「宝函」 東庄町宮本（旧橋村）高サ三〇センチ立方体

（朱書銘）

（左）東庄玉子太明神御社壇地旅上脣等奉修理之

大工太郎左衛門 小工教仏

并玉琳安置之宮殿新造之

結縁衆惣大行事沙弥良悦同年憲胤

神主重春 物申国重 再拝申 大祢宜

重家



勢祢宜 権祢宜 太郎祢宜  
供僧一分阿闍梨源豪

東左馬助胤家 宏照

昌導 弘正 当政所家吉 百房丸

惣庄内郷々助成合力諸人等各々

心永廿三年 丙申二月十八日 時画師藤嶋

(右)

右意趣者為天長地久御願円満宝祚延長



第七節 社寺一覽・文化財

大勸進 聖人秀範敬白

玉躰安全殊者社頭繁昌庄内諸地王各願成就

并土民安泰四海豐饒天下安穩人快樂也

奉施入金字大般若經一卷為般若法味倍增威光

郡

弁

律師 秀範敬白

(後)

具一切功德慈眼視衆生福聚海無量是故応頂

礼

我滅度後於末法中現大明神広度衆生

和光同塵結縁之始八相成道以論其終

執筆 光弁

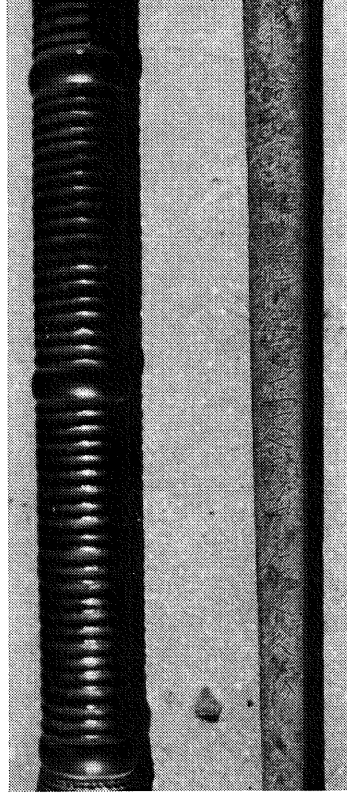
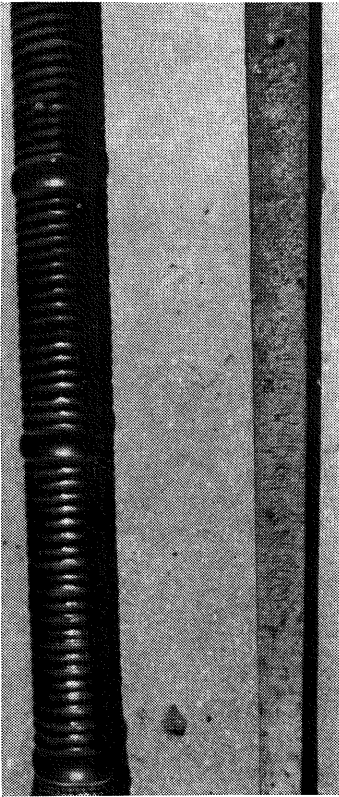
この「宝函」は、高さ約三〇センチ程度の木製の立方体の箱で濃いあずき色の漆が塗られ、そこにこの銘文が朱漆で書かれている。この「宝函」の用途であるが、後に何かに転用されたかどうかは別として（右）側に「奉<sub>レ</sub>施入<sub>二</sub>金字般若経一卷。為（以下略）」とあることから般若経を納めたものであることがわかる。またどのような意図でこれが奉納されたかは、他の部分の銘文にくわしく記されている。神社でありながら經典を納めているのは、中世の仏教信仰と神祇信仰との融合調和をめざした「神仏習合」のためとみて良いであろう。

また、東大神は中世から近世末期まで玉子大明神と称していたことがわかっているが、この「宝函」の（左）の書き出しの部分にも「東庄玉子太明神御社地……（以下略）。」とあり、そのことの具体的証明ともなろう。

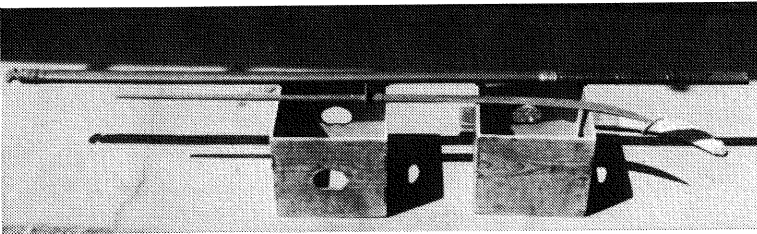
玉子大明神とは祭神が玉依姫という女神であるから「玉子」と称したのか、あるいは「王子神<sub>おうじがみ</sub>」の神が貴い児童の姿（玉のような子ども）で顕現することを意味したものか、東大神の歴史を考える上で興味のある問題である。王子神ということで考えるならば熊野権現、いわゆる熊野信仰との関係でみる必要があるが干潟町の松沢熊野社との関係や、祇園午頭<sub>ぎおんごづ</sub>の関係をぬいては考えられない。

このように金石文研究は応永二十三年に奉納された「宝函」にみられる一行の文からも当地域の様相を多角的に検討していこうとするものである。

また、時代がさがって江戸時代に入っても「玉子大明神」といつていたことのわかる金石史料として東大社所蔵の「薙刀<sub>なみなた</sub>」がある。



東大社所蔵の薙刀（茎部）



東大社所蔵の薙刀

東大社所蔵「薙刀」——通称 菘丸

全長二四〇・五センチ

刀身 六四センチ

敬白玉子大明神奉納、(巻)下総国 香取郡大戸

庄岩崎住人則定正定兄弟作之久勝。

(六一五)

干時元和二年八月日 神主胤正(同伴繁房代)

銘書之時長刀之上葦来不思議

武器、刀剣類を神社に奉納することは良くあることで、武家社会の風習として武器を神聖視した結果ともいえよう。銘文からは、元和二年（一六一六）にこの薙刀が作られて奉納されたのか、香取郡大戸庄岩崎八現、佐原市岩ヶ崎の住人則定、正定兄弟が久勝という工匠の作になる薙刀を（既製のもの）元和二年に奉納したのか、判断の根拠を欠くところである。

この銘文は、薙刀の目釘穴（二つある）の間はずっと刻み込まれている。

上代和男家所蔵「鞍」

高二六・五センチ

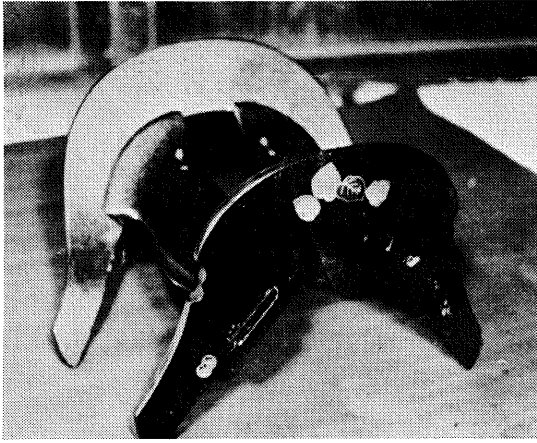
長三七センチ

(墨書銘)

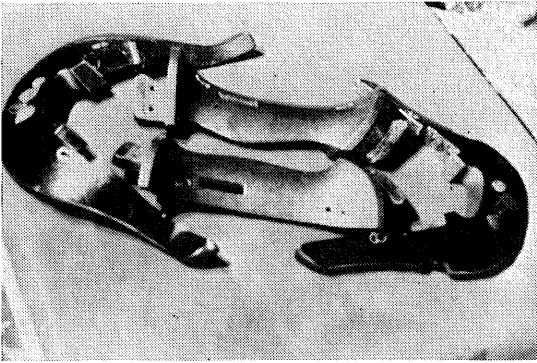
慶長十一年

六月吉日

この鞍は、一般にいわれる大和鞍といわれるもので現在用いられているような西洋鞍とは異ったものである。  
鞍部は梨子地塗なしぢぬりといって、下付漆したげうるしを塗りその上に金・銀粉をまいてさらに透明な梨子地漆を塗り研ぎ出して金銀粉



鞍



分解図

が漆を通して斑に見えるように細工したもので、さらに前輪・後輪の部分は黒漆螺鈿ろでんづくりであるということから、かなり上等の鞍であることがわかる。

この鞍は筒井忠重が徳川家康から拝領したものと伝えられている。

墨書銘 慶長十一(一六〇六)年六月吉日にどのような意味があるのか良くわか

っていない。

(3) 板 碑

また金石文の代表とされるものに板碑がある。板碑はどうして作られるようになったかその起源について調べてみると次の四つぐらいにまとめることができる。

- 一 笠塔婆説
- 二 五輪塔説
- 三 長足五輪塔説
- 四 碑伝説

これらの中で、形態の上からも最も起源の説明として了承できるのは、四の碑伝説である。

碑伝は本来修験道において修法供養を後人に伝えるために造立されるもので、同時に胎金両界における五大法界の塔婆であるといわれているが板碑をみると一周忌、三年忌、三十三回忌、あるいは逆修の供養のために造立されていて単なる「墓標」でないことがわかり碑伝と板碑は共通するものを多くもっている。

また板碑は大別して「関東板碑」（主として箱根山以東のもの）と「阿波板碑」と称する四国の吉野川流域と海部川流域地帯に分布し更に紀州高野に散在するいわゆる関西系のものがある。

また板碑には、画像板碑、梵字板碑、名号板碑、題目板碑、聯碑、などの五種類がある。

さらにこれを典型板碑と類型板碑に分け、典型板碑というのは、いわゆる碑伝を母体に行っていることが明白なもので、類型板碑はその形式が複合化したものを称している。またこの他に自然石板碑といつて板状の自然石に画像や梵字・名号・題目などを刻し、正式板碑に代用させたものがある。

本町の板碑をみると、この自然石板碑が大部分である。次にその代表的な事例をあげてみよう。

平山区 寺台 薬師堂前墓地



平山区薬師堂前の板碑（連碑）

下総板碑

高八三センチ  
幅六〇センチ

（バン・大日如来）

（蓮座）

右志者□□

阿弥陀仏

一周忌并比丘

（キリク・阿弥陀）

尼敬信逆修

※（二三八〇）  
也康曆二年

申四月□□



大友観音堂墓地・下総板碑（その1）



大友観音堂墓地・下総板碑（その2）



大友観音堂墓地・下総板碑（その3）

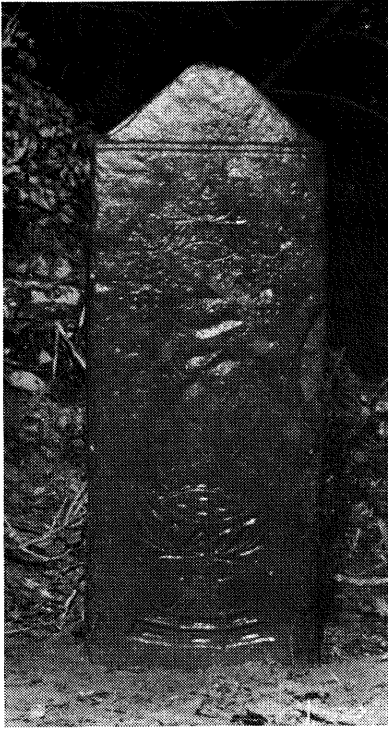
この板碑は連碑（二又）といわれるもので一石の中に二基または三基の板碑を接続したもので、この場合は二連碑といわれる部類に入れられる。前の□□の部分に、他界した夫か子どもの名が入るのである。その一周忌と仏門に入った敬信という女性の逆修（生存中に没後の供養をすること）の二つの意味がこめられた板碑ということになる。康暦二年（二三八〇）は室町時代で将軍は足利義満である。しかも康暦は北朝年号であることなど当時のこの地域の様子を考察する上では注目すべきことであろう。

大友区 観音堂墓地（その1）

下総板碑 高四八センチ  
幅三七センチ

（キリク・阿弥陀）  
（天蓋）  
（蓮座）





東福寺 下総板碑

(二三二八)  
文保二〇三月

大友区 観音堂(その2)

下総板碑

高七三センチ  
幅六〇センチ

(キリク・阿弥陀)

(天蓋) 蓮座

(二三三五)

建武二年□□月十二日

(三九)(亥カ)

大友区 観音堂(その3)

下総板碑

高五九センチ  
幅五三センチ

(天蓋)

蓮台

(蓮台)

(大日如来)

根方区

東福寺

下総板碑

高九五センチ  
幅三〇センチ

(写真)

(二四八九)(四九二)  
延徳 十一月 日敬白

(『千葉県史料金石文編』より)

(天蓋)

蓮台

(蓮台)

(キリク・阿弥陀)

根方区

東福寺

下総板碑

高五一センチ  
幅四六センチ

比丘尼性□

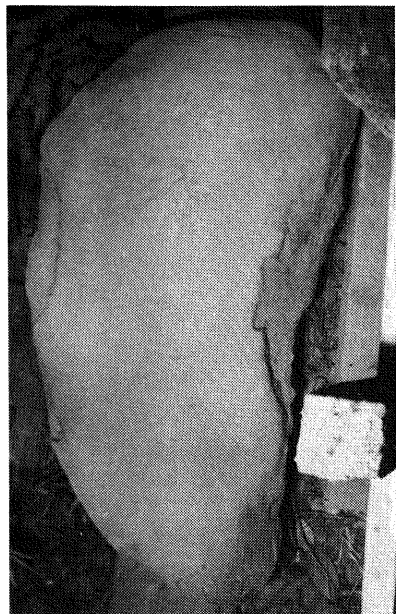
(天蓋)

蓮台

(蓮座)

(キリク・阿弥陀)

(二三八二)  
永徳二年□□二月廿日




小座区字塙の下総板碑

小座区字塙(旧東城村)

下総板碑 高八六センチ  
幅四五センチ

※(二三五六)  
延文三

(キリシテ・阿弥陀)

(天蓋)  (蓮台)

二月日 道忍

かも「下総板碑」といわれるもので、『銚子市史』の記述によれば、これは鎌倉時代の中ごろから香取郡を中心にし北限は利根川沿いに印旛郡下に及び、西は匝瑳郡一帯にひろがっているとされている。材質は銚子産の白亜紀砂岩で、「銚子石」といわれるものである。

また文中年代の上に※を付けたのは北朝年号が用いられたものを示している。これをみるとこの地域が北朝の勢力圏(南北朝期には)に入っていたことを示すひとつの手がかりとすることができるであろう。

なお篠崎四郎氏は『銚子市史』(一四三ページ)の中で「阿弥陀三尊来迎図」をあらわした下総板碑にふれ香取郡小見川町(旧良文村)来迎寺の板碑をあげ、さらに本町平山の夏見台にも三尊来迎板碑があり、俗に弘法大師爪書きのアマダ様と伝えられているのが残念なことに年号も銘文もわからなくなっている。一説には鎌倉時代のものであらうと

されているが、現在は、不鮮明でほとんど判らない一個の石になってしまっている。

鹿野戸区 観音堂 光明真言碑

高二〇〇センチ

幅二四〇センチ

中央に光明真言マンダラ



観音堂（鹿野戸区）の光明真言碑

（右側に）

元文三（一七三八）戊午天八月吉日

助願善男善女

奉誦光明真言

願以此功德、

（左側に）

法印舜胤、現任法印定胤

光明真言五百万遍

当村善男善女

如意輪観音石像が並べられている背後に立っている板状の石碑でその大きなことではこの近辺でも珍しいものである。この大きさから考えて、この石は元来古墳に用いられていたものを転用したものではないかと想像する人もあるがはっきりしたことは判っていない



東泉寺の下総板碑

い。

東今泉区 東泉寺 真言宗

下総式板碑 (アミダ三尊来迎図像板碑)

タテ 五六センチ

ヨコ 三四センチ

銘文、年号なし

推定、南北朝期(室町、前期)

碑面に線刻の枠を作り、その中に来迎アミダ三尊の立像を図し、光芒を放つ様子を枠内一杯に全て線刻であらわし、蓮台を刻している。一般には銘文もあるも

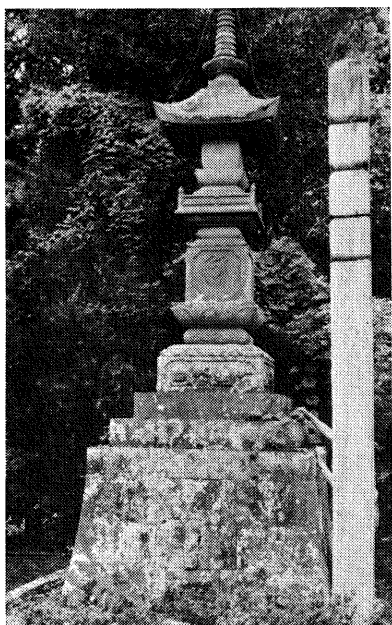
のもあるが、本町のものは銘文は存在しない。

このほかそれぞれの板碑に関しすべてとりあげるとは不可能であるので、以下一覧表(第8表・板碑所在一覧一〇八四ページ参照)にして、提示してあるので、それぞれの地域にどのような板碑があるのかこれをもとにさらに、一層の研究が加えられればと念願するものである。

(4) 宝篋印塔

宝篋印塔に関する説明は、ここでは省略したい。

本町においては、ほぼ完全に近い状態で残っているのは笹川・東福寺のものと、西福院のもので、いずれも近世の



西福院（根方区）の宝篋印塔

享和4年（1804）多田舎人（とねり）知義の造立。本町内ではもっとも大きいものである。



東福寺宝篋印塔

ものである。

また、明白に宝篋印塔の部分であったとみられるものが他のものに転用されている例も町内各所の寺院にみられる。多くは台座・蓋・相輪の部分がいろいろなものに使われ、残されているのである。

### (5) 五輪塔

五輪塔は本町の寺々にいくつか見かけられる。方形の台座の上に円形の塔身、その上に方錐形の笠、その上に半円形と、宝珠形をつみあげた仏塔であるが、こう言葉でいわれても理解しにくいと思うが写真を示せば思いあたる人が多いと思うので次に写真を提示した。

材料は、われわれの目に一番ふれるのは石製のもので、他に、木製・銅製・鉄製・金銅製・土製・水晶製のものなどさ



東福寺五輪塔

まぎまである。

五輪塔は供養塔としての仏塔か墓標に用いられている。墓標として用いられた古い記録は『兵範記』の中に「仁安二年近衛基実の遺骨を木幡浄妙寺に埋葬し、上に五輪石塔を立つ。」とある。しかしこの場合の五輪石塔が今われわれが目にするのできる五輪塔と同一のものであるかどうか断定はできかねる。

現在われわれが本町の寺々で目にするものは小さいもの（一メートル以下）のものは大体一石づくりで、大きなものは空・風・火・水・地の各部分を別々につくり積み重ねたもので、かなり大きいもの（一メートル以上）となっている。このようなものは、その寺の住持か、またはその土地の有力者の墓石で、これをとおし、その地位や財力を知ることができる。

(6) くりから

これまで述べた金石資料のほか本町にとって珍らしいものとして「くりから」が、笹川の東福寺と平山区宇稻荷面（もとは滝神社の下、宇滝の入りであった。）に現存する。「くりから」（俱利伽羅）とは梵語で「黒竜」のことで、まぎついているのは不動尊のもつ「利剣」で、竜は「羅索」をあらわしたもので、大体は石にほりつけたものが多いが、本町の東福寺にあるものは、写真でみられるように石製彫刻である。

これは本来は滝や泉の近くにおかれるものであるが、現在の所在地の近くには、そのようなものは見当たらない。



東福寺くりから

江戸時代に入ると、広く民間の俗信仰として普及し、干支えとにより六〇日ごとに回ってくる庚申の夜に、当番の家に集まり家内安全無病息災を祈る行事になった。またこのあつまりで農事の相談や無尽を行ったり世間ばなしをしたりして夜明かしをしたといわれる。

江戸時代の石造庚申塔はその形態からみて次のように分けてみることができる



平山字稻荷面くりから

東庄町の各地にみられるものに「庚申塔」がある。

(7) 庚申塔

存在は、この滝とのつながりであるのであろう。現在でも不動堂があり、滝と不動尊のつながりで「くりから」がおかれている。

しかし、現在は大利根用水の水路が前を通り、東福寺は高いところにあり滝がここにあったという。「くりから」の



諏訪神社参道にたつ聖徳太子塔

だ様子がわかる（第11表・庚申塔所在一覽一〇九二ページ参照）。

(8) 聖徳太子塔

次に聖徳太子塔についてふれておく。笹川の諏訪神社の参道わきにもこれがあるが、だれが何のために建立したのであろうか。

聖徳太子は誰でも知っている歴史上有名な人物であるが、一七条の憲法を制定したり、法隆寺をはじめ多くの寺院を建立したと伝えられている。そのためには各地から多くの工人が集められたと推測される。太子講という講組織は、このような事由でいわゆる工人たちの信仰から生まれたもので、一般的には大工、屋根屋（屋根葺き職人）、きこり、製材業などの木造建築に関係のある職人集団の信仰で旧暦の一月と八月の二十二日の夜に当番の家に集まり、聖

であろう。大体江戸初期から延宝年間ごろまでは、ごくかんたんな浮彫り形式のものか、文字塔で下に三猿をほりつけた程度のものである。元禄から宝暦年間にかけて、日月、瑞雲、鶏、邪鬼（青面金剛がふみつけている）三猿がそろって、手のこんだ浮き彫りがみられ、この時期は人々の庚申信仰に対する関心が一番大きかったのではないかと考えられる。しかし宝暦を過ぎると、「青面金剛」とか「庚申塔」という文字だけのものが多くなり石の形も整わず、小形化して、信仰のマンネリ化がすすん



徳太子の掛軸をかけて商売の繁昌と仕事の安全をいのりまた仕事上のいろいろな相談をしたといわれている。そのような講集団が建立した石塔を太子塔といっている。またこのような塔を建立するようになったのは、大体江戸時代中期以降のことである。

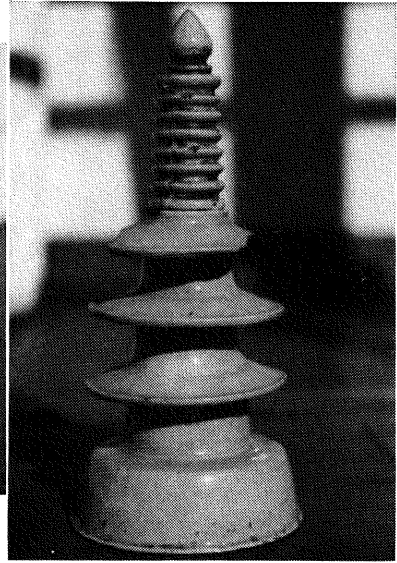
#### (9) その他の仏神

次に仏教関係のインドの伝説に根源をもつ神々は密教にとり入れられて、如来や菩薩の守護神として、梵天・帝釈天・日天・月天・吉祥天、弁財天・仁王・大黒天などいわゆる「天部」の仏神があるが石造としてみられるのは弁財天・大黒天などが主でありほかに「第六天」というのがあるが、これはあまり意味がはっきりわかっていない。一説によると江戸城築城のときに六方（東・西・南・北・天・地）の守護神のひとつとしてこの第六天をまつたともいわれこれが民間にひろまったということであるが、またほかに第六天信仰は伊勢信仰と関係があるともいわれ、第六天は神社の境内などにその塔を建立したというものである。

#### (10) 仁和寺陶製円形三重塔

このほかに仏塔として特色あるものでは本町の羽計区田谷家に所蔵されている「仁和寺陶製円形三重塔」であろう。

これは「法隆寺百万塔」（宝亀元年 $\wedge$ 七七〇 $\vee$ に称徳天皇の発願により小塔百万基を造り十大寺に分置した）の先例を模したものであり、陶製であるためか基台の下部が開き屋根の部分がやや下り気味で、相輪も宝珠の下に九層凹凸がみられるだけである。総高は約二三・六センチメートルで、相輪部がはずれるようになっていて、ここに「宝篋印陀羅尼」



仁和寺陶製円形三重塔



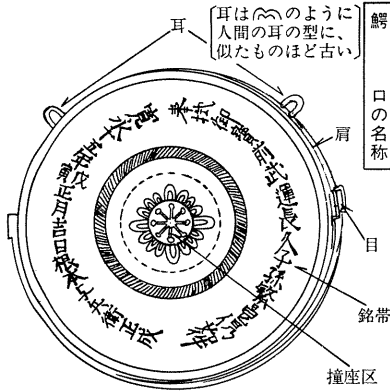
同 右 底 部

の印刷したものをおさめるようになっていた。

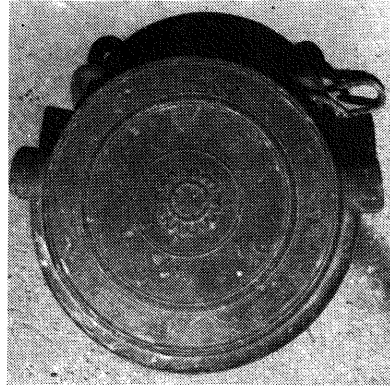
また写真にみられるように底裏に「八万四千之内陀羅尼宝塔当仙洞御所御法施、天保十一庚子年（一八四〇）授与内藤十郎兵衛」と墨書されている。この内藤十郎兵衛は田谷家のある本町羽計の知行主（百五十石）、旗本であった。田谷家は名主をつとめていた。幕末には内藤家の財政を種々援助し、維新に至り知行地を去るにあたり、田谷家にこれを与えたものらしく、現在に至るまで、代々の田谷家の主は、この仏塔の意味は、わからなくても先祖が殿様からもらったものとして保存していたものである。

銘文中に「八万四千・・」とあるがこれは実数ではないが当時かなりたくさん造られ、関係者に与えられたものであろうが、現在そうどこにでもあるというものではないので、金石文のひとつとして、ここにとりあげた。

天保十年のころに、旗本内藤氏と仁和寺がどのような関係にあったのかは今後の調査にまたなければならぬ。



第3図 東大社 鯿口



鯿 口

(1) 鯿 口

鯿口とは金属仏具の一種であり古くは関西地方では金鼓、金口と称していた。しかしこれは一方では金属仏具の総称でもある。ところが関東や東北では、鯿口と称していた。材質は青銅が最も多く、次に鉄製が多い。銘文は陽鑄、陰刻、墨書があるが、東大社所蔵のものは陰刻である。

また大きさもさまざまで、最も小さいものは一〇センチメートルぐらいのものもある。東大社の鯿口は直径約三〇センチ、その内撞座区の直径五・五センチメートル、銘帯の幅三センチメートル、厚さ九センチメートル。材質は銅製である。

銘文

奉掛御宝前武運長久子孫繁昌旨仍如件  
 (一六三〇)  
 寛永十五年寅正月吉日根本与兵衛正成

江戸時代三代將軍徳川家光の治政下にあつて、武運長久と子孫繁昌を祈願し東大社にこのような鯿口を寄進した根本与兵衛正成なる人物は、当社とどんな関係をもっていたのであろうか。身分としては銘文からみて明白に武士であらう。



孝明天皇勅額



後花園天皇勅額

東大社にはもう一つ別の鰐口がある。これは直径三六センチメートル、撞座区直径八センチメートル、銘帯の幅六センチメートル、厚さ一〇センチメートルというもので材質は銅製である。

銘文は、銘帯の部分に、左側からは「小座村忍野外記本願：(以下略) 右側から「十二郷之氏子勸、以、願所：」とあり東庄玉子大明神□ □本願とか、寛永七年(一六三〇)十月十八日敬白とあり、鰐口は古いものが大きく、撞座の蓮弁は八葉であり総じて丈夫で簡易なつくりをしている。

金属仏具である鰐口が神社に用いられたのは中世以降の神仏習合を示すひとつの範例でもあるが、明治以降神仏分離が断行された後も、このようなものが神社には多く見かけられているのである。

(12) 勅 額

また東大社史に見られるところの後花園天皇(正長元年・八一四二八▽|寛正五年・八一四六四▽在位)の勅額

「惣社玉子大明神」と、孝明天皇（弘化三年・八一八四六▽―慶応二年・八一八六六▽在位）の「東庄大社」の勅額は、当社の称号を考証する上で大変重要なものであろう。

孝明天皇の勅額に関しては当社に関連の「板札」が残っている。

板札

表

勅賜 花山院従一位前内大臣藤原家厚公御染筆

御取扱 鷹司関白太政大臣政通公御家司従四位上種田兵部少輔兼因幡守藤原朝臣嘉純

御額面要綱彩色

画工

梅戸紀伊守美延

奉掛東庄大社御額一面

宝祚延長 天下泰平 社頭繁昌

御武運長久 五穀成就 産子安全

(裏)

上羽矢田城主松平左兵衛督殿内

江戸取扱 家老 小林外記

同父 小林随軒

物頭 小林處二郎

第七節 社寺一覧・文化財

于時 嘉永二年歳

改己酉十月日

大宮司従五位下大和守藤原朝臣飯田胤隆代

この板札により孝明天皇の勅額に關して、かなりくわしい経過がわかり、嘉永二年（一八四九）孝明天皇が位につかれて四年目に当社に与えられたものであることがわかると同時に、この時点で、東大社と称していることがわかる。以上、東庄町にある金石文関係資料について概略をのべたが、このほかに東大社には「古代獅子面」などもある。次に、金石文資料として一覽表をまとめてあるのでこれを参照されたい。

第8表 板碑所在一覽

No.	所在地	大キサ cm タテヨコ (地上)	造立 年号	備考
1	大友観音堂墓地	六〇―一六〇	不 明	種子キリーク (阿弥陀如来)、向かって門左側にあり、上部左側欠落
2	〃	八五―一六〇	建武二年 (一三三五)	種子キリーク向かって門左側
3	〃	五〇―一三七	文保二年 (一一三二)	河連家墓地内にあり
4	〃	六〇―一三八	不 明	〃 阿弥陀来迎図線刻
5	〃	一二〇―一六〇	〃	飯岡石 (粘板岩) 山型線刻あり、軟石のためくずれて不鮮明
6	〃	六五―一七五	〃	作右エ門家墓地内二双、右側キリーク (阿弥陀) 左側バク (釈迦)
7	〃	六〇―一五五	永徳二年 (一一三八)	種子キリーク向かって門右側にあり
8	〃	四〇―一三〇	不 明	墓地外三差路にあり、種子イ (地藏ボサツ)

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
今郡薬師堂	羽計 実相院ウラ	〃	〃	〃	〃	新宿秀蔵院	〃	仲内墓地	〃	根方東福寺	東和田加納氏宅	〃 寺台墓地	平山、薬師堂前	〃	平台墓地	〃 共同墓地	窪野谷墓地入口	小貝野共同墓地	〃 字花番入	神田白毛墓地
七〇―九〇	六〇―五五	九〇―八五	六〇―五〇	五〇―三四	九〇―四〇	七〇―五五	八〇―七〇	八五―八〇	九五―三〇	六六―三四	四二―三〇	六七―六〇	八三―六〇	五〇―五八	九〇―五〇	九九―四七	八〇―五四	一一―七三	九〇―五五	一一〇―四五
永和元(一三七五)か	不	慶長十年(一六〇五)か	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	不	康歴二年(一三八〇)	〃	不	康歴三年(一三八一)か	〃	〃	〃	〃
種子キリーク	種子、左キリーク、右バク 左側欠落	種子ア(大日如来)	種子キリーク(阿弥陀如来)	天蓋、種子バン(大日如来)、蓮座	横線刻二本あるのみ、あとは磨滅	阿弥陀三尊図線刻、観音堂左側にあり	天蓋、種子、阿弥陀三尊、蓮座	種子キリーク(阿弥陀如来)、ア(大日如来)	天蓋、種子バン(大日如来)、蓮座、刻鮮明	地内にあり	天蓋、種子キリーク(阿弥陀如来)、蓮座、土屋吉郎兵エ家墓	種子バン(大日如来)	種子キリーク、天蓋、蓮座、刻不鮮明	種子(阿弥陀、大日)二双、天蓋、蓮座、高橋(大門)家墓地内	種子キリーク	飯田家墓地内、種子バク、天蓋、蓮座	種子バン(大日如来)、天蓋、蓮座、年号あり不鮮明(嘉歴、康歴?)	種子キリーク、天蓋、蓮座	種子磨滅のため不鮮明、右側上部欠落	光背聖観音図線刻

No.	所在地	大キサcm タテヨコ (地上)	造立年号	備考
30	東今泉東泉寺	一〇〇―一五三	不 明	阿弥陀三尊来迎図、昭和四十八年町文化財に指定
31	〃	八〇―一三五	〃	天蓋、種子バク(釈迦如来)、蓮座
32	小南藏福寺	八〇―一五五	〃	種子二尊、左キリク、右バク(釈迦)、天蓋、蓮座、刻鮮明
33	小座字塙	八七―四七	延文二年(二三五 七)	天蓋、種子キリク、蓮座
34	平山字夏見	不	不 明	不鮮明 地元では「お阿弥陀様」といっている。来迎寺跡
35	石出社教センター	一二〇―一七〇	不 鮮 明	種子、阿弥陀三尊、青馬にあったものを移動

第9表 各種仏塔(子安、月待供養塔)所在一覽

種別	所在地	造立年号	西曆	備考
聖観音立像(廿一夜供養塔) 如意輪観音座像(十五夜待)	稲荷入観音様 大友観音堂	元文五年庚申 不 明	一七四〇 	その他数基まつられてあり 造立者十五夜講女人、他に二基あり 文字不明
子安観音座像(子抱き) 観音座像(月待)	〃 〃 〃 〃	寛政五年 不 明	一七九三 	大友村□□
二十三夜供養塔	〃	文化十二年十月	一八一五	村講中、世話人 喜左衛門 新左衛門
十九夜供養塔	〃	享保十一年	一七二六	利右衛門同行二三人
地藏菩薩像(廿日夜)	小貝野共同墓地	享保十年	一七二五	小貝野村現同行二四人、以前香樹寺にあったもの
如意輪観音像(十九夜) 十五夜待供養塔	〃 〃	延宝二年	一六七四	以前香樹寺にあったものを移転、この二基は カナ文字(呪文)の刻まれた珍しい塔



地蔵菩薩像(十五夜供養塔)	八木山	安永七年十一月	一七七八	願主、八右衛門、さらに一基あり
二十三夜塔(月待供養)	窪野谷、神社裏	文化九年	一八一二	造立者、平蔵
観世音座像(子抱き)	平台 妙見様	天明七年十月	一七八七	窪野谷村新田女人講申 他に二基
観世音立像(廿日待)	高部 宇西場	元禄五年八月	一六九二	奉修廿日待祈願成就
〃	〃	元文四年十月	一七三九	
如意輪観音像	舟戸夏方墓地	天和三年八月	一六八三	他に並んで聖観音像、地蔵像などあり
〃	〃 夏方墳頂上	宝永七年十月	一七一〇	
子安観世音像	舟戸神前寺跡	文化八年二月	一八一	善女人講中 石工武啓
大日如来座像(二十三夜待)	東和田字 東関	寛文九年	一六六九	
如意輪観音(十九夜念仏)	東和田字二ヶ谷	延宝九年	一六八一	和田村女房、他に二基あり
如意輪観音(十九夜)	東和田字登楼路	享保十九年十月	一七三四	十九夜同行三七人、他に聖観音などあり
地蔵菩薩立像(十五夜念仏)	稻荷入公民館脇	宝曆四年	一七五四	上代稻荷入村
観音座像(十五夜、十九夜)	本郷共同墓地			講中 その他数基あり
如意輪観音(十九夜講)	平山来迎寺跡	天和二年二月	一六八二	十九夜待同行一〇人
地蔵尊立像(十七夜待)	平山寺台共同墓地	正徳五年九月	一七一五	十七夜同行一四人
〃	〃	享保元年十一月	一七一六	十九夜待善女人平山村同行一八人
十五、十七、十九夜供養塔	〃			三基並んで在り
観音像(月待)	平山法木作墓地			数基あり
観音立像(十九夜待)	根方 東福寺	寛文六年十一月	一六六六	女人
如意輪像(十九夜塔)	仲内共同墓地	享保三年九月	一七一八	同行講中、他に一〇基あり
子安観世音座像	新田 宇下町	明治十七年八月	一八八四	新田町女人中
子安観世音座像(大明神)	大木戸諏訪社境内	天保十三年	一八四二	坊内町女人中、他に三基あり
子安様座像	宿浜 宇西浜	文政十三年	一八二七	子安大明神、宿浜女人中とあり
如意輪観音像(月待)	宿浜 西浜墓地	寛文八年十一月	一六六八	この他元禄のものなど二八体が道端に向かい合っ
〃	〃			合っ

種別	所在地	造立年号	西曆	備考
如意輪觀世音座像(十九夜) 〃 (十九夜) 〃 十九夜塔 十一面觀世音(月待供養塔) 勢至菩薩(月待) 如意輪觀世音(十九夜) 〃 子安觀世音 月待供養塔 觀世音像 地藏菩薩像 如意輪觀世音像 子安觀音像 子安地藏菩薩像 如意輪觀世音像 子安觀音 〃 子安觀音像(五基)	根方西光寺跡 根方西福院境内 大木戸別当内墓地 羽計台浅間神社 〃 谷津字不動 青馬字鷲 石出林福寺境内 〃 小南蔵福寺 小南蔵福寺境内 小座満願寺 小南普賢院 〃 東今泉東泉寺門前 粟野字松山 粟野字松山 鹿野戸觀音堂	正徳五年十一月 寛政二年十月 宝曆五年三月 貞享元年六月 〃 元禄六年二月 享和三年二月 元禄十三年	一七一五 一七九〇 一七五五 一六八四 一六八四 一六九三 一八〇三 一七〇〇	他にも三基あり 女人講中、他に二基あり 講中二三人 郡村住六左衛門尉 〃 同行四〇人、他に二基あり 若女人中世八人八左衛門、他に一基あり 東林寺から移す、淡島様脇に子安七基 月待供養塔七基あり 供養塚、近年整理統合された 他にも數基あり 当村中宿南下善女人 子安供養塔三基あり 惣村中女人中、他に二基ある 他に地藏尊(元禄八年)など二基あり 五基並んで建っている

第10表 各種仏塔（誦誦供養塔）所在一覽

種別	所在地	造立年号	西曆	備考
供養塔 " (大日如来像)	大久保東徳寺境内 舟戸夏方墳頂上	元禄六年 延宝二年	一六九三 一六七四	願主、和田村中
念仏供養塔(地藏尊像)	東和田登隣路	延享四年	一七四七	近年墓地整理、その他教基あり
" (阿弥陀如来座像)	" 東 関	貞享五年	一六八八	
" (大日如来像)	神田字白毛	寛文元年	一六六一	稲荷入、神田村願主勘兵衛以下三一名
薬師如来供養塔	神田字要害	安政五年	一八五八	
光明真言	八木山共同墓地	安永年	—	願主八木山庵主、迅寛他 仲間中
不動明王像	窪野谷本郷共同墓地	天明八年	一七八八	
光明真言 百万遍	" 天福寺境内	明治四十五年	一九一二	字井兵作以下多勢
永代供養塔(文字)	" 天福寺山門前	天明元年八月	一七八一	
光明真言	平山字寺台	嘉永七年	一八五四	願主荘右衛門 惣村中
"	" 薬師堂脇	元禄十年八月	一六九七	
大日如来座像	大木戸諏訪社境内	延宝六年	一六七八	寛文五年□□念仏開祖、郷内年寄中
万人供養塔	根方東福寺	延宝四年	一六七六	
光明真言	仲内共同墓地	弘化四年十月	一八四七	願主利右衛門、彦兵衛、甚五右衛門、谷津村中
法師供養塔	鹿野戸妙幢院	不 明	—	
大乘經講演塔	東今泉字入岨墓地	元禄十一年	一六九八	同行五人
念仏供養塔	東今泉字入岨	明和三年	一七六六	
三界万靈塔(地藏像)	" 東泉寺門前	元禄三年	一六九〇	さらにもう一基あり
念仏供養(大日如来座像)	谷津字中割	享保十三年十月	一七二八	
大日如来座像	谷津字行人塚	明和五年	一七六八	

種別	所在地	造立年号	西曆	備考
阿弥陀如来像	宮本字十王	寛文三年	一六六三	十王寺跡
〃	〃	承応三年	一六五四	他にも供養塔並んであり
不動明王像(成田山)	小座満願寺	明治十四年如月	一八八一	他に一基あり
一千部供養塔	〃	天明三年	一七八三	施主惣村中法印□□
光明真言二百万遍	夏目禅定院	明治三八年	一九〇五	野口憲照以下約八〇名
一千部説誦供養塔	〃	文化十二年	一八一五	富士大行者夏目区願主食且行妙心
富士講供養塔	夏目浅間山	文政四年	一八二一	大勢の銘記あり、不明
一千部説誦塔	小南普賢院	大正四年二月	一九一五	戸村吉左衛門以下多勢
〃	〃	宝暦十一年	一七六一	講師当寺現任勝恵当山代々先師その他村々多勢
妙経講演供養塔	小南蔵福寺	天保五年	一八三四	願主青野権右衛門当村中四郎左衛門以下一〇名
弘法大師一千年忌	〃 山門前	天保十三年	一八四二	惣門中
興教大師七百年忌	〃	文化五年九月	一八〇八	惣邑善男女
觀世音菩薩供養塔	〃	文化五年九月	一八〇八	惣村善男善女講中
大勢至菩薩供養塔	小南蔵福寺山門前	文化五年九月	一八〇八	造立者根本□右衛門、前にへびの石あり
地蔵菩薩像(伴伽跣座像)	新宿秀蔵院	安永三年	一八五四	開山鉄牛機老和尚と刻記
鉄牛禪師墓塔	小南福聚寺	正徳五年十一月	一七一五	領主石河の名あり
地蔵菩薩像	鹿野戸字大通	文化二年二月	一八〇五	当村善男女人中など六基
六地藏	〃 妙幢院境内	享保六年十月	一七二一	
地藏尊立像	〃 東共同墓地	元文三年八月	一七三八	板碑の大きさにおいては近郷に類なし
光明真言曼陀羅板碑	〃 觀音堂	大正九年七月	一九二〇	平忠常他三名の供養碑、地主飯田要平
政所台墳墓供養之塔	大友字政所台	〃	一九二〇	旭町飯田佐治兵衛、東京渡部三彦

千葉胤富他大和尚の供養碑  
法印覚真大和尚、五輪塔  
平山寺台墓地  
宿 浜 延 命 寺

中興成毛勘右衛門造立、昭和三年再刻  
若忍の墓 享保十四年示寂

第11表 庚申塔所在一覽

種 別	所 在 地	造 立 年 号	西 曆	備 考
文 字 塔	笹川諏訪社境内	万 延 元 年	一八六〇	向後左衛門他六名、大曲輪中
青面金剛立像	〃	元文五庚申十月	一七四〇	子安様のわき、別当内、大木戸下□坊内
〃	〃	〃	〃	〃
猿田彦大神	〃	享和三亥年五月	一八〇三	造立者林権右衛門
〃	〃	寛 政 十 年	一七九八	願主 横宿 喜惣兵衛
文 字 塔	仲内字辻	嘉永二年三月	一八四九	通称「ドウロクジン」、真中に道祖神、左右に庚申二
〃	〃	享和元年四月	一八〇一	基あり
〃	〃	万延元年庚申八月	一八六〇	願主川口多田平兵衛
青 面 金 剛	仲内波切不動前	安政七庚申二月	一八六〇	根方講中、土屋民曹、多部田弥右衛門、その他二基
〃	根方東福寺入口	寛政十戊午年	一七九八	他に不動明王寛政五年一基
文 字 塔	根方字山王	不 明	一八六〇	不動坂、竜ヶ谷、願主土屋平左衛門、山王講中
〃	〃	万延元年五月	一八六〇	願主西ノ前三郎左衛門
青面金剛立像	根方西福院境内	天明二寅十月吉日	一七八二	西ノ前、下川講中、三郎左衛門、源五左衛門
文 字 塔	〃	万 延 元 年	一八六〇	大門、小門、辺田講中
〃	根方字三反町	万延元年十二月	一八六〇	庚申塔五体、道祖神など四体を祀る
庚 申 様	大木戸新町	元文五年ほか	一七四〇	一猿像あり
青面金剛像	鹿野戸熊野神社境内	寛政十二年庚申	一八〇〇	願主、村中、世話人清左衛門、三左衛門
文 字 塔	〃	安政七年庚申三日	一八六〇	

種別	所在地	造立年号	西曆	備考
青面金剛像	鹿ノ戸妙幢院境内	元文五年	一七四〇	三猿像
〃	〃	寛政四年	一七九二	〃
文字塔	〃 観音堂	元文五年三月	一七四〇	
青面金剛	〃 西共同墓地	天保五年二月	一八三四	
庚申塚	青馬字向台	延宝八年	一六八〇	町内屈指の庚申塚、猿田彦大神など一〇基が集められている
〃	〃	文化十四年	一八一七	願主、村中
青面金剛立像	谷津字不動	安永六酉年	一七七七	
〃	羽計淡島様境内	宝永元年申九月	一七〇四	
文字塔	〃	万延元年九月	一八六〇	惣村中
〃	石出林福寺	万延元年	一八六〇	
〃	東今泉字道祖神	元文五年	一七四〇	岩田藤兵衛他一三名、さらに平石のものなど二基
青面金剛立像	小座新田	元禄八年九月	一六九五	庚申石塔としては最大級のもの、他に一基
文字塔	栗野青年館	万延元年九月	一八六〇	願主高橋弥惣右衛門、他二基
文字塔	栗野青年館	寛政十二年三月	一八六〇	栗野村中、世話人治兵衛、百庚申あり
〃	小南字出羽	寛政三年庚申四月	一八〇〇	惣むら中
〃	〃	万延元年庚申五月	一八六〇	庚申玉石、一五ヶ位あり
青面金剛立像	夏目字舟場	安永九年	一七八〇	世話人佐右衛門
文字塔	夏目禅定院	寛政十二年	一八〇〇	庚申講中
〃	〃	安政七年	一八六〇	願主、惣村中
猿田彦大神	夏目八幡様境内	寛政十二年庚申	一八〇〇	当村中
〃	〃	万延元年	一八六〇	
青面金剛像	宿浜延命寺	延宝二年甲寅十月	一六七四	町内最古の庚申塔と思われる。三猿像





羽計区 実相院の馬頭観世音  
(東荘六観音の一つ)

た。坂道を登りきった所、下り坂の小さな平坦地など、旧道に見受けることが多い。

山を削った坂道などは、馬にとっては難所であり、足を折って廃馬となったり、時には馬夫も運命を共にした例もあったという。この難所に、人馬の守護神として馬頭観音がまつられたことは当然ともいえる。また、寺院の近くや墓地などにも見受けられるが、これらは大体、後世道路改修などのために移動されたものと思われる。

昔から(おそらく江戸中期頃から)東総地方の各村々には、馬主たちによる馬頭観音講があったといわれる。当町羽計区の元実相院には馬頭観世音(木造、等身大)がまつられていて、東荘六観音の一つとされている。

因みに東荘六観音とは、このほかに石出区元長福寺の淮瓶観音、小見川町貝塚区来迎寺の十一面観音、同町五郷内区元普文院の聖観音、同町川頭区光明院の千手観音、同町下飯田区観音院の如意輪観音のことである。

第12表 馬頭観世音所在一覧表

種別	所在地	造立年号	西暦	備考
馬のり	舟戸夏方墓地	安永五年十一月	一七七六	舟戸、大久保村造立
文のり	神田字白毛	文政二年	一八一九	他に一基あり破損、小さな文字塔もあり
馬のり	大久保字羽黒	不明		造立、佐藤治郎兵衛、鹿之助、他に一基
馬のり	窪野谷共同墓地	不明		





また、樹林寺（小見川町五郷内）への道案内が多いのも、そのころ（江戸中、後期）いかに樹林寺が栄えていたかを示すものとして興味深いものがある。

第13表 道しるべ所在一覧

No.	記 銘	所 在 地	造 立 年 号	西 暦	高サ—横—厚サcm	造 立 者
1	東、上代之、ささがわ、てうし、西、ふま、たべ、かとりみち、南、みぞわら、八日市場道	神田字白毛	寛延四年正月	一七五一	八〇—三〇—二〇	当村衆の者
2	西は香取道、東はてうし道（通称白毛の地藏様）	神田字白毛	宝暦五年二月	一七五五		神田村老若男女
3	御大典記念	神田字白毛	昭和三年十一月	一九二八		神田青年分団
4	さくみち、かじろ、まんざい、てうし	神田白毛下	享和三年正月	一八〇三		菅谷□□衛
5	御成婚記念	東和田字神明	大正十三年	一九二四	六九—二〇—一八	東和田分団（字和田入にも一基）
6	南、八日市場かずき通、西たべ、かんどり、東、寿りんじ、ささ川	東和田字東関	明和七年十月	一七七〇	八四—二三—一九	和田村女人中
7	伊勢参宮関西社寺参拝記念	大友	大正十年三月	一九二一		五名連記
8	御大婚満二十五年記念西神代村	窪野谷（青馬境）	大正十四年五月	一九二五		香取郡
9	志らぬみち、ゆきかふ比登能、志る楚石、歌もて那しつ覚えよきため	窪野谷原	天保九年春	一八三八	八三—三三—二七	高木某建
	東、此道は東の莊より岩井なりさる多をぬけて銚子へも与し					
	南、ひかた与里成田へも行太田へも八日市場や九十九里みち					

17	16	15	14	13	12	11	10	
南無観世音菩薩為二世安樂 右おみ川みち左じゅりんじみち 施主 寺嶋氏 奉納南無阿弥陀仏為二世安樂 きた、ささ川かしみち ひがし、てうしみち 南 八日市場、かずさみち 西 志りんじおみ川みち おかいだめぐり上りてもよし	南無観世音菩薩為二世安樂 右おみ川みち左じゅりんじみち 施主 寺嶋氏 奉納南無阿弥陀仏為二世安樂 きた、ささ川かしみち ひがし、てうしみち 南 八日市場、かずさみち 西 志りんじおみ川みち おかいだめぐり上りてもよし	南 八日市場、太田、九十九里方面 北 伊勢会立 小見川	奉拜礼 西は樹林寺 山倉 北は笹川 小見川 香取 南 八日市場、千瀉、九十九里	奉拜礼 西は樹林寺 山倉 北は笹川 小見川 香取 南 八日市場、千瀉、九十九里	此方 青馬 東大神 伊勢參宮関西社寺參拝記念	庚申 左 かわの入り 台此方、 八木山、大久保、旭、西、平山、 小見川、佐原	廿三夜 東 志ゆりんじ 左 へひかた 右 へひかた	西、樹林寺や田部や山倉其の先ハ 多古にて和可礼成田志ほ山 北、すぐ道へをみかへ香取佐原な り少しあゆみて右へささ川 平台公民館前 文政四年十月廿三日 寛政十二年庚申 平山字台 高部字猿和田 高部字六反町 小貝野野口商店 脇 大正十四年十一月 右に同じ 明治十二年 明治八年十一月 宝永五年 明和八年三月 一八二一 一八〇〇 一八二五 一四〇二六一七 一四〇二六一七 一九二五 一九二五 一八七九 一八七九 一八七五 一七〇八 一七七一 一〇〇二五一一八 五〇一三三一一三 一八三八一六 一四〇二六一七 一四〇二六一七 一四〇二六一七 一〇〇三〇三〇 一〇〇三〇三〇 一〇〇四〇〇□ 一〇〇二五一一八 願主両新田祓講中 高部 山中 久、多 田康之助など一六名 右に同じ 奉願主窪野谷村高木 弥次右衛門以下大勢 伊勢会立 願主八幡伊三郎

No.	記	銘	所在地	造立年号	西曆	高サ—横—厚サcm	造立者
18	飯沼観世音 五里 行基 ○作 聖観世音江一丁		大木戸東町 石出林福寺前	天明三年正月 文化八年	一七八三 一八一	一〇〇—三三—二〇 一一六—三五—二五	願主真永 清水栄吉他
19	東 飯沼観音 一木六体 猿田神社 四里 岩井不動 二里 香取四里 成田山十二里 西 府馬四里 滑川九里 阿波九里 樹林寺二里						
20	飯沼観世音ヨリ四里 右 はま道 左 うま道		東今泉旧道 (銚子境)	天明三年	一七八三	一〇〇—三三—二〇	願主、真水
21	西 橘 東 豊里		右 〃	大正十四年五月	一九二五	六〇—一三〇—三〇	香取郡
22	東大社参道		石出字根ノ町	昭和十五年二月 十一日	一九四〇		紀元二六〇〇年記念
23	青面金剛 左 右 ささ川 じゅりん寺		青馬字鷲	享和三年八月	一八〇三	七〇—二三—一四	佐久間半藏
24	表、奉待 十九夜 現当		大木戸坊内	元禄十三年庚辰	一七〇〇	四〇—二七—一六	
25	右側、願わくばこの功德を以って 普く一切に及ぼし我等と衆生 と皆ともに仏道を成ぜん 左側、右 作みち 左 ちようしみち		鹿野戸東	明治四年	一八七一		高安伝右衛門外一三名
26	二十三夜塔		谷津、字長新田	不 明	—	七三—二八—二八	

<p>29 御大婚満二十五年記念東神代村</p>	<p>稲荷入字黒部</p>	<p>大正十四年五月十日</p>	<p>一九二五</p>		<p>香取郡</p>
<p>28 北、新宿、ささ川、小見川、かとり</p>	<p>羽計字清水</p>	<p>寛政七年九月吉日</p>	<p>一七九五</p>		<p>不明</p>
<p>27 地蔵菩薩像 真言二百万遍</p>	<p>小南字出羽</p>	<p>嘉永二年六月</p>	<p>一八四九</p>	<p>九〇―三八―二三</p>	<p>発願福善寺隠居徹暁 小南村郷中安全円寛 山蔵福寺</p>
<p>毘羅宮 南、東之庄、岩井、干潟、九十九里 西、谷津、羽計、樹林寺、山倉 東、石出、今泉、野尻、銚子 北、新宿、小見川、香取、佐原</p>					

(15) 参詣記念、廻国供養碑

昔の人々は、旅に出ることは容易なことではなかった。ましてや、山岳宗教の霊場(出羽三山、富士、御嶽、三峯など)に登拝するともなれば、なおさらであった。人々は、信仰のために経費を積み立て、代表者が参詣をすることを行った。

代参者がその社寺の神礼、護符などを受けて帰り、それを村内にまつり参詣できなかつた人々は、そこに詣でた。また、記念碑や供養塔を建立することも行われた。

第14表 参詣記念——供養塔碑所在一覽

種別	所在地	創立年号	西曆	備考
石尊大権現	舟戸左右大神境内	寛政四年二月	一七九二	願主上代中宇井市右衛門
金毘羅大権現	大久保愛宕神社境内	天保十一年	一八四〇	大願主、儀左衛門以下
天地開闢国常立尊	〃	明治十年	一八七七	
出羽三山供養碑	窪野谷字五保ヶ原	寛政十二年庚申	一八〇〇	小貝野村、窪野谷村、大友村
石尊大権現	〃 窪谷神社境内	嘉永七年	一八五四	その他、伊勢大神宮、金毘羅宮
御嶽山	高部稲生神社境内	明治十二年	一八七九	高部村世話人六名その他二二名
廻国供養塔	根方字山王	文化十年	一八一三	西国四国秩父坂東
御嶽山(石宮)	新切御嶽山境内	明治十三年八月	一八八〇	清滝湯釼大神ほか、発起人小山富之助以下四名
湯殿山行念仏	大木戸諏訪社境内	明治二十七年十月	一八九四	大日如来座像、鳥居脇にあり
三山供養塔	羽計台浅間神社入口	宝永二年十月	一七〇五	出羽三山、三基あり
〃	新宿秀藏院境内	正徳四年	一七一四	
〃	〃	文政四年	一八二一	
〃	石出林福寺境内	明治三十三年	一九〇〇	
〃	寛政九年十月	安政四年十月	一八五七	御山先達東学坊、岩田老翁世話人保立佐右衛門以下五名
〃	東今泉東泉寺門前	天保十二年	一八四一	山門前に、三山供養塔、廻国供養塔等が集められてあり
〃	〃	明治三十三年	一九〇〇	その他三山供養塔二基
〃	〃	大正十四年八月	一九二五	高嶋連次郎他三八名
廻国巡礼塔	東今泉東泉寺門前	享和二年	一八〇二	四国西国秩父坂東成就之処木内「」以下多勢

巡礼 〃	供養塔	青馬字鷲			願主佐久間庄左衛門と小林文右衛門の二基あり
御嶽山	東今泉字大堀				御嶽神社（石宮など）の他講中の碑が建てられてある
東海 靈神	〃		慶応元年十一月	一八六五	布佐村石工兼吉
御嶽行者の線刻絵	〃				世話人遠藤三左衛門以下五名
晃心 靈神	〃		明治十八年九月	一八八五	先達遠藤信忠以下一五名
西海 靈神	〃		明治十八年九月	一八八五	世話係村々社中一同一六名
嶽翁 靈神	〃		寛政十二年十月	一八〇〇	東今泉村伊藤翁馬以下三三名
開道 靈神	〃	小座満願寺境内	安政二年	一八五五	
三山大権現	〃	小座風王大神境内	昭和二十九年	一九五四	高科藤吉以下一四名
御嶽山					
出羽三山参拝記念塔					
伊勢桃山参拝記念碑		小南小野神社境内	大正二年三月	一九一三	
教上 靈神		小南御嶽山	明治二十一年六月	一八八八	
大教正徳義靈拝		〃	大正三年十二月	一九一四	その他、御嶽講碑六基あり
御嶽神		夏目神明社境内	明治三十二年八月	一八九九	祭主布施与右衛門発起人高橋東光以下五名
伏見桃山参拝記念		宮本雲井ヶ岬	大正二年九月	一九一三	青馬区遠藤清四郎ほか一三名
勢力 靈神		小南金比羅山	明治二十三年四月	一八九〇	通称勢力山、ほかに栄力仙力靈位と刻あり
東照宮明治神宮など参拝記念		大友神社境内	大正十四年四月	一九二五	
出羽三山参詣供養塔		宿浜延命寺境内	天明八年十月	一七八八	飯田要平以下一一名
〃		〃	享和二年十月	一八〇二	
〃		〃	文化八年	一八一	

(16) 筆子碑

江戸時代における寺子屋師匠の果たした役割は、後世のために非常に大きかったといわれている。郷土においても、子供たちに文字や学問を教え、あるいは女子に裁縫を教えた師匠たちが、多く存在したと思われるが、その調査は極めて困難であった。筆子碑一覽表は、筆子と刻まれた墓碑をもとに、近年に至るまでの門弟によって建てられた碑を対象としたものである。江戸時代の寺子屋師匠については、まだ氷山の一角といえようである。

第15表 筆子碑一覽

師名	所在地	造立年月	西暦	備考
土屋吉郎兵衛充豊	根方 東福寺	明治二十四年四月二十二日	一八九一	発起人銘記なし〔辞世、過ぎたりし永き浮世は夢うつつ心残りは何一つなし〕
土屋吉郎兵衛充雄	〃	嘉永三年七月十四日	一八五〇	
多田忠兵衛	根方 西福院	文化二年十月没	一八〇五	
越川五郎兵衛	大木戸坊内墓地	明治二年九月九日没	一八六九	
石毛嘉右衛門	鹿戸石毛博家	明治二十八年四月	一八九五	幼名栄太郎、寿碑
山本菊松	仲内共同墓地	大正八年七月十五日	一九一九	笹川小学校同窓会門下一同、裏に銘記あり
佐久間仲右衛門	青馬字向台	嘉永四年六月三日	一八五一	高嶋政吉以下約四〇名
多田治右衛門	今郡薬師堂境内	明治二十年	一八八七	生徒一同
東谷先生碑	〃	天保丙申三月	一八三六	江戸後学 峯戊中撰 和算の塾を開く
保立忠右衛門	石出林福寺境内	嘉永三年十月	一八五〇	裏に創立者法弟長福寺積胤とあり
保立翁頌徳碑	石出字上通	明治十四年七月	一八八一	造立者林弥惣以下七〇数名
法印権大僧都果心不正位	新宿秀蔵院	不詳		



長 豊 大 和 尚	〃	〃	一八七八	銘記あり
柳 堀 東 堅 翁 之 壽 碑	新 宿 字 上 町	明 治 十 一 年	一九二八	創立者鎌形大助以下大勢、壽蔵碑
柳 堀 翁 碑	〃	昭 和 三 年	一八八三	創立者筆子大勢
鎌 形 三 木	小 座 駒 崎 墓 地	明 治 二 十 六 年 八 月 没	一九三七	小座飯笹興五右衛門以下大勢
小 和 瀨 韓 助	〃	昭 和 十 二 年 建 之	一八九九	向後七郎兵衛ほか二四名銘記あり
岡 野 茂 兵 衛	〃	明 治 三 十 二 年 没	一九〇六	發起人野口豊蔵以下一三名
往 古 光 孝	夏 目 八 幡 社 境 内	明 治 二 十 九 年 四 月	一八六八	世話人七名門弟四〇数名
菅 谷 先 生 墓	小 貝 野 字 迎 地	慶 応 四 年 二 月	一九一三	塾生宮本岩太郎以下約五〇名当寺一七世和尚
高 橋 要 右 衛 門	高 部 字 原	大 正 二 年 三 月	〃	当寺一世的和尚、一四世が天保十四年とあり
春 山 洞 龍 大 和 尚	大 久 保 東 徳 寺	不 詳	〃	創立者弟字中二二名
大 髯 大 和 尚 禪 師	〃	明 治 二 十 一 年	一八八八	發起人高木伊右衛門、高安源兵衛、高木佐右衛門以下
菅 谷 信 行 翁 壽 碑	神 田 字 白 毛	明 治 二 十 四 年 十 二 月	一八九一	約四〇名
宇 井 弥 左 衛 門	八 木 山 共 同 墓 地	〃	〃	世話人菅谷治兵衛以下六名ほか筆子三〇数名
藤 木 周 之	東 和 田 東 関 墓 地	明 治 十 六 年 一 月	一八八三	筆子中
渡 辺 治 左 衛 門	〃	天 保 七 年	一八三六	碑文あり、まわりの石の柵には門弟子六〇数名刻みあ
渡 辺 致 堂	舟 戸 夏 方 墓 地	明 治 十 四 年 七 月	一八八一	り
穂 野 五 二 郎	〃	昭 和 八 年 十 月	一九三三	造立者、神代村修養会、ほか三団体
飯 田 平 左 衛 門	平 台	明 治 十 八 年 十 月	一八八五	筆弟高木章索以下百数十名
吉 田 清 左 衛 門	平 山 字 法 木 作	明 治 三 十 三 年 三 月	一九〇〇	宇井兵作上代貞次郎以下五名
法 印 長 建	東 今 泉 東 泉 寺	天 保 十 年 四 月	一八三九	筆子中、長恵建之
飯 田 作 右 衛 門	大 友 共 同 墓 地	明 治 二 十 四 年 十 一 月	一八九一	幹事向後昇ほか八名、河連颯蔵ほか七八名
青 埜 氏 (義 和 塾)	小 南 蔵 福 寺	〃	〃	「秀弘様のお日待」が子々孫々に至る今日まで続けら
秀 弘	窪 野 谷 天 福 寺	明 和 八 年 十 一 月	一七七七	

師名	所在地	造立年月	西曆	備考
鎌形大助	小座鎌形志郎家	大正四年四月	一九一五	門弟大勢銘記 れている
遠藤三左衛門	東今泉三本松	明治三十年三月	一八九七	青柳清蔵ほか五〇数名
向後晚翠	小南城山	昭和十四年九月	一九三九	師弟一同 東城村初代校長
裁教妙縫信女	小南蔵福寺			宇井八郎右衛門家墓地 とく以下二六名銘記あり
松茸翁	平山法木作	明治三十三年	一九〇〇	松茸翁寿蔵碑 塾生中

(17) その他の碑および石造物

第16表 句碑および歌碑一覧

碑文	種別	所在地	造立年月	備考
梅が香にのつと日の出る山路かな もの言ハ唇寒し秋の風 梅が香にのつと日の出る山路かな 野を横に馬引きむけよほととぎす 一疋のは称馬もなし かわちどり (はせを) 名月や鶴脛高き遠ひかた 諡をとまにまばゆし寺の秋(夏山) この他句多数	句碑	大久保愛宕社境内 小貝野六所社境内 平山法木作 宮本東大社境内 東今泉金比羅神社	昭和八年十月 嘉永二年仲夏 不 不 明治癸未	発起人向後松陰以下一〇数名 寄進俳人名は、小貝野、平山村に多い 他に二〇数句 美遊ほか 翁愚不肖桜居拜書 鉄牛禪師銅碑の玉垣、約六〇句
玉垣	宮本東大社境内	嘉永七年三月		境内にある玉垣、風化して不明瞭の所あり、



碑文	種別	所在地	造立年月	備考
<p>ひそとしづけし深山の寺は 刻不鮮明 ひさかたの雲井桜はやまとほく 水のながぎぞにほいなりける</p>	墓石 歌碑	東今泉東泉寺 宮本雲井ヶ崎	文化十三年二月 昭和十一年四月	歌二首法印全恵不正位墓 橋村商工会桜植付記念碑
<p>桜花栄ある御代に咲き散ると 悔いを残さで出で征く我は 君のため長き一世を若桜 散りて甲斐ある命なりせば 南風や、汗にまみれる軍服を ぬいてかわかす晝餉時かな おくふかくゆけば左右に滝のおと 奥入瀬川のながれうつくし</p>	歌碑	宮木雲井ヶ崎 根方東福寺	明治甲申 昭和五十七年	土屋家墓地
〃	〃	孤敷墓地	昭和五十四年七月	森保、中支において戦死
〃	〃	新切西之内墓地	昭和四十年	林正義家、昭和三十六年十月和田にて

第17表 各種記念碑

種別	所在地	造立年号	備考
忠魂碑	大久保東徳寺	昭和二十七年三月	大久保一同
日露戦役戦捷記念碑	小貝野六所神社前	明治三十九年四月	造立秋幡政蔵ほか大勢
忠魂碑	小貝野字	昭和三十五年三月	神代地区遺族会
日露戦役殉難者之碑	〃	明治三十九年五月	神代村
忠魂碑	大木戸諏訪神社境内	昭和三十年三月	発起人土屋進以下大勢
〃	〃	大正初期	

考

鹿野戸妙幢院	大正十二年七月	願主石毛与三郎、当山三十六世曉知
新宿秀蔵院	明治四十四年十一月	さらに昭和二十九年の碑、二基あり新宿区民一同
戦没者記念碑	昭和二十六年	
招魂碑	明治二十九年	日清戦役戦没者慰霊碑
征清軍紀功碑	明治二十八年	日清戦役従軍者名あり
忠魂碑	大正初期	
從軍碑	大正四年五月	明治二十七、八年、同三十七、八年戦病死者名
戦没者慰霊碑	昭和二十七年	日清、日露、従軍者名
慰霊碑	昭和二十七年八月	
招魂碑	昭和二十七年四月	東城地区大勢
左右大神昇格記念碑	昭和三年四月一日	区民一同
新道開設記念碑	昭和四十四年七月	寄附連名
耕地整理記念碑	昭和四十七年一月	鈴木賛、向後省三、ほか大勢
常之丞之碑	大正十三年一月	高木理一ほか大勢
諏訪大神御祭田記念碑	明治二十年六月	発起人成毛みの、飯田正太郎等七名
遙拝記念碑	昭和九年十一月	献納者多田庄兵衛ほか二〇数名
伏見宮御祈願所	昭和三十八年十一月	神武天皇、明治天皇、二基あり
祈念碑野見宿祢命	天保十三年七月二十七日	五十嵐光弘ほか一四名再建
天保水滸伝百三十周年記念碑	昭和三十七年六月	願主岩瀬繁蔵(当時数へ年三十四歳)
		三波春夫

種別	所在地	造立年号	備考
笹川繁蔵之碑	宿浜延命寺	昭和十五年十月	発起人東京久保木子之助、笹川野口藤兵衛、寄附者大勢
笹川繁蔵最後の跡	大木戸別当内	昭和三十八年七月	天保水滸伝遺跡保存会
平手造酒供養祈念碑	〃 西浜墓地	昭和四十一年	林正義以下三五名
御即位記念	根方字山王	不詳	
耕地整理記念碑	根方字山王	大正十四年三月	多田庄兵衛ほか大勢
頌徳碑(向後)	大木戸坊内	昭和八年一月	発起者、石井多年ほか大勢
堺屋頌徳碑	青馬字向台	昭和四十八年	故堺屋仲右衛門翁、発起者山本氏成ほか六名
造営記念碑	新宿八坂神社		
禊教大祓之碑	谷津字秋山		
植樹記念碑	宮本字白幡	明治二十九年	
開田碑	東今泉浜		
角觥再興之碑	宮本東大社	明治二十七年	山本源太郎ほか大勢
青銅鳥居記念碑	〃	明治十四年九月	
社殿修造記念碑	〃	昭和三十一年十一月	県知事柴田等以下大勢
献納記念碑	〃 境内ウラ	大正八年	造立者 東京子爵東胤祿
〃	〃	大正五年九月	東莊講世話人、ほか献納記念碑十数碑あり
鉄牛禅師銅碑	小南城山	昭和二十五年八月	再建、約五m四方の玉垣に句漢詩など刻まれている
同再建二百五十年祭碑	〃	〃	寄付者多勢
同最初の寄附連名碑	〃	明治三十七年十一月	藤原綱村(伊達)の撰文、宗基の歌、刻みあり
同師弘法利民碑	〃		
大根栄吉君碑	〃	大正二年三月	賛助人二〇七名、発起人二一名外、同期卒業生一同

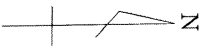
念仏師高橋彌太郎記念碑	八重穂	大正十五年旧九月	吉田政蔵以下一六名
在郷軍人分会蓄積基金碑	小南城山	大正九年十月	
桁沼土地改良記念碑	根方字下川	昭和四十三年十月	多田秀、山内虎彦ほか大勢
農業構造改善事業記念碑	青馬字新田	昭和四十六年二月	多田秀、山本健蔵ほか大勢
土地改良記念碑	八重穂稲荷神社境内	昭和四十年八月	鈴木贊、向後省三、ほか大勢
道路竣工記念碑	夏目八幡様境内前	昭和十二年六月	山本真太郎ほか五名
道路改修記念碑	夏目字東替地	昭和二十七年	
頌徳記念碑	夏目字禅定院	明治四十四年	
修復記念碑	小南小野神社	大正九年十一月	
夏目支区圃場整備事業記念碑	夏目字西替地	昭和五十年八月	高木融、向後彰ほか大勢
耕地整理記念碑	夏目字西	昭和四十二年八月	鈴木贊、向後省三、押山一雄、ほか大勢
溜池政修記念碑	青馬堰	昭和十一年七月	遠藤利僊、ほか大勢
日露戦捷記念碑	栗野青年館	明治三十九年三月	高橋俊蔵、ほか七名
石造鳥居建設記念碑	大友、神社境内	大正二年九月	飯田慶太郎、ほか九名

第18表 奉納石造物その他所在一覧

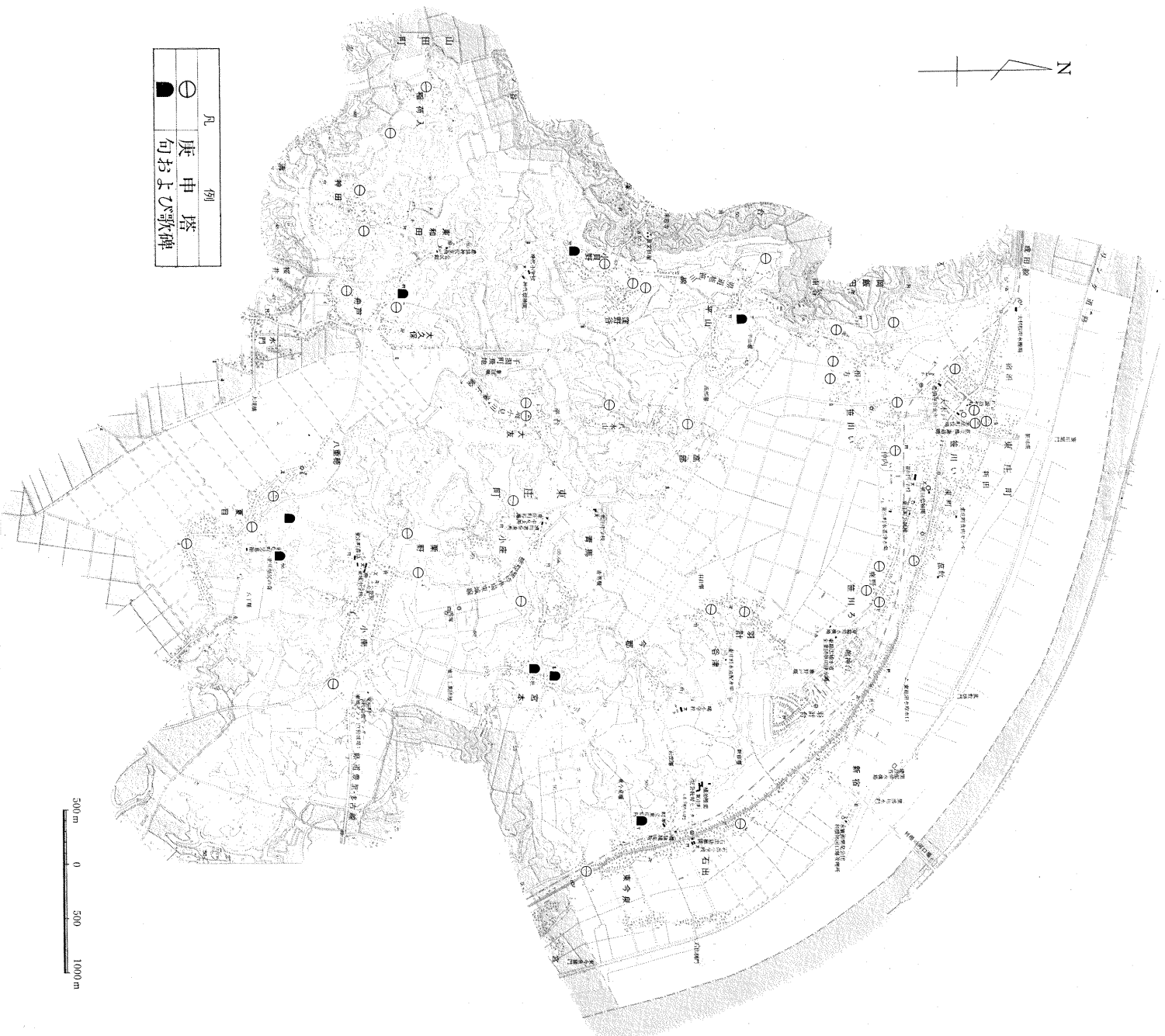
種別	所在地	造立年号	西暦	備	考
鳥居礎石	笹川諏訪神社	寛政十一年九月	一七九九	大正十一年九月再建	
力居石	夏目八幡神社境内			奉納向後七郎衛門三代目元吉、孫宇ノ沢亀太郎記	
〃	小座新田墓地			小座村と銘記	
〃	舟戸左右大神鳥居				

種別	所在地	造立年号	西暦	備考
宝篋印塔 クリカラ塔 〃 阿弥陀如来三尊と 六地藏	根方西福院 根方東福寺 平山字稻荷面 根方西福院 〃 今郡薬師境内 小南蔵福寺	享和四年四月 不 明 宝曆十三年三月 寛政十一年七月 不 明	一八〇三 一七六三 一七九九 一九七八	造立者多田舎人知義 成毛勘右エ門政清、善男女 施主、多田知義当山現住有雄代 近年、墓地在整備された
無縁仏石塔塚 舟形手水舎 わにぐち つりがね 五輪塔 〃	舟戸左右大神 小貝野香樹寺 〃 薬師堂 根方東福寺 〃 宮本東大社	昭和五年竣工 元文四年七月 貞享三年七月 天保三年十一月 慶安元年正月 承応元年七月 文化七年	一七三九 一六八六 一八三二 一六四八 一六五二 一八一〇	氏子各村々、舟戸、桜井、大久保、和田、関戸 施主伊藤把右衛門 名主与兵衛 板碑を除いては町内最古の年号銘記石塔と思われる 〃 願主羽計村浜風藤八、氏子中、青馬村若者中
相撲取り像	宮本東大社	文化七年	一八一〇	願主羽計村浜風藤八、氏子中、青馬村若者中

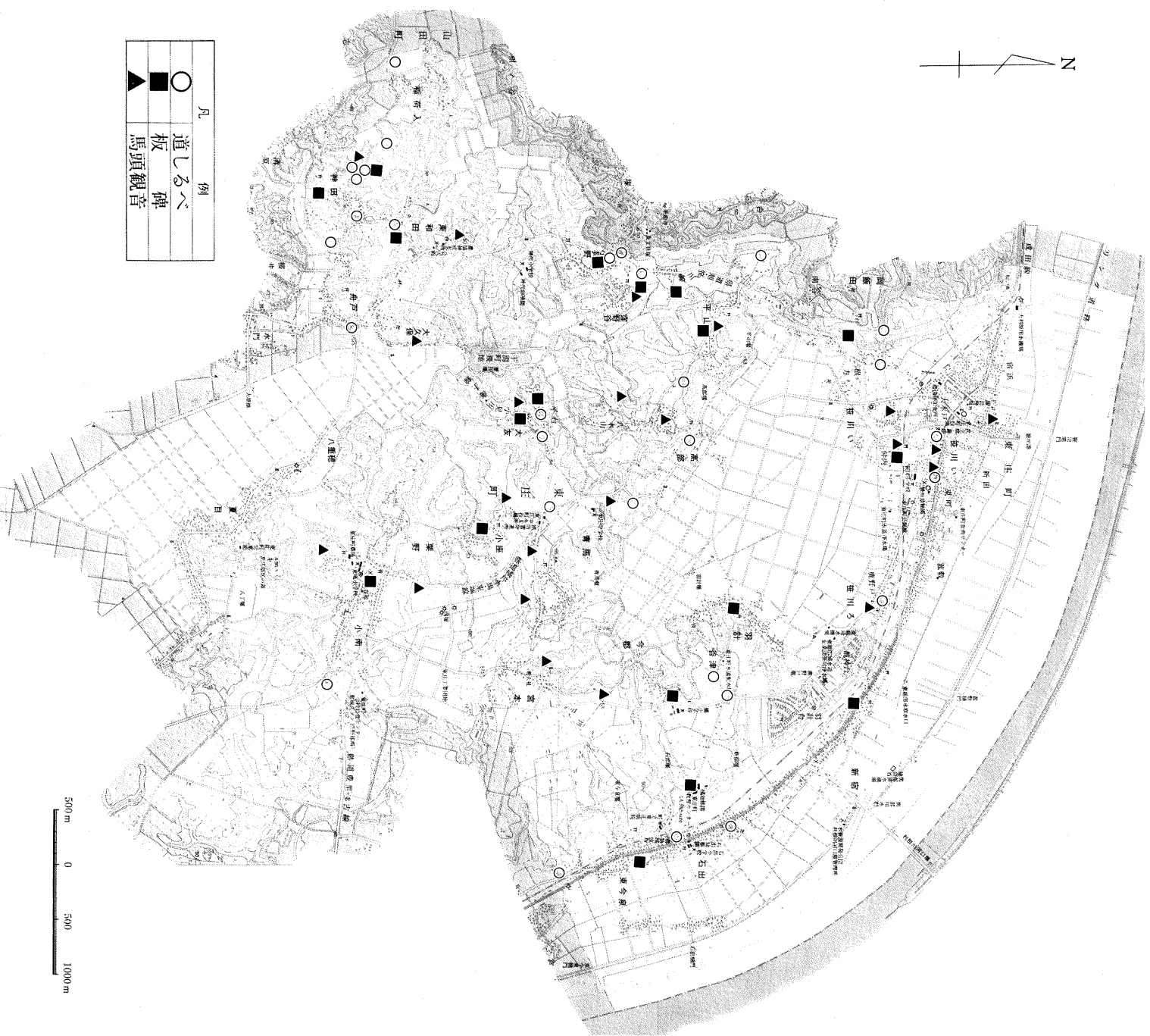




○	凡
⊖	塔
●	申
○	句
○	および歌碑



第4図 東庄町庚申塔・句および歌碑分布図



○	道しるべ
■	板
▲	馬頭観音

凡 例

第5図 東庄町道しるべ・板碑・馬頭観音分布図